信長と秀吉と家康

池波正太郎

信長と秀吉と家康

池波正太郎

信長と秀吉と家康

池波正太郎

東京文藝社

東京文藝社
定価850円

5170 ISBN4-8088-0010-1 C0093 ¥850E

信長と秀吉と家康

池波正太郎

東京文藝社

信長、秀吉、家康の運命的な
軌跡と三大名将をリレー式
に描く戦国ダイジェスト版

東京文藝社 定価850円

池波正太郎

池波正太郎
好評既刊

戦国幻想曲 980
この父その子 900
スパイ武士道 900
夜の戦士 1300
江戸の暗黒街 900

5170 ISBN4-8088-0010-1 C0093 ¥850E 東京文藝社

信長と秀吉と家康

池波正太郎

東京文芸社

信長と秀吉と家康

目次

織田信長　五
豊臣秀吉　二四
徳川家康　三三
関ヶ原の決戦　三五
豊臣家ほろぶ　三五

装幀　村上　豊

織田信長

気ちがい大将

応仁の乱の後、百年もの長い間、日本国じゅうに、戦争が絶えなかった。

これが、いわゆる戦国時代といわれた時代である。

織田信長は、この国のみだれをしずめ、その強い力で天下をおさめることができた、はじめての武人であり、大名であった。

信長は、少年のころから、「敦盛」という舞いにあわせた文句の中で、

「人間五十年。下天（げてん）のうちをくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり」

というのを好んだ。

この意味は、

「人間というものは五十年も生きれば、やがて死ぬものなのだ。そう考えてみると、世の中のすべてのことが夢か、まぼろしのようにしかおもえない」

とでも、いったらよいだろう。

信長は十四歳のとき、父の織田信秀にしたがい、はじめて戦場に出た。そのとき、
「父上。人間というものには、ただひとつ、生まれたときから、はっきりとわかっていることがありますね」
と、いった。
「ふむ、それは何か？」
「それは、死ぬことです」
「なるほどな」
「それだけが、はっきりとわかっています。あとのことは、どうなるかわかりませぬ」
いくら、戦国の世のことではあっても、十四歳の少年が、このようなことを考えていたことは、おどろくべきことではないか。
父の信秀も、びっくりしたように、しばらくの間は、じっと、わが子の顔を見つめていたが、そばにいた家来の平手政秀へ、
「信長は、きっと、よいあとつぎになってくれるであろう」
うれしそうにささやいたという。
そのころは、長い長い戦争がつづくうちに、天皇がおられる京の都も荒れはててしまい、天皇のかわりに国をおさめるはずの足利将軍の力も、おとろえてしまっていた。
つまり、ほんとうならば天皇をまもり、将軍をたすけるはずの武士たちが、それぞれに自分の国へかえってしまい、自分の国の町民や農民たちをしたがえ、かってに勢いをのばしはじめた。

だから、天皇も将軍も、身分のたかい人々も、こうした武士たちの力をおさえきれなくなってしまっていた。実力さえあれば、どんなに身分がひくくて、いやしめられていた者でも、上の者をおしたおして勢いをひろげるという世の中なのである。
むかしは、将軍に命じられて諸国をまもっていた「守護大名」という、武士の中でも身分がよく、力もあった人たちさえも、うっかりしてはいられなくなった。
信長の父、織田信秀も「守護大名」の家来だったのだが、そのうちに力をたくわえ、尾張の国（愛知県）の中でも、その名と力の知られた大将になった。
信秀が二十五歳のとき、あとつぎの子の信長が生まれた。
そのころ、織田信秀の城は那古屋（いまの名古屋）にもあって、信長は、いまの名古屋城の一角で誕生したのである。
少年のころの信長を、家来たちは、「あばれ法師」と、かげでは、よんだ。これは、信長の子供のころの名を「吉法師」といったからだ。
子供のころ、信長は、ひとりきりで、城の外へ出てゆき、平気で町や村の子供たちと友だちになり、まるで、けだものの子のように野や山をかけまわったり、もぎとったカキやクリなどを、むしゃむしゃ食べながら町の中をあるいたりした。
小さいころも、
「あのような若さまでは、殿さまのりっぱなあとつぎにはなれまい」
と、うわさをされたほど、そのわんぱくぶりは、はげしかったようだ。

それも、ふつうのあばれぶりではなかったらしい。
それは、父の信秀が死んだとき、信長がしたことをみてもわかる。
このとき、信長は十八歳になっていたし、美濃（岐阜県）の斎藤道三という大名のむすめを妻にしていたほど、おとならしくなっていた。
その信長が、父、信秀の葬式がおこなわれていた万松寺という寺へあらわれたのをみた人たちは、
「あっ……」とおどろいた。
あたまの毛も自分でむすんだまげで、むさくるしく、長い刀と短い刀をなわで巻いて腰へさし、はかまもつけずにあらわれた信長は、ずかずかと、仏前に、近づいた。
そして、いきなり、焼香につかう抹香をつかみ、父の位はいへ投げつけたのである。
これは、葬式のときにあげる線香を、父の死んだからだへなげつけたのとおなじことで、
「あばれ法師ではすまぬことになった」
「ばかもばか、大ばかものじゃ」
「いや、気がくるっている。気ちがいじゃ」
「あのようなあとつぎでは、織田の家もつぶれてしまうことだろう」
たちまちに、この評判がひろまってしまった。
しかし、信秀の葬式を見ていた旅の坊さまだけは、
「あの信長どのは、いまにきっと、えらい殿になるだろう」
と、いったそうだ。

ほめてくれたのは、この坊さまぐらいなもので、せっかくなき父のあとをつぎ、織田家のあるじとなった信長だが、
「これから、いったいどうなるのだろう」
家来たちも心配でたまらない。
あいかわらず、信長は、はだか馬にのって町や村をかけまわり、村の若者たちとすもうをとったり、酒をのんだりしているのであった。
そのくせ、信長は、弓、やり、兵術などにも熱心で、何をやらせても、たちまちにのみこんでしまい、教える者をおどろかしたという。
りこうなのか、ばかなのか……。
とにかく、信長のことを、
「大ばかで、気ちがいである」
という評判は、諸国の大名の耳へもきこえてしまい、
「まことに、こまったものじゃ」
と、父の代から織田家の家老をつとめている平手政秀は、ごはんものどに通らぬほどだ。
むりもない。日本国じゅうは、たくさんの力のつよい大名たちが、それぞれの土地におり、自分たちの国の勢いをのばすことばかり考えている。
こちらに少しのすきがあれば、相手はすぐに攻めかかってくるし、そのいくさに負ければ、こちらの国はたちどころに相手のものとなってしまう。

ゆだんもすきもない時代であった。

織田信長が父からゆずりうけた尾張の国のとなりにある三河の国（愛知県の一部）にも、駿河、遠江（静岡県）から今川義元が攻めこんできた。

そればかりではない。

信長が大ばか者だというので、信長の弟の信行が一部の家来たちといっしょになり、兄にそむこうとした。

このたくらみには、信長の母もくわわっていたというのだから、よほどに信長は、あいそをつかされていたものらしい。

家来たちの中には、

「いまのうちに、今川義元のほうへ近づいておいたほうがよい」

と、思うものもでてきた。

だから、平手政秀は、

「殿さまは殿さまらしく、しなければなりませぬ」

なんども、若い主人の信長をいさめたが、少しもいうことをきいてくれない。

そこで政秀は、

「こうなれば、自分が死んで殿さまをいさめるより、しかたがない」

決心をした。

そして、平手政秀は、信長をいさめる長い手紙をかき、腹を切って死んだ。ときに、一五五三年

（天文二十二年）というから、いまから、およそ四百年以上も前のことである。

信長は、二十歳になっていた。平手政秀が死をもって、自分をいさめてくれたことを、信長は心の中で、おろそかにしなかった。

政秀の死をとむらうために、政秀寺という寺を新しくたてたことによっても、信長の心がわかる。

けれども、おもてむきは、信長のすることにあまりかわったこともなく、大ばか者とか、気ちがい大将とかの評判は、消えそうになかった。

「いったい、どれほどの大ばか者なのか、わしが、たしかめてやろう」

といったのは、信長の妻の父である斎藤道三であった。道三は、油売りの商人から身をおこし、美濃の国をおさめる大名に成り上がった豪傑だ。

むすめをやったむこだからといって、それがたよりにも力にもならぬ男ならば、しかたもない。

「わしが、信長にかわって、尾張の国をおさめてやろう」

と、道三は思っていたにちがいない。

「むこどのに、一度あいたいものじゃ」

道三が、つかいの者を信長の城へさしむけると、

「しょうちいたしました」

すぐに、信長はこたえた。

信長が妻の父に会ったのは、富田というところにある正徳寺という寺であった。

斎藤道三は、早くから会見の場所へやってきて、

「信長め、どのような姿をしてくるか、そっと見てやろう」
といい、寺には千名ほどの家来をのこし、自分は、町はずれの百姓の家へはいり、戸のすき間から、信長がやってくるのを見ようとした。
やがて、信長の行列がきた。
「ふうむ……」
それを見て、道三は思わず、うなり声をあげた。
行列は八百人ほどで、長い長いやりを五百本も立て、弓や鉄砲も五百ほど持たせた堂々たるものなのだ。
そのまん中に、馬にまたがった織田信長がいる。これを見て、また道三は、ひくいうなり声を出した。
いつものように、むぞうさなかみかたちで、着ているものはゆかたのようなものだし、はかまもつけず、にゅっと、たくましい足をつき出し、腰には火打ち袋だの、ひょうたんだのをぶらさげ、刀には、なわをまいている。
まるで、こじきの大将である。その、こじきの大将が、りっぱな軍隊をひきつれてやってくるのだ。
斎藤道三は、あわてて裏道をまわり、ひと足さきに寺へもどった。やがて、信長があらわれた。
道三は、ぎょっとした。
いつ、着かえたのであろうか。

信長は、きちんとした着物とはかまをつけ、かみもきれいにゆいなおし、りっぱな刀をさし、礼儀正しく義父の前へきて、あいさつをした。
道三は、またうなった。
ふたりの会見がおわり、信長がかえってゆくのを見送っている道三に、
「やはり信長どのは、ばか者でございますな」
と家来のものがいった。
すると、道三は、にがにがしい顔つきになって、いった。
「ざんねんなことではあるが、いまに、わしの子供たちは、あの大ばか者の家来になることであろう」

清洲城攻め

織田信長は、二十歳のころから、急に、することなすことが変わってきた。
少年のころは、少女の美しい顔だちで、何かの祝いの席で、女の着物をつけて踊ったりすると、
「あの、あばれ法師が、こんなに美しい女にばけるとは……」
人々をおどろかせたこともある。
その信長の美しい顔だちが男らしくひきしまってきて、細く見えたからだつきも、なんとなく、がっしりと感じられるようになった。

そして、信長は、いままで胸のそこで、じっとひとりで考えていたことを、びしびしと実行にうつしはじめた。何よりも先に、自分の国の中をととのえねばならぬ。

名古屋の城から二里（八キロ）ほどはなれたところに、清洲の城がある。

この清洲には、織田信友がいた。信長とおなじ姓を名のる信友だが、ここの織田家は、信長にとって、主人すじにあたる。

信長の父や祖父も、むかしは、この清洲の織田家につかえていたのだ。

さて……。

この清洲の織田信友が、もとは家来すじにあたる信長を打ち倒そうとした。

いまは、家来すじの信長のほうが、勢力も大きくなっているので、信友はくやしかったにちがいない。

ところが、信長は、このたくらみを早くも知ってしまった。

「よし！」

少しのためらいもなく、信長はおじの信光といっしょに清洲の城へせめよせ、はかりごとをもって信友を倒し、ついに信長は清洲の城を自分のものにした。

このとき、織田信長は、二十二歳になっている。

信長は、本城を名古屋から清洲にうつし、今度は、自分の家のしまつにとりかかった。

弟の信行が信長にそむこうとしていることは、すでにのべたが、いよいよ、この問題をかたづけることにした。

信行は今川義元とも手をにぎり、兄を殺そうとしていたらしい。

信長も心をきめ、

「自分はいま病気をしている」

と、いつわり、信行をだまして清洲城へよびよせ、城の中で切腹をさせた。

このようにのべると、信長がひきょうのように見えるが、そうではない。

もしも、正々堂々といくさをしかければ、弟のほかに、弟についている家来たちとも戦わねばならない。

そうなれば、信長の兵たちにも、戦死するものがでる。

自分の兵も弟の兵も、すべて同じ織田の家来なのだから、このようないくさをしては、たいへんなむだになるし、損にもなる。

もとはといえば、弟の信行が兄にそむくという不義をはたらいたのだから、弟ひとりを討てばよいと考え、おびきよせたまでであった。

そして、信行が死ぬと、信行の家来たちは、みな信長のもとへかえってきた。

つぎに、信長は、自分とは母がちがう兄の信広がそむいたのをおさえつけてしまい、てきぱきと自分の一族のあらそいを解決し、尾張の国を、ほんとうの自分の国にしてしまったのである。

それにしても、なぜ信長は、あのように「大ばか者」とか「気ちがい大将」とか、よばれるようなまねをしつづけていたのか……？

信長は、自分が「ばかもの」になることによって、弟たちや親類たちや、また家来たちや妻の父

や、それから諸国の大名たちが、
「おれのことを、どのような目で見ることだろうか?」
それをためしていたのかもしれない。
また、はじめのうちは、「ばか」といわれても、いざというときまで、自分の実力をたくわえておき、自分を倒そうとしているものたちをゆだんさせていたのかもしれない。
けれども、いちばん、信長という人物を知るためには、
「おれは、いままでの古い習慣や、めんどうくさいしきたりなどにとらわれず、おれはおれのおもうままに生きてみせるぞ!」
という決心を実行にうつしたことが、ほかの人たちから見ると、
「あれは大ばかものだ」
に、なったのであろう。
とにかく、日本の戦国時代も、ようやく新しいうつりかわりのときにさしかかっていた。
現代から、およそ四百年も前のそのころは、日本だけが戦国時代であったわけではない。
イギリスもフランスもイスパニア（スペイン）も、世界じゅうが、戦国時代であったといってよい。
しかし、日本は、まだ外国の力がおよばぬ海にうかぶ一つの島であったから、おなじ日本民族の戦争がくりかえされ、この戦争とはかかわりあいがない天皇がおられて、
「早く、力の強い、頭のすぐれた大名があらわれ、天下のさわぎをしずめるように——」

と、考えておられた。
日本にはむかしから、天皇という国の中心があり、この中心だけは、なくなったことがない。
それだけに、
「天皇がおられる京の都へはいり、この都をおさめ、天皇の信頼をうけ、天皇をまもり、天皇につかえる」
ことが、天下をおさめたことになるのである。
もちろん、そのためには、自分の国から京都へつづく国々を、すべて自分のものにしてしまわなくてはならない。だから、京都から遠くにいる戦国大名たちは、たいへんに不利なことになる。
越後（新潟県）の上杉謙信や、甲斐（山梨県）の武田信玄のように、戦争にも強く人がらもりっぱな大名たちが、ついに天下をおさめることができなかった理由の一つは、このことにある。
そこへゆくと、織田信長は、いまの名古屋市に城をかまえていたのだから京都へは近い。
天下をとるためには、つごうがよいわけであるが、そのころの信長には、まだ天下をおさめる自信があったわけでもあるまい。
信長が、
「よし。このおれが日本じゅうの大名たちに頭を下げさせ、天下をおさめてくれよう」
と、思いはじめたのは、あの桶狭間の戦いののちではなかろうか。

強敵、今川義元

そのころ――。

今川義元は、駿河、遠江、三河の三つの国を、ほとんど自分のものにしてしまっていた。

「いよいよ、わしが京の都へのぼり、天皇と将軍のゆるしを得て、天下をおさめるときがきたようじゃ」

と、義元は自信にあふれていた。

三河の国の松平元康（のちの徳川家康）も、今川義元にこうさんしていたし、あとは、となりの国の織田信長をほろぼし、一気に京都をめざすつもりである。

まえまえから、織田と今川は何度も戦争をしつづけてきた。

信長の父、信秀に、今川義元が負けそうになったときもある。

「いまとなっては、信長ごときをふみつぶすのは、わけもないことじゃ」

と義元はいった。

それは、だれが見てもうなずけることであった。

もともと今川家は、足利将軍とも関係がふかい、りっぱな家がらである。しかも、足利将軍の力はおとろえてしまい、世の中はみだれている。

「わしが天下をおさめなくてどうするものか」

という義元のほこりも、あたりまえであった。

そして、力の強い戦国大名の中では、今川義元が、もっとも京の都に近いところにいたのである。しかも、義元は、関東の北条家の姫を、自分の子の氏真の嫁にむかえ、甲斐の武田信玄の子の義信へは、自分の娘を嫁にやった。

こうして、自分の国のうしろにある北条と武田の両家と親類になり、京都へのぼる自分のうしろを、おびやかされぬようにしたわけである。

さて――。

いよいよ、今川義元は四万（二万五千ともいわれる）の大軍をひきいて、駿府（いまの静岡市）の城を出発した。ときに、一五六〇年（永禄三年）五月十日である。

十八日には、早くも信長の国である、尾張の沓掛というところへはいってきて陣をかまえた。

織田家では、大さわぎになった。

「いよいよ、今川が全力をあげて攻めかかってきたぞ」

「今川は、四万の大軍というではないか」

「それにくらべて、こちらは三千か四千。とても勝ちめはない」

むりもなかった。

このときの今川と織田の国の力をくらべると、今川のほうが五倍か六倍ほども大きい。

軍隊の力も、およそ十倍というところだ。

「こうなれば、お城にたてこもってたたかうより、しかたはありますまい」

と、家来の林佐渡守が織田信長にすすめた。すると信長がいった。
「城の中にいても、どうせ勝ちめはない」
「なれど……」
「だまれ。わしが大将じゃ。わしは、わしのおもうとおりにする」
おもうとおりにする、というのは、いったいなにをするつもりなのか……。
「丸根の城も、あぶないそうでございます」
「鷲津の城も、まもなく敵の手に落ちましょう」
と、しきりに知らせがはいってくる。
この二つの城が落ちれば、今川の大軍は一気に、信長がいる清洲の城へおしよせてくることであろう。
それなのに……。
「まあ、みなのものは酒でものみ、今夜は、ゆっくりとねむれ」
などと、信長は平気で家来たちに酒をふるまったりしているのだ。
この五月十八日の夜は、風も絶えて、むしあつかった。
そして、丸根と鷲津の城は、ついに今川軍に攻めとられてしまった。

桶狭間の戦い

信長は、酒をのんで、短い時間だが、ぐっすりとねむった。家来たちもいないへやの中で、急に信長は、目をさまし、
「だれか、おるか」
と、声をかけた。
「はい」
そばにひとりつきそっていた、こまづかいの女でさいというものが返事をすると、信長が身をおこし、
「いま、何時ごろだ?」
「はい。夜中をすぎました」
そこへ、数名の家来が心配そうな顔つきではいってきた。
「出陣のしたくをせよ」
と、信長は命じ、いきなり立ちあがって、好きな敦盛の曲をうたいながら舞いはじめた。
「……人間五十年。下天のうちをくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり。ひとたび生をうけ、滅せぬものあるべきや」
うたいおわり、着ものをぬぎすてて、よろいをつけ、湯をかけた飯を立ったまま食べると、かぶとをかぶり、太刀をつけた。
「ほらを鳴らせ!」
と、信長はさけんだ。

清洲の城内に、
ぼおう……ぶおう……。
と、ほら貝の音が、わきおこった。
出陣の合い図である。
「馬をひけい！」
信長は馬にまたがると、自分の軍隊があわてて、出陣のしたくにかかりはじめたのに、これを待とうともせず、
「つづけ」
すさまじい勢いで、城の門から飛び出していった。
あとにしたがった家来は、岩室長門守など、たった五名であった。
このとき、織田信長は二十七歳。
どちらにしても勝ちめはないいくさなのだから、すべてを天運にまかせ、大将である自分がまっさきに立って、今川の本陣へ切りこむかくごなのである。
そう心にきめたときから、信長は、いっさいののぞみをすててしまった。
家来たちがついてこなくともよい。
織田の大将である自分が、敵の大将の本陣へ切りこむこと。これだけが、戦国の世に生きる自分のすることだと、かくごをしてしまったのである。
だから酒ものみ、ねむりもした。ぐずぐずともがいてみてもしかたがないと、思いきわめたからである。

このように、すさまじいかくごをした主人の信長が飛び出していくのを見ては、家来たちもだまってはいられない。
「それ、殿さまにおくれるな！」
「急げ、急げ！」
つぎつぎにしたくをととのえ、百騎、二百騎と、信長のあとを追った。
名古屋をすぎ、熱田神宮までくると、
「われに勝たせたまえ」
信長は、いのりをささげた。
そのうちに夜もあけた。
家来たちも、兵隊をふくめて、千人あまりが集まってきていた。
「それ、すすめ！」
信長は、自分の軍隊には、少しもよわよわしい顔を見せずに号令をかけた。
すすむうちに、
「今川の本陣は中島にあります」
との知らせがはいり、しばらくして、別のていさつの者が、
「今川の本陣は、大高の城へはいるために中島を出発し、いま、桶狭間のあたりでやすんでおります」

と、知らせてきた。
「よし！」
どこに敵の本陣があろうとも、つまるところは今川義元の首を討つことのみである。
信長は、ようやく二千あまりにふえた軍をひきい、桶狭間へむかった。
すでに昼ごろとなっていた。
風が出てきて、黒い雨雲が空をおおいはじめた。

いっぽう、今川義元は連戦連勝の知らせをうけ、
「信長などは、ひともみに、もみつぶしてくれよう」
すっかり上きげんとなり、田楽狭間まできて軍隊をとめ、ここに陣をはり、勝利の酒宴をひらいた。
義元は、このとき四十二歳であった。
学問もあり、力もあった今川義元ではあるが、このときはすっかり織田信長をあなどっていたようだ。
田楽狭間も桶狭間も、だいたいおなじところで、現在の愛知県知多郡有松町の近くの、狭間（谷間）である。
午後一時ごろになると、雷がなりひびき、大雨になった。
織田軍は、今川の本陣を見おろす丘の上まで、しずかに息をころしてすすみよっていた。雷や雨の

音で、今川軍は、敵の大将が、みずから、こんなに近くまでやってきたとはおもってもみなかった。
なにからなにまで、信長にとっては幸運であったといえよう。
けれども、あのすさまじい決心を実行にうつしたからこそ、信長は、この幸運をつかむことができたのだ。
「かかれ！」
信長は鉄砲隊にいっせい射撃を命じ、自分もやりをふるって先頭に立ち、勢いはげしく丘をかけ下った。
「うわあ……」
二千の織田軍は、なだれのように丘から敵軍めがけて突きすすんだ。
この思いがけぬ襲撃をうけた今川軍は、大いにあわてた。
何しろ、大将の信長が馬から飛びおり、やりをふるって突撃したほどの、おそろしい意気ごみであったから、酒によって雨やどりをしていたような今川軍はめちゃめちゃにみだれたち、
「おのれ！」
大将の今川義元も大左文字の太刀をぬいてたたかったが、信長の家来、服部小平太のやりにわき腹を突きとおされた。
「うぬ、下郎め！」
と、義元が小平太の足をきりはらったとき、毛利新助という者が義元へくみつき、おし倒し、ついに今川義元の首を切ってしまった。

このとき義元は、新助の人さしゆびにかみつき、食い切ってしまったそうだ。
大将の義元が首をとられてしまっては、どうにもならぬ。それに、今川軍は、まさか織田軍が二千人ほどのものとはおもってもみなかったろう。
戦死者二千五百人あまりをのこし、今川軍は、ちりぢりに逃げてしまった。
戦いは二時間ほどでおわった。
勝利を得た織田信長の名は、天下にひろまった。
今川方についていた松平元康も、翌々年の一五六二年（永禄五年）に清洲の城へやってきて、信長と会見し、
「これからは、あなたの下にあって、はたらきましょう」
と、申しでた。
そしてまもなく、松平元康は徳川家康と名のることになったが、このときの若い家康は、まさか後になって、自分が天下をおさめる徳川将軍になろうとは、おもってもみなかったであろう。

岐阜の城

信長は、となりの国の三河にいる徳川家康と手をむすんでから、甲斐の武田信玄にも、
「これからは、いろいろと仲よくしていただきたい」
ていねいなあいさつを送り、たくさんの贈り物をとどけたりして、少しずつ、したしみを得るようにこころがけた。
いよいよ、信長は、
「京都へのぼって、天下をおさめよう」
と、思いはじめたようだ。
このころ、信長の妻の父である斎藤道三は、むすこの義竜とあらそい、ついに父と子の戦いとなり、義竜の手によってころされてしまっていた。
道三は、長男の義竜をきらい、次男の孫四郎や三男の喜平次をかわいがっていたから、
「父は、長男のおれに家をつがせるつもりはないのだ」
と、義竜はうらみに思い、父とふたりの弟をころしてしまったのである。
だから、桶狭間の戦いがあったとき、岐阜の城主は斎藤義竜になっていたわけだ。
義竜は信長にとって、妻の兄にあたるわけだが、
「こうなれば、義父の斎藤道三のかたきをうつという、りっぱな理由ができたのだから、遠慮なく岐阜の城を手に入れることができるな」
と信長は思った。
尾張から京都へのぼるためには、まず美濃の斎藤家をこうさんさせ、つぎに近江（滋賀県）を手に入れ、そこではじめて、京都へ近づくことになるわけであった。
ところが……。
桶狭間の戦いがあった翌年に、斎藤義竜は病気で死んでしまった……。

らい病にかかっていたのである。
義竜が死ぬと、その子の竜興が家をついだ。
竜興は、まだ少年だったし、しかも大名の家をつぐためには、あまりにも見こみがない平凡な性質であったようだ。
「しめたぞ！」
と、信長は、自分の本城を清洲から小牧山へうつし、岐阜にせめかかる準備をととのえた。
斎藤家の城は、いまの岐阜市にある稲葉山（金華山ともいう）の上にきずかれており、
「あの高い山の上の城をせめおとすことは、なかなかたいへんだろう」
信長も、かねがねかくごをしていたものだ。
はたして——。
美濃の三人衆とよばれる、力の強い家来たちが先頭にたち、少年の斎藤竜興をまもり、信長の軍が、たびたびせめよせていっても、うまくゆかなかった。
「これでは、いつまでたってもうまくゆくまい。なんとか、斎藤家の内がわをみだれさせ、そのすきに乗じて城をとらねばなるまい」
信長は、こう考え、ひごろから目をかけている家来の木下藤吉郎をつかって、まず斎藤竜興の家来たちを味方にひきつけることをはじめた。
この木下藤吉郎が、のちの豊臣秀吉である。
八年ほど前に、藤吉郎が信長の家来になったときは、身分のひくいぞうりとりが、その役目であった。

たという。それが、いまは一人前のりっぱな武士となっていた。
木下藤吉郎は、「太閤記」の物語でも知られているように、さるのような顔をしていて、
「さる、さる」
と、よばれていたようだが、織田信長は、この、あいきょうたっぷりな、そして機転のきいた木下藤吉郎を、
「はげねずみ」
とも、よんでいた。
これは、もっとのちになってからのことだが、信長は次のような手紙を、藤吉郎（秀吉）の妻、ねねにあたえている。
「……このあいだは、わざわざ、いろいろなみやげものをもってきてくれて、ありがとう。
しばらく見ないうちに、あなたが、とても美しくなり、りっぱなおなごになられたので、自分はびっくりしてしまった。
こんな美しい上品なあなたのことを、藤吉郎は、しきりに、ものたりない、なぞといっているようだが、まことにけしからん。
どこをたずねても、あなたのような妻は見つかるものではないのに、あのはげねずみは、まことにかってなことを申している。
まあ、いろいろほねもおれようが、はげねずみは、あなたの夫なのだから、よくめんどうみてやるがよい。

もしも、はげねずみが文句なぞを申したら、信長がこういっていたと、この手紙を見せてやるがよい」

およそ、このような、やさしい思いやりのあふれた手紙なのである。

この手紙には、はげねずみなぞとよびながらも、藤吉郎のことを信長がいつもかわいがっていたことが、よくわかるし、その妻にたいしても、こまやかに気をつかっていて、これが血なまぐさい戦国時代に生きていた、大名の手紙とは思われぬようではないか。

「大ばかもの」とか「気ちがい大名」とか、うわさされた信長は、やはり、ふつうの「ばかもの」ではなかったのである。

一夜城のはかりごと

織田信長は、岐阜のまわりにいる斎藤方の大将たちを、つぎつぎにうちたおし、または味方につけていった。

鵜沼の城にいた大沢基康という敵がたの大将が味方にしたときなどは、

「わたくしが、人質にまいりましょう」

と、木下藤吉郎が大胆にもひとりで敵の城へのりこんでいった。

人質というのは、あらそいをやめて仲よくしようという約束のしるしとして、たいせつな人間を敵がたへわたすことをいう。

信長のたいせつな家来である藤吉郎が、みずから人質になったので、大沢基康も、

「このようなりっぱな家来をもつ信長公なら、味方をしても悔いはあるまい」

こころをきめて、ついに自分の城を信長へわたし、味方になった。

このように、木下藤吉郎の働きぶりは、いのちとからだをおしまず、何事にも、てきぱきとしたものだから、

「さるよ。はげねずみよ」

と、信長は、いよいよ藤吉郎をかわいがるようになる。

こうした場合には、ほかの家来たちが藤吉郎のことをねたむようになるものであるが、あまり、そうしたこともおこらなかったようだ。それも、木下藤吉郎の、ほがらかで、あいきょうのある人がらが、だれにも好かれたからであろう。

「では、藤吉郎。いよいよ、はじめようか」

と、信長が稲葉山城へ総攻撃をかけるため立ちあがったのは一五六六年(永禄九年)の秋であった。

信長は、木下藤吉郎がもち出した計略をきいて、

「よし、それでゆこう」

と、きめた。

その計略とは……。

まず、信長は、

「わしは、これより、伊勢の国へ向かうぞ」

しきりに、伊勢（三重県）の大名、北畠具教を攻めるといいふらした。
岐阜の斎藤方では、
「なるほど、こちらの城のまもりがかたいので、信長はあきらめたと見える。だから伊勢のほうへ手をのばしたにちがいない」
ゆだんをしていた。
ところが、信長は、大軍をひきいて伊勢へむかうとみせ、夜になると、たくさんの材木をいかだにくみ、これを木曾川の上流から流させ、
「それ、いそげ」
夜のやみにまぎれ、一気に、小牧山の城から墨俣というところへついた。
この墨俣というところは、岐阜の稲葉山城の南、およそ十キロメートルあまりの近くにあり、長良川の岸でもある。
いっぽう、木下藤吉郎は、木曾川の上流から流れてきたいかだをひきあげて墨俣へはこび、織田全軍が力をあわせ、たちまちにとりでをきずいてしまったのである。
とりでというのは、小さい城のようなものだ。
目と鼻の先に敵の陣地もあるのに、こうして一夜のうちに墨俣のとりでがあらわれた。このとりでが墨俣の一夜城と、のちによばれることになった。
信長と藤吉郎でなくては、思いつかぬ芸当であった。
稲葉山城では……。

夜があけてみると、
「やあ、たいへんだ」
「墨俣のあたりに、とりでが見える」
「織田軍の旗じるしが、あのようにたくさん立ちならんでいるぞ」
みな、びっくりし、気をのまれてしまった。
「それ、攻めよせろ！」
というので、斎藤軍が、すぐに墨俣へ攻めよせてきた。
とりでは、まだ全部できあがっていたわけではないが、敵の攻撃をささえるだけのかたちにはなっている。
「さあ、こい」
木下藤吉郎は、たくみに敵をふせぎながら、残りの工事をすすめ、三日ほどのうちにとりでを完成してしまった。
このように、うてばひびくような藤吉郎の活躍には信長も大まんぞくであった。
「美濃の国をたいらげたなら、おまえにも、うんとほうびをやろう」
と、いった。
藤吉郎は、なおもはたらいた。
稲葉山の山づたいに、七人ほどの家来をつれたきりでしのびこみ、敵の城へ近づき、うまく敵方の兵士に変装してしまった。そうして、敵軍にまじり、城の中へまぎれこんだのである。

そして、酒をいれるのにつかうひょうたんを、竹の先にむすびつけ、これを城内からつき出した。
「どうぞ、攻めてきてください」
という合い図であった。
信長は、外から城へ攻めよせてきた。
藤吉郎は、水門口から味方の軍隊をひき入れ、城内へ火をつけてまわった。
城の中に、このような、おそろしいものがひそんでいたとは斎藤軍は、すこしも知らない。たちまちに、大さわぎとなった。
炎とけむりがあがる中に、織田軍がときの声をあげて攻め入ってきた。
これでは、たまったものではない。ついに、稲葉山城は攻めおとされてしまった。
斎藤竜興は、信長にこうさんした。
これで、ようやく、織田信長は、念願だった美濃の国も手に入れることができたのである。信長は、小牧山から岐阜へ、自分の本城をうつした。
そして自分の思うような大きい、りっぱな城をきずきなおした。
そのころ、ポルトガルの国から海をわたって日本へやってきた宣教師のルイス・フロイスは、自分があらわした本の中で、
「わたしは、ポルトガルを出て、インドから、この日本へはるばるとやってきて、いくつもの国々を見てきたが、このようにすばらしい宮殿を見たことがない」
と書き、信長の岐阜の城のりっぱさをほめている。

岐阜へきてから、信長は、
天下布武
の四字をほった印をつかうようになった。この字の意味は、
「自分は、自分の武力をもって天下をおさめてみせる」
という、信長の決心をあらわしたものである。
とにかく、戦争に勝ちのこったものが日本じゅうをおさめる人となるのだ。そののち、世の中は平和になるであろう。しかし、それまでは、なんとしても戦いぬかなくてはならぬ。
京都の天皇からも、
「しっかりたのむ。そして一日も早く、世の中に平和がくるようにのぞむ」
という手紙が、信長へとどけられた。
いまや、織田信長の威勢は、日本じゅうにとどろきわたった。

足利将軍

尾張から美濃へすすんだ織田信長は、正親町天皇から、
「あなたは、古今無双の名将である」
と、ほめたたえられるほどの勢いになったわけだが、まだ京都までの道は、けわしかった。
上洛ののぞみをはたすためには、近江の国を手に入れなくてはならぬ。

「わしは、きっとやってみせる。このように天皇の御信頼をうけたことは、百万の味方を得るにもまさったことだ」

信長は勇気にみちみちていた。

やすむ間もなく、信長は、その準備にとりかかった。

これまでに、織田家は徳川家康や武田信玄などと、したしいまじわりをむすぶようになっていたが、さらに信長は自分の養女を、武田信玄の子、勝頼と結婚させた。これで甲斐の英雄といわれた武田信玄とは親類づきあいの間がらとなったわけである。

むろん、親子兄弟の間でさえ、いざとなれば敵味方にわかれてたたかいあう世の中であるから、織田にしても武田にしても、このような縁をむすんだからといって、ゆだんはできない。

けれども信長は、どこまでもあたまをひくくして、武田信玄との交際に、ひびがはいらぬように気をつけた。

また、信長は自分の妹のお市を、近江、小谷の城主、浅井長政と結婚させた。

こうして浅井家とも縁をむすんでおき、岐阜城へ攻めかかったのであるから、まことに用意周到な信長のこころくばりであった。

岐阜の城主となってからは、たびたび、京都の天皇にたいしても、こまやかなこころづかいを示した。そのため、信長への信頼は、

「早く織田どのが京へ来てくれればよい」

と、朝廷の間にふかまるばかりとなった。

こうなれば、あとは自分の力で天下をとるだけのことだし、天皇に好まれている信長ならば、だれも文句をつけるはずがない。

もともと、織田家と皇室との関係は、わるいものではなかった。信長の父、織田信秀が、まだ元気でいたころのことだが、

「わしにできることならば、京都へはいって、天下をおさめたいものじゃ」

信秀は、そう考えていたらしい。

だから、皇居の修理をするための費用など、しばしば朝廷へ金や贈り物をしたりしている。

そのころは、日本国じゅうどこでも、大きな戦争や小さなあらそいがおこなわれており、天皇や朝廷のことに気をつける大名が少なかった。

天皇や、天皇の家来である公家たちは、まことに、ひどい暮らしかたをしており、それだけに、後奈良天皇は、

「織田信秀は、よくも心をくばってくれてうれしい」

と、いわれ、連歌師の宗牧というものに、手紙と古今集をことづけ、信秀に贈ってこられたりした。

こうしたことがあっただけに、信長にもなき父の考えかたが、つよくつたわっていたのであろう。

これは、あの桶狭間の決戦があった少し前のこと、織田信長は、わずか三十人ほどの家来をつれただけで、

「ちょっと、京見物へいってまいる」

そっと、京都へ出かけたことがある。
当時は、まだ岐阜城に斎藤義竜がいて、
「信長は、わしの家と縁をむすんでいるが、まことにゆだんのならぬ男だ」
と、思っており、たえず間者を出して信長のようすをさぐらせていた。
その間者たちが、
「上総介どの（信長のこと）が、わずかな家来をつれただけで、そっと京へのぼりました」
と、知らせてきたとき、斎藤義竜は、
（よし、そっと信長を殺してしまおう）
腕のきいた刺客を十数名、京都へ送った。刺客というのは、不意に相手をおそって殺すための者たちである。
ところが……。
京の町中で、織田信長と、斎藤方の刺客たちが、ばったり出会ってしまった。このとき、信長がずかずかとすすみ出て、
「わしを殺せるものなら殺してみよ！」
いきなり、どなりつけると、もう刺客たちは、その勢いにのまれてしまい、手も足も出ずに、こそこそと逃げてしまったという。
このとき、信長は京都で、足利十三代の将軍、義輝のきげんうかがいをしている。
なんといっても、そのころの日本の国には天皇と将軍という二つの柱があって、国をおさめているという考えかたをだれもがもっていた。

諸国の大名や武将たちは、それぞれにあらそい、戦いをくりかえしながらも、この大きな柱を利用して天下をとらなくては、国民に対しての名目もたたぬし、信頼をうけることもできない。
織田信長が斎藤氏をほろぼして岐阜の城主となったとき、将軍の義輝は、すでに殺されてしまっていた。
義輝をころしたのは三好、松永などという大名たちで、かれらは義輝のいとこにあたる義栄を、かってに足利十四代の将軍にしてしまった。
ころされた足利義輝には義昭という弟がいて、奈良の一乗院の坊さんになっていたのだが、兄がころされたのを知ると、
「ここにいては、あぶのうございます」
家来の細川藤孝のすすめもあり、奈良を逃げだして近江の六角義賢という大名をたよったり、そのほかほうぼうの大名のもとへ身をよせて、たすけをもとめた。
足利義昭は、そのうちに越前（福井県）の大名、朝倉義景のせわをうけることになり、
「あなたの力で、兄を殺し、京都でいばっている三好や松永を追いちらし、あのものたちが、かってにつくりあげた足利将軍をやめさせ、自分をなき兄のあとつぎにしてもらいたい」
しきりに、たのんだ。
大名たちは、将軍を利用して、天下をとろうとしている。義昭は、その大名たちを利用して、自分が将軍の位につきたいと考えている。

（兄のかたきをうち、自分が将軍になったなら、諸国の大名どもをうまくあやつり、そのうちに機会をみて、足利将軍の力を、むかしのように大きくひろげてゆき、しまいには大名どもの頭をおさえつけてやろう）

と、義昭はひそかに、こころをきめていたのだ。ところが、朝倉義景は、

「いましばらくは、わたくしのところにおられて、しずかに時をおまちなさい」

なかなか、京都へ出ていってはくれない。

朝倉としても、そうすぐには腰をあげられないのだ。何しろ、加賀や越前の国には一向宗という仏教徒がたくさんいて、大名たちのいうことをきかず、ゆだんをしていれば武器をもって戦う勢いをしめしているので、そのしまつもつけずに京都などへ出かけるわけにはゆかないのである。

こうしたときに……。

「ようやく斎藤氏をほろぼして美濃の国を手におさめましたから、あなたのおせわもできるようになりました。ぜひ、わたくしのところへおいでください」

と、織田信長がつかいをよこした。

（これは、うまい）

足利義昭は大よろこびであった。

信長、京へ

義昭は、まえから信長の力のすぐれているところへ目をつけ、家来の細川藤孝をつかいにやって、

「わたしの力になってくれ」

と、たのんでいたのである。

だから、義昭は、いままで親切にせわをしてくれた朝倉義景のもとを、さっさと飛び出して信長のところへいってしまった。

おもしろくないのは朝倉義景であった。足利義昭にたいしては、

「いままで、わしがつくしてあげたこともわすれ、あまりにかってな……」

と思ったし、織田信長にたいしても、

「礼儀を知らぬやつだ」

と、怒った。

そして、信長から、

「足利義昭どののたのみによって、京都へのぼらねばならぬから、力をかしてもらいたい」

と、いってきたときも、

「そのような、身がってなたのみがきけるものか」

少しも、力をかそうとはしなかった。

こうして、朝倉家と織田家とは仲がわるくなるばかりとなり、ついに、これが原因となって、信長の妹のお市までが、両家のあらそいにまきこまれることになるのである。

お市が、近江、小谷の城主、浅井長政の妻となっていることは、すでにのべておいたが、信長は浅井のたすけをえて岐阜から近江へはいり、六角、蒲生などの大名たちをせめおとし、十日もたたぬうちに、近江の南の地を手に入れてしまった。

これより先に、早くも信長は伊勢の国のほとんどを自分のものにしてしまっている。

この勢いに、京都にいた三好三人衆とよばれる阿波の国（徳島県）の大名たちは、

「とても、かなわぬ」

たちまちに京都からひきあげてしまったので、信長はらくらくと京の都へはいることができた。

京都では、力の強い織田の軍隊がやってくるというので、

「どんなことがおこるかしれたものではない」

人びとは、おそれおののいていたらしいが、いざ織田軍がやってくると、兵隊たちは、すこしも乱暴をせず、かえって三好の党がいたときよりも都のようすが、おだやかになったほどだ。これは、大将の信長が、

「けっしてらんぼうをしたり、むちゃなまねをしてはならぬ」

と、自分の軍隊へ命じていたからである。

こういうときに、家来がいうことをきかぬと、信長は少しもゆるさなかった。

のちに、信長が足利義昭のために屋敷をたててやったときのことだが、ひとりの兵士が、工事を見

物している女にいたずらをしかけたところ、ちょうど工事のかんとくをしていた信長がこれを見つけ、

「何をするか！」

かけよって、たちまちに、その兵士の首を切ってしまった。

現代からみれば、少しむごたらしいことと思うかもしれぬが、そのころは親子兄弟でも血を流し合って戦うこともあるおそろしい時代なのだから、することは思いきってしなくてはしめしがつかなかったのであろう。

信長は、こうしたときに、いささかも手かげんをすることがなかった。

こういうわけで、織田信長の人気は、京都でもあがるばかりとなったのである。

京都から逃げた三好や松永は、十四代将軍の足利義栄とともに、しばらくは信長に手むかいをしたが、とても勝てるわけがない。

それぞれに逃げたり、または降参したりして、京都を中心にした国々が、ことごとく信長の指揮のもとへはいることになったのである。

こうして、足利義昭は十五代目の足利将軍になることができた。

「これもみな、あなたのおかげじゃ」

義昭は信長の手をとって、おしいただき、

「あなたに副将軍になってもらいたい」

と、いったが、

「いや、それはご辞退いたします」
かたくことわった。
「では、あなたの好きな国をあげよう」
「ご心配にはおよびませぬ」
「それでは、わたしのこころがすまぬ」
「では、堺の町と、大津、草津の二か所をわたくしにいただきたい」
「国ではなく、町がほしいといわれるか？」
「はい」
「よろしいとも」
こうして、信長は、この三つの町を自分のものとし、代官をおいた。
町は町だが、この三か所はたいへんに重要なところであった。
堺の町は外国との貿易がさかんなところで、商人の力が強い。大津と草津は、信長の城がある岐阜から京都への道中にある交通の要地である。
これからの天下をおさめるためには、ただ力が強いというだけではいけない。金もたいせつだし、商人や百姓たちの力もかりなくてはならぬ。
（武士だけの世の中ではないのだから……）
と、いつも信長は考えていた。
やがて、織田信長は京都を出発し、岐阜の城へかえった。

将軍、義昭は、
「あなたの武勇は天下第一である。これからも日本の国をおさめるためにほねをおっていただきたい」
と、礼をのべた。
だが、信長は、この将軍の家来になるつもりはない。
（自分は自分のやり方で天下をおさめてやろう）
と、おもっていたからだ。
岐阜へかえってまもなく、信長は一五六九年（永禄十二年）の正月をむかえた。いまの年のかぞえ方でいうと三十六歳になったのである。

天下人への野望

織田信長にとっては、まだ大敵が前にもうしろにもいた。
武田信玄や上杉謙信の軍隊は、ひじょうにつよく、まともにたたかったなら、信長の軍隊でもかなわないだろう、といわれたほどである。
ただ、武田は甲斐の国、上杉は越後の国にいて、冬のころになれば、ふりつもる雪にじゃまをされ、はるばると中央へでて、京都へのぼることがむずかしくなる。まわりにいる敵もすくなくはない。それだけに、気候もよく京都とは目と鼻の先まですすんでいる織田信長とくらべて、はるかに不

利であった。

（だが、武田と上杉は、もっともおそろしい相手じゃ）

信長は、いささかもゆだんしなかった。

信長は養女を、武田信玄のむすこの勝頼の嫁にやっていたが、こんどは、信玄のむすめを、

「自分のせがれ、信忠の嫁にいただきたい」

と、信長は申しこんだ。

武田信玄は、しょうちをした。

（信長は、わしと仲よくしておき、その間に、すっかり天下をとる準備をしてしまうつもりなのじゃな）

と信玄にはよくわかっている。

わかっていながらも、

（いずれは、織田信長とわしとが、天下をあらそう大決戦をすることになろう）

とかくごをきめていた。

それはさておいて、ともかく天下とりの先頭を走りはじめたのが信長であることは、だれもが、みとめないわけにはゆかなかった。

自分が住む城から京都までの道すじを、信長はつらぬき通したのである。

だから、いざとなれば、すぐに京都へかけつけることができた。敵が京都へはいってくれば、たちまちに岐阜から出陣してこれを追いはらうことができたし、新しい将軍のために二条城をつくり、な

がい戦争がつづいた京都の町の復興に力をそそぎ、皇居を新しくたてなおしたりした。

こういう仕事をするたびに、

「織田信長という大名の実力はたいしたものだ」

と、世の中がみとめることになる。

それを、信長はちゃんと計算にいれていたのである。

また交通をべんりにするために諸方の道をひらき、商人たちが自由に商売できるような市場をひらいたりした。

戦争をするばかりでなく、新しい国づくりをするというやりかたは、これまでの大名たちが、したこともないことであった。

ことに、信長は堺の町や港を、おもく見ていた。

そのころの堺は、大阪と京都をひかえた貿易港で、すばらしい発展を見せていたのである。外国の文化は、みな、この港から日本の中央へながれこんできた。

火薬も鉄砲もはいってきたし、ギヤマンのさらも杯も、宝石やぶどう酒も、もちこまれた。

外国からしいれた、このようにめずらしく高価な品物をあつかう堺の商人たちのふところはゆたかで、その金の力で、武士たちをやとい入れ、

「堺の町は、われわれの手でおさめるのだ」

と、商人たちは、その権力をほこっていた。

町でありながら、ここは一つの国であったといえよう。

だが、織田信長の前には堺の商人たちも頭をさげた。それほどに、信長の威勢は強大なものとなっていたのである。

信長の軍隊の力はともかく、なによりも信長にとって力強い味方は、自分の国（尾張、美濃、その他）の村々がゆたかな作物を実らせ、村々をとりしまっているさむらいや豪族を、信長がしっかりとつかまえていたので、その国力が、ほかの大名たちにくらべて特別にすぐれていたことであった。

ということは……。

「この殿さまについていれば、けっして、まちがいはない」

と、家来も豪族も、商人も百姓も、信長を信頼していたからであろう。

「さあ、これでよい」

信長は、自信にみちあふれていた。

家来たちも、

「殿さまが天下人となるのは、もうすぐだ」

と、思いはじめた。

但馬の国（兵庫県）を攻め、生野の銀山を手に入れたし、伊勢の南にいて、まだ信長のいうことをきかなかった北畠具教のいる大河内城も攻めおとした。

ところが……。

このころから将軍の足利義昭と織田信長との仲がわるくなってゆくのである。

「あなたは、わたしの父のようなお人である」

と、将軍が感謝していたほどの信長なのだが、

「あの将軍ではとても、天下をおさめることはできぬ」

信長のほうでは、そう思っていて、心から将軍義昭につかえようとしてはいない。

ポルトガルから海をわたって日本にきていた耶蘇教の宣教師フロイスが、岐阜の城へやってきて、

「キリストの教えを日本にひろめようとしているのですが、思うようにゆきません」

と信長にうったえた。

それはそうであろう。

日本には仏教という宗教がくまなくゆきわたっていて、お寺や坊さんの力が大きく強い。

洋服を着た青い目の外国人が、みょうな教えをひろめるのを、だまって見ているわけにはゆかない。

坊さんたちは将軍や天皇にたのみ、キリスト教を日本から追いだすようにした。

しかし、信長はキリストの教えが日本にあってもよいと考え、フロイスを、いろいろと親切にもてなしてやっている。

信長は、フロイスにこういった。

「皇室や将軍よりも、天下のことはすべて自分がはからっているのだから、自分のいうことを信じなさい」

これでは、将軍義昭もおもしろくなかったろう。

（信長は、将軍のわしをみとめておらぬようなまねばかりする。まことにけしからぬ）

だから将軍は、ひそかに甲斐の武田信玄へつかいをやり、
「早く京へきて、わたしをたすけ、織田を追いはらってもらいたい」
と、申しこんだりした。
信玄も、いずれは天下をとるつもりだから、
「よろしゅうござる」
うけあって、駿河の国の一部を義昭へ贈ってよこした。
こうなると織田信長も、だまってはいない。
「あの将軍は、わしが思っていたとおりの、たよりない男だ。あれだけ、わしがたすけてやったこともわすれて、武田と手をむすぶなどとは、まことにゆだんがならぬ」
たちまちに、京都の将軍へ、
「あなたが、諸国へ命令をするときは、前もって、かならずわたしに知らせなくてはいけませぬ。また、今までにわたしが知らなかった将軍の命令は、すべて取り消しにすること。また天下のことを信長におまかせになった以上は、何ごともわたしの意見にしたがってもらわねばなりませぬ」
ときびしく、いってやった。
これで、将軍義昭は、
(だまっていては、信長のために、手も足もでなくなる)
あわてて、こんどは前に身をよせていた越前の朝倉義景へ、ひそかに使いを出し、
「どうも信長がいばっていてこまる。なんとかたすけてもらいたい」

と、いい送った。

背後の敵

将軍と朝倉義景とのむすびつきを考えると、信長もうかうかとしてはいられない。
すでに、朝倉へは、
「いちど、将軍のきげんをうかがいに京都へ出てまいられい」
と、信長から申しわたしてあったのだが、
「そんなことをしたら、あの腹ぐろい信長に首をとられてしまう」
朝倉義景は、いうことをきかなかった。
これはもう、織田信長を敵とみなしているからだといってよい。
「よし、早いうちに朝倉をほろぼしてしまおう!」
ついに、信長は決心をした。
一五七〇年(元亀元年)の四月——。
北国の雪がとけるのを待っていた信長は、徳川家康にたすけをもとめ、三万あまりの軍隊をひきいて越前へ攻め入り、まず、日本海にのぞむ敦賀の城二つを落とした。
この城は、朝倉家にとっては、前にそなえるたいせつな城である。朝倉の本城は、いまの福井市の南方十五キロメートルほどのところにある、一乗ケ谷にかまえられていた。

「それ、一気に攻めおとせ」
信長は、やすむ間もなく一乗ケ谷へすすもうとした。
ところが、このとき、信長がまったく考えてもみなかったことがおこった。
信長の妹のお市を妻にしている浅井長政が、朝倉方に味方して信長の軍隊のうしろから攻めかかろうとしたのである。
浅井長政の小谷城は、滋賀県、長浜市の北方八キロメートルのところにあって、信長は、琵琶湖をのぞむ浅井の領国を通りぬけて越前の国へ攻めこんだわけだから、浅井長政が自分をうらぎり、敵の味方についたとなれば、岐阜へかえることがむずかしくなる。
「おのれ、長政め！」
むろん、信長は、はげしくおこった。こういうことにならぬため、妹を嫁にやってあるのだし、
「あの浅井長政だけは、わしをうらぎるようなことはあるまい」
かねがねいっていただけに、よほど、くやしかったものとみえる。
「いまに見ておれ」
ぎりぎりと歯をかみしめ、信長は、こうなれば朝倉よりも先に、浅井を徹底的にほろぼしてしまわねばならぬときめたのである。
だが、いまのところはまず、逃げなくてはならぬ。朝倉と浅井に、はさみうちをされたのでは、たまったものではない。
織田と徳川の両軍は、あわただしく若狭方面の山道をぬけ、あぶないところで、やっと京都へ逃げ

かえった。
負けずぎらいな織田信長にとって、これは、たまらなく、くやしいことであった。
「わしは、朝倉を攻めることについて、わざと浅井には知らせなかった。それも、むかしから朝倉と浅井の交際がふかく、仲もよかったことを考え、浅井長政に心配をかけたくなかったからだ。その、わしの心をふみにじり、浅井長政は、よくも、義理の兄であるわしをうらぎったな！」
岐阜へもどった信長は、たちまちにしたくをととのえ、こんども徳川家康のたすけをもとめたが、その家康の軍がやってくるのも待たず、三万あまりの軍隊をひきいて出発した。
ここで、浅井長政が信長の妹を妻にむかえたときの約束をのべておこう。
それは、
「妹ごを妻にむかえるのはよろしいが、わたしの家と朝倉家とは、むかしから親しい間がらであるから、もし、これから織田と朝倉があらそいごとをおこすようになると、わたしの立場がこまる。朝倉とあらそわぬと約束してくださるなら、しょうちいたす」
というものであった。
信長は、この約束をまもるとちかい、そこで両家の縁組が成ったわけだ。
ところが、こんどの朝倉攻めになったので、長政よりも、父の久政がおこってしまった。
「それ見よ。信長というやつは、このように平気で約束をやぶる男だ。われらに何ごとも知らせず朝倉を攻めたのは、きっと、このあとに浅井もほろぼそうときめているからにちがいない」
しかし、長政は、この父の意見に反対であった。

（信長も、むかしの信長とはちがう。いまの信長は目の前の天下をつかみかけているほどの大名である。この浅井長政をほろぼそうなぞと思ってはいまい。朝倉にしても、ただ信長がにくいからといって、力を合わせようとしないのがいけなかったのだ。ここのところは信長にそむいてはならぬ）

と長政は思ってもいたし、父にもいった。

けれども、いつまでも古い考えにとらわれている父の久政は、がんこな老人で、むすこのいうことなどきこうともせず、家来たちの多くは父のことばにしたがったので、長政としても、どうすることもできなかったのである。

長政と、お市との間には三人のむすめが生まれていたし、夫婦の仲もよかった。

織田信長が少年時代にたいへんに美しい顔だちをしていたことは、この本のはじめにのべておいたが、その妹のお市だけに、

「奥方さまの美しさは、この世のものとは思われぬ」

と、浅井家でもうわさがたかい。

「このようななりゆきになってしまい、わしは、おまえの兄上とたたかわねばならぬことになった。この上は、むすめたちとともに城を出て、いくさがすむまで、どこかにかくれていてはどうか」

長政が妻にいうと、お市は、

「わたくしはもう、織田の女ではございませぬ。浅井長政の妻なのですから、この小谷城にいて、あなたさまと生死をともにいたします」

といって、きかなかった。

お市は、兄信長が天下をとるための一つの道具として、浅井長政の妻となったのである。

こうした結婚のことを、政略結婚といい、お市ばかりでなく、このころの大名や武士たちは、たがいに、このような結婚をおこなっては、自分の家がなんとか戦国の世をのりきって生きのびたいとねがったのだ。

だから、そのころの女たちは男の道具にされてしまい、きのどくだったという人もある。それはそうなのだが、このような結婚をしても夫婦の仲のよかった例は、いくつもあるのだ。

そしてまた、そのころの女たちは、けっして男の道具になっているなどとは考えていなかったともいえる。

「わたしたちも、男とおなじに家と国のためにはたらこう」

と、心をきめており、男もおよばぬはたらきをした女たちも多い。

なにしろ、食うか食われるか、戦争がなくなる日まではたたかいつづけ生きのびなければならない時代であったのだから、男の心も女の心も火のように燃えさかっていた。

女がきのどくなら、こうした女を妻にした男も苦しまなければならぬ。世の中とはそうしたもので、男と女のどちらもがしあわせでなければ、しあわせな世の中とはいえないのである。

織田信長にしても、妹のことを考えてみれば胸もいたんだことであろう。木下藤吉郎の妻にさえ、あのようにやさしい手紙を書いた信長である。

姉川の決戦

小谷城は、けわしい二つの峰からなる山の城であった。

琵琶湖の北側にひろがる平野を見おろしたこの山城は、海抜五百メートルから三百メートルほどもあり、兵力は約一万にすぎないが、浅井軍の強さは世に知られている。

織田信長の三万あまりの軍は、六月二十日に小谷城の下へあつまり、城を取りかこんだ。

これをきいた朝倉義景も、だまってはいない。

「すぐに浅井をたすけよ」

と、一族の朝倉孫三郎に一万あまりの軍をひきいさせ、急ぎ小谷へむけて出発させた。

信長は、はじめ小谷城のすぐそばにある虎姫山に陣をかまえたが、

「ここにいても、あのけわしい小谷城を攻めとるのはむずかしい。それよりも、いったんはうしろへさがり、平地へ敵をおびき出したほうがよい」

と、思いなおし、虎姫山を下って兵をまとめ、姉川をこえて、小谷城よりも二里ほどはなれたところへさがった。

そして二十三日には、本陣を竜ケ鼻とよばれる小高い山の上へうつし、平野をへだてて小谷城をのぞみ、決戦の日を待ったのである。

このとき、徳川家康が五千ほどの軍をひきいて戦場へやってきた。

家康は、このとき二十九歳の青年大名で、三河、遠江の二か国の領主であり、まさかのちになって天下をとるようになろうとは、家康も考えていなかったろうし、世の中もみとめてはいなかった。まだまだ小さな殿さまにすぎなかったのだが、

「三河どの、三河どの」

と信長は家康をたいせつにしていたし、自分のむすめの徳姫を、家康の長男、信康の嫁にすることも、とりきめてあった。

このように、織田、徳川両家の関係は水ももらさぬほどにむすびついていたようであるが、それでもつぎのような話がある。

それは——。

こんどのいくさに味方するため、徳川家康が浜松の城を出発しようというとき、家来の本多平八郎忠勝がすすみ出て、

「信長公は、たいへんに殿をたのみになされ、どこから見てもお味方のように感じられますが、ごゆだんはなりませぬ」

「それはどういうことか?」と家康。

「信長公は、殿のお力がのびてゆくことをおそれておいでになります。こんどのいくさでも、信長公は殿がうまく戦死してくれればよいと思っているやもしれませぬ。じゅうぶんにお気をつけくだされ」

「なるほどな……」

家康は本多忠勝のことばをとりあげ、自分の兵力の三分の二を、わざと浜松へ残して近江へ出陣したというのである。

とにかく、このようにゆだんもすきもならぬ時代だったのだ。

ところが、いざ決戦になると、徳川軍の奮戦によって、織田信長は、あぶないところをすくわれる結果になった。

決戦は、六月二十八日のあけがたから、はじまった。そのころの六月二十八日は現代の八月九日にあたり、夏のさかりである。

小谷城から押し出してきた浅井軍約八千は、姉川の北がわの野和というところへ陣をかまえ、これをたすける朝倉軍約一万は、少し西へはなれた三田あたりへ陣をかまえた。

川をへだてた南側では、織田軍二万三千、徳川軍約六千（そのうちの一千は信長の家来、稲葉通朝の部隊）が、早くも川べりに近づいており、

「それ攻めかかれ！」

たちまちに弓、鉄砲の攻撃をしかけてきた。

戦いの火ぶたは、まず朝倉と徳川の両軍によってきられた。

水深一メートルほどの姉川を中心にして、両軍はすさまじく戦い、押したりかえしたり、川水を血にそめて、息をつく間もない急戦をくりかえした。

これを見た浅井軍は、

「このすきに織田の本陣を突きやぶれ。信長めの首をとってしまえ！」

猛然として突撃にうつった。

……わあ、……うおう……。

けだもののような声をあげて攻めかかってくる浅井軍の決死の突撃は、つぎつぎに織田軍の陣地を突きやぶり、

「信長を討て！」

「信長はどこじゃ！」

おそろしい勢いで、信長の本陣へせまってくる。

夏の日が中天にのぼり、その日ざしにぎらぎらと照りかがやくかわらで、川の中で、畑で、雑木林で、あきることもなく血みどろの戦いがつづけられた。

とにかく、浅井軍はつよい。

三倍もの兵力をもつ織田軍の中へ、キリをもみこむように突き入って、一、二、三陣をやぶり、信長が指揮をとっている本陣の近くまで攻めこんできたのである。

「信長、今川義元と桶狭間に戦いしよりこのかた、かくのごときはげしき戦いなし」

と、むかしの本にしるされている。

「やり、やりをもてい」

信長もうかうかとしてはおられず、ひさしぶりに、みずからやりをつかみ、床几から立ちあがった。

そこへ、

「御大将は、どこにおられる。殿、殿っ……」
血みどろのよろいをつけ、髪をふりみだしたひとりの武士が、信長のすぐそばまで近づいてきた。
信長は、家康の家来にちがいないと見て、
「信長はこれにある」
声をかけたとき、そばにひかえていた家来の竹中久作がいきなり飛び出し、その武士に、
「浅井の家来、遠藤喜右衛門であろう」
と、さけび、やりをかまえ、信長をまもった。
その武士は、浅井長政の家来で、竹中久作とは顔見知りの間がらであったという。
遠藤は織田軍の味方にばけて本陣へはいりこみ、信長の首をとろうとしたのだ。
まさに、信長はあぶないところであった。
竹中久作は、この敵にくみつき首をとってしまったが、一時は、このように織田軍はさんざんな負けいくさだったのである。
もし、徳川家康が二倍の敵、朝倉軍をひきつけていてくれなかったら、織田信長は戦死してしまったかもしれない。
朝倉軍は徳川軍と戦うのが精いっぱいであった。

ちょうどこのとき……。
朝から、はげしい戦いをくりかえしていた徳川と朝倉両軍は、家康のみごとな指揮によって、ついに徳川軍が勝った。
「朝倉方が逃げはじめたぞ」
これをきいて浅井軍はがっかりしてしまい、さらに徳川軍がこちらへも攻めかけてくるようになったので、浅井長政は、
「もはやこれまでじゃ。城へひきあげよ」
と、命令をくだし、小谷城をさして退却しはじめた。
こうして、姉川の決戦は織田信長の勝ちとなったわけだが、それもこれも徳川家康の軍隊の底力がじゅうぶんに発揮されたからで、
「徳川は強い」
との評判が、天下にひろまっていったのである。
戦死者は、織田、徳川軍が八百人あまり、浅井、朝倉軍が千七百人ほどであったといわれる。
しかし、信長は小谷城へ逃げかえった浅井長政を、すぐに攻めようとはしなかった。
小谷城から二里ほどをへだててむかい合っている横山城を落とし、この城を羽柴秀吉にまもらせておき、いったんは岐阜へかえった。
羽柴秀吉が、まえの木下藤吉郎であることはいうまでもない。
それからもなお、浅井、朝倉と織田信長とのあらそいはつづいたが、姉川の決戦によって力のおとろえた浅井長政は、だんだんと信長においつめられ、三年後の天正元年八月になると、ふたたび小谷城へ攻めよせてきた信長に、

「こうさんするか……」
　または、
「いさぎよく、城に火をつけて腹を切るか」
　二つのうちの一つを、えらばなくてはならぬことになった。
　これよりまえ、朝倉義景も信長にやぶれ、越前、大野の賢正寺という寺で自害をしてしまっている。
　信長は、虎姫山に陣をかまえ、
「城をあけわたせ。そうすれば、わるいようにはせぬ」
　と、長政のもとへつかいをやった。
　もともと信長は浅井長政はきらいではない。長政の苦しい立場もわかっている。それに長政は、わが妹の夫なのであるから、なんとかして命だけはたすけようとしたらしいが、長政は、
「こうなったからには、生きながらえるつもりはない」
　とこたえた。
　もしも、いうことをきいてこうさんしたら、信長は「わるいようにはせぬ」どころか、自分を生けどりにして首をはねるかもしれぬと、長政はうたがいをもっていたのであろう。
「そのような恥をうけるのはいやだ。いさぎよく死のう」
　長政は、妻のお市と三人のむすめを信長のもとへ送りとどけることにした。
　お市は、

「わたくしひとり、生きのこって世の人たちからうしろゆびをさされるのはくやしゅうございます。いっしょに死なせてくださいませ」
　何度もたのんだが、ついに説きふせられ、むすめたちとともに城をおり、兄の信長の陣地へ送られていった。
「これでよい。もう心にのこるものは何もない」
　浅井長政は、八月二十六日になると最後の戦いを信長にしかけ、力つきた後、小谷城の中で切腹し、二十九歳の若い一生をおえた。
　お市は、のちに兄信長の重臣、柴田勝家の妻となった。
　けれども信長が死んだ後、柴田勝家と羽柴秀吉の仲がわるくなった。そして、勝家は、秀吉との戦いに負け、越前、北ノ庄の城で腹を切ることになる。
　このとき、お市はもう、城から出ようとはしなかった。
「もはや、世のなぐさみものにはなりませぬ。いっしょに死なせてくださいませ」
　いくら勝家がすすめてもいうことをきかず、第二の夫、柴田勝家とともに、お市は自害をした。
　ふたりの夫を、おなじような運命のもとに死なせなくてはならなかったお市の一生は、まことに戦国時代の女のかなしさを、そのままにあらわしている。
　信長のような、えらくて強い大名の妹に生まれながら、このようにきのどくな一生を送らねばならなかったお市であるが、はじめの夫も、第二の夫も、お市をやさしくいたわってくれたようだ。

浅井と朝倉の両家がほろびたのち、織田信長は、浅井家の領国だった北近江を、
「秀吉にあたえよう」
といい、朝倉家の領国を、柴田勝家にあたえることにした。
「さる」とか「はげねずみ」とかよばれた木下藤吉郎も、いまは羽柴筑前守秀吉という十二万石の殿さまに出世をしたわけである。このとき秀吉は三十八歳になっていて、おしもおされもせぬ織田家の重臣であった。
秀吉は、それまではいっていた横山城を出て、琵琶湖をのぞむ今浜の町へ新しく城をつくり、ここを自分の本城とさだめた。
そして、町の名も長浜とあらためた。
名も知れぬ百姓の子に生まれ、いろいろな苦労をなめた秀吉が、はじめ、信長のぞうりとりといったような小者として織田家につかえていたころには、だれも、秀吉が、このような出世をするとは思ってもみなかったろう。
信長は、身分のひくい高いにかかわらず、自分が思ったようにはたらいてくれる家来を、どんどん出世させてやった。
秀吉にとっては、まことに「はたらきがいのある主人」につかえたことになる。織田信長は、長い

間つづきにつづいた戦国の世を、一つにまとめるという大きな仕事をなしとげた人物だけに、気性も強く、はげしかった。
よくはたらかぬもの、自分が気に入らぬもの、自分にそむいたものは、少しもゆるさない。
浅井長政が、とうとうこうさんせず、小谷城で自害をしたのちも、
「長政は、わしのこころにそむいた、にくい男である」
と、ひじょうにおこっていた。
そして、長政と妹お市の間に生まれた男の子の万福丸をとらえ、美濃の関ケ原で、まだ小さい子供の万福丸をむごたらしいやりかたでころしてしまった。
そればかりではない。
長政の母の小野どのという老女もつかまえ、十本のゆびを切りおとしたのちに、これもころしてしまった。
これは、そのころの大名が戦争に負けた相手を、このようにあつかうことによって、
「自分にさからうものは、このような目にあうのだ。よく見ておくがよい」
と、天下に知らせることになる。
また万福丸は、浅井家のあとつぎになる男の子だから、
「もしも生かしておいて、この子が大きくなり、自分の敵となるようなことがあってはこまる」
と、ころしてしまったのだ。
これは信長ばかりではなく、どこの大名でもやったことだ。

だが、信長がやってみせると、

「織田どのは、まことにおそろしい人じゃ」

世の人たちは青ざめた顔になり、信長のすることを、息をのんで見まもったのである。

また、こんなこともあった。

そのころ、日本の仏教の世界でも、本願寺や延暦寺の勢力は、もっとも大きかった。

本願寺は、一向宗（浄土真宗）の本山で、いまの大阪城があるところに大きな寺院があった。

寺といっても、まるで城のようなもので、ここに顕如というえらい坊さまがいて、日本全国にひろがっている寺々や坊さまや、信者を指揮し、兵隊もかかえている。

また延暦寺は、京の都を見おろす比叡山にあり、これは天台宗という仏教の本山である。

これも僧兵とよぶ坊さんの兵隊をかかえ、すばらしい勢いをもっていた。

むかしむかしから、日本の仏教は、政治や文化にしっかりとむすびついているから、

「信長のようならんぼうな男に、天下をまかせておいては、とんだことになる」

本願寺も延暦寺も、日本全国の寺や信者をうごかし、信長のすることにじゃまをした。

なにしろ、外国からやってきたキリスト教の坊さまをかわいがっているような織田信長だったから、日本の坊さまに、にくまれるのもむりはない。

信長は信長で、

「日本の寺や坊さまが、仏の教えをひろめるのはよいことだが、兵隊をつかっていくさをしたり、いばっているのはけしからぬ」

と、すこしも負けてはいない。

だから、将軍の足利義昭は、

「なんとか信長をやっつけてもらいたい」

こんどは、本願寺や延暦寺にまでひそかにはたらきかけるしまつだ。

浅井と朝倉が信長に負けたとき、両家の兵が比叡山へ逃げこんだことがある。

信長は、何度も、この戦争に坊さまがはいってきてはいけないと注意をしたが、延暦寺は、いうことをきかない。

そこで、信長は、

「こうなったからには、ぜひにおよばぬ。比叡山の寺という寺を焼きはらえ」

と、命じたものである。

そして、上坂本から火をつけて攻めよせ、比叡山にある寺という寺を、一つものこさず焼きはらってしまった。

そして、山にいた坊さんたちもふくめ、男女あわせて千六百人もの人をころし、仏像やお経の本も焼きはらった。

これは、日本全国の人びとにおそろしいショックをあたえた。

ながい間、天皇と天皇のおられる都をまもる寺としてとうとばれていた比叡山延暦寺を、信長は一夜のうちに灰としてしまったのである。

これほどに、思いきったことをした戦国大名は、信長ひとりであった。

「天下を一つにし、戦争をなくすためには、わしはどのようなことでもしてみせる」
信長の決心は、すさまじいものというほかはない。
けれども……。
「比叡山としても、らんぼうな僧兵などをかかえて、みずから戦争の中へわってはいったりしたことは、よくないことであった」
と延暦寺のほうでも、あとになって反省しているところからみると、信長がしたことを、いちがいにざんこくなものだとかたづけてしまうことはできまい。
とにかく、信長は、こうした仏教界の反抗には、つくづくと手をやいたものである。
こうした主人につかえて出世するというのは、よういなことではない。羽柴秀吉も、ずいぶん苦労したことであろう。
しかし、信長は秀吉がりっぱな殿さまになってからでも、
「さるよ、さるよ」
と、からかったりする。
秀吉は秀吉で、少しも気にせず、いつも、にこにことして、信長の顔いろを見ただけで、主人が何を考えているかを知ってしまうというぐあいなのだ。
信長も秀吉も、頭のはたらきがするどくて、早い。
それでいて、小さな、こまかな、つまらぬことに気をつかわず、よいと考えたことはすぐに実行する。

顔かたちもちがい、物の考え方にもちがうところがあるふたりだが、ある一つの点では、よく似ていた。
羽柴秀吉は、長浜の城主となってからも、やすむことなく主人のために諸国へ出てゆき、たたかいつづけた。
秀吉は主として西国地方（中国、四国、九州）を平定することに力をそそいだ。
あまりによくはたらいてくれるので、織田信長は、ある年の正月に、家来たちがたくさんいる中で、秀吉をそばへまねき、そのひたいを何度もなでてやりながら、
「さむらいである以上は、この筑前守（秀吉）にあやかるがよい」
と、ほめたたえたそうだ。

秀吉と家康

信長のふところにいて大はたらきをしたのが秀吉なら、信長を外からたすけた功労者は徳川家康だといえよう。
だからといって、家康はとくべつに信長が好きだったわけではない。
だが、織田信長という大名の力の強さを、よく知っていた。
しかも、家康の領国は、まえまえから信長の国のとなりあわせになっていたし、
「どんなつらいことがあっても、信長どのの味方をしておけば、まちがいはない」

と、こころをきめていた。
姉川の戦争でも、信長のために、あれだけのはたらきをした家康であったが、その翌々年になると、
「いよいよ、武田信玄が腰をあげて、京都をめざし、進軍してまいります」
との知らせがはいった。
そのとおりであった。
その年の十月三日に、五十二歳の武田信玄は三万あまりの大軍をひきいて、甲府の城を出発した。
武田軍は、つぎつぎに手むかいする城を落としいれ、徳川家康の本城、浜松へせまってきた。
家康は、みずから四千の兵をひきいて天竜川のほとりまで押し出してきた。三万と四千では、いくら家康が戦ってみても、かちめはない。
それでも家康は、見付の町に武田軍をむかえて、猛烈に戦い、
「徳川を見くびるな！」
という意気ごみをしめし、さっと浜松の城へひきあげた。
「若いくせに、なかなかやるのう」
武田信玄は笑いながらも、家康がさいごまで信長のために、自分の行く手をさえぎろうとしている決心のかたさを知った。
武田信玄にとっては、いまがチャンスであった。
そのときの織田信長は、浅井、朝倉や本願寺などを相手にして、目がまわるほど戦いにいそがしか

った。
「そちらをたすけたいが、とても手がまわらぬ。なんとかして武田軍をくいとめていただきたい」
と、信長が家康にたのんできているほどだ。
このすきに、せめて徳川家康をほろぼし、武田家の勢力を、信長のすぐうしろまでひろげておきたい、というのが武田信玄のねらいである。
信玄は、すぐに浜松へ攻めてゆかず、徳川家の城のうちでもたいせつなところといわれる、二俣城をとりかこんだ。
この城は、家康のけらいの中根平左衛門がまもっていて、けんめいに戦ったが、ついにやぶれた。
この城を武田軍にとられてしまっては、家康も浜松の城へたてこもって戦うよりほかに、道はないとみえた。
「うふふ、ふ……」
武田信玄は、得意の笑いをうかべ、
「さて、家康はどうするかな……？」
わざと、浜松城へは近よらず、十二月二十二日の朝になって、武田軍は三方原へむかって、すすみはじめた。
三方原は、浜松の北がわの丘の上にあり、南北が、約十二キロメートル、東西が八キロメートルほどの平原であった。
「さあ、家康よ。わしがおそろしくないなら、ここまできてみよ」

と、信玄は笑っているかのようだ。
そのこころは、家康の胸にも、ぴいんと、ひびいてきた。
（おのれ！）
三十一歳の家康の熱い血がわきたってきた。
織田信長は、つかいをよこして、
「じっと、このたびはがまんなされ。浜松の城にこもり、出てはなりません。おそらく、信玄は甲斐へかえってゆくと思うし、もしも、ほんきで浜松を攻めるようなら、自分もだまってはいない。きっと、あなたをたすけにゆく」
と、いってきている。
しかし……。
（ここで、ぬけぬけと武田軍を見送っては、わしの名がすたる。がまんできない）
ついに、家康は、
「よし！　三方原へ打って出よう」
とさけんだ。
城をまもる兵は、わずかに五百。
ほとんどの軍をひきいて、徳川家康は浜松城を出た。
（おれの国は、おれがまもらねばならぬ！）
自分の国の中を、わがもの顔にふみにじって歩いている武田信玄を、このままにしてはおけない。

勝てぬまでも、手ひどいめにあわせてやらぬと、来年も、また次の年も、武田軍は攻めてくるであろう。
「なに、家康が押し出してきたか」
と、武田信玄はおどろいた。
おどろいたが、しめたと思った。のぞむところである。
ひろい平原の中で、敵の大将が、みずから戦おうというのだ。この機会に家康を討ちとってしまえば、もうけものであった。
武田軍は陣形を三つにわけ、近づいてくる徳川軍を待ちうけた。その場所は、三方原の祝田（ほうだ）の坂とよばれるあたりだ。
徳川軍が、あらわれた。
そして、黒雲の間から落ちてくる夕日をあびた両軍は、ながい間、じっとにらみあっていた。
そのうちに、徳川家康はしびれをきらし、
「かかれ！」
攻撃の火ぶたをきった。
ひとしきり、両軍の鉄砲隊が出て撃ち合うと、
「わあっ……」
つぎは、やりをかまえた先ぽう部隊がわめき声をあげて押しかかっていった。
そのころの鉄砲はたいへん貴重な武器で、両軍とも持っている数は少ないうえに、一発うつと、あ

とがつづかない。
新しく火薬とたまをいれ、火なわの火をうつさなくては発射できないのである。
だから、はじめに鉄砲をうってしまうと、つぎには人と人とが、やりと刀をふりかざして突撃することになる。
馬が、よろい武者が、やりと刀が、土ぼこりをまきあげ、つむじ風のようにぶつかり合い、もみ合った。
徳川家康も、馬上からやりをふるい、まっさきに乱軍の中へとびこんで戦った。
しかし、もとより勝ちめはない。
こちらの三倍もある武田軍だし、姉川で相手にした朝倉軍などはおよびもつかぬ強さであった。むかしから、武田軍の強いことをみとめぬものはない。
ついに……。
徳川軍は突きくずされた。
「ひけい。ひきあげよ！」
家康は、かえり血をあび、みずから最後までのこって武田軍の追撃をふせいだ。
ばらばらになりながら、徳川軍は浜松城へひきあげた。
徳川家康も、一時はただひとりで、松林の中を敵にかこまれ、馬を走らせるというありさまであった。
こうして、徳川軍は、負けるのをかくごで出ていき、負けた。

けれども、大軍をおそれずに出ていった家康の勇気をみとめぬものはなく、
「姉川のときも武勇めざましい大将と見たが、こんどはまた、武士の意気地をつらぬきとおした、あっぱれな戦いぶりじゃ」
諸国の大名のあいだで、徳川家康は、
「まことに、たのみがいのある大将だ」
という信用がひろまっていったのである。
この信用は大きい。この戦いに負けた徳川家康だが、負けて得たものは大きかったのだ。
織田信長もびっくりしたが、
「よくやってくだされた」
よろこんだのは、いうまでもない。
ところで……。
勝った武田信玄は、浜松まで追いかけきたか、というと、そうではない。
武田軍は三方原をくだって、三河の野田城（これも徳川の城の一つ）を落としいれた。
こうして、むりに家康の首をとろうとはせず、まわりの城をみんなとってしまえば、いまに徳川家康は手足をもぎとられたのとおなじになって、降参しなくてはならないことになる。
それが、武田信玄のねらいであった。
だが、ものごとはうまくゆかないものだ。
信玄が病気になってしまったのである。

信玄の病気は、肺結核だったといわれている。

陣中で病気をなおそうとしていた信玄は、翌年まで、三河の鳳来寺にとどまり、静養につとめた。

（どうも、わしの病気はよくならぬ。ひとまず、甲府へ帰ろう）

ようやく、信玄は心をきめ、夏のころになってから軍をまとめ、伊那街道を北へすすんだ。

そして……。

もう少しで、自分の城へ帰りつこうというところで、死んだのである。

武田信玄が病死したところは、信州の駒場（こまんば）という村だ。

ときは、一五七三年（天正元年）の四月十一日である。信玄は、五十三歳であった。

武田信玄は、天下をおさめるだけの実力と人格をそなえたりっぱな大名で、自分の国が甲斐（山梨）のようなふべんなところではなく、もっと、京都に近いところにあったとしたら、きっと、信長よりも先に天下をとっていたろうと思われる人だ。

それだけに、この大敵が死んだことによって、織田信長が、どれだけ有利になったことか、いうまでもないだろう。

信玄が死んだのちの武田家は、子供の勝頼がついだ。武田家はのこっているが、勝頼と信玄とでは人物がちがう。信玄のいない武田軍は、しだいに、おそろしい軍隊ではなくなった。

だから、徳川家康も力をもり返し、つぎつぎに、自分が信玄にとられた城や国を、とり返してゆくようになる。

そのころ——。

織田信長は、将軍、義昭にむかって、

「あなたは、もう将軍ではない。あなたがいると、かえって世の中がみだれてこまる」

と、きめつけ、義昭を京都から追いだしてしまった。

これで、およそ二百四十年もの間、とにかくひきつがれてきた足利将軍は、きえてしまったことになる。

長篠の戦い

織田信長が新しい城をきずこうと思いたったのは、一五七五年（天正三年）も暮れようとするころであった。

この年の春——。

信長は、またも徳川家康とともに、武田軍と戦った。

信玄が死んだのちは、その子の武田勝頼が、

「ぜひとも、信長と家康をほろぼして、京都へのぼらねばならぬ。これはなき父の心をつぐことである」

と、すきさえあれば家康の領国へ攻めこんでくる。

「もう、ほうってはおけぬ」

信長も決心をした。

そして、信長と家康の連合軍四万あまりは、三河（愛知県）の設楽原（したらばら）へ押し出していった。
武田勝頼も、徳川軍の味方をしている奥平信昌の長篠城を攻めとろうとしていたが、一万五千の軍をひきいて設楽原へすすんだ。
武田方の重臣たちは、
「殿、敵は四万をこえる軍勢でございます。そこへ一万五千のわれらが、いくさをしかけても、とうてい勝ちめはありますまい」
こういって、若い主人の勝頼をいさめた。
「だまれ！」
勝頼は、きかなかった。
武田勝頼は、武勇すぐれた大将ではあるが、とてもなき父の信玄のまねはできない。
できないのに、
「わしだって、父上に負けるものか、わしが武田のあるじとなってから、武田家の勢いがおとろえてしまっては、わしの不名誉になる」
と、何ごとにもむりをする。
それが、こんどのいくさにもあらわれた。
設楽原の戦いは、四月二十一日の明けがたからはじまった。
「しゃにむに敵を突きくずせ！」
武田勝頼は、軍を十三隊にわけ、織田、徳川軍がまちかまえている陣地めがけて突撃させた。

織田信長は、陣地の前に木のさくを立ちならべ、ここへ鉄砲隊をおいて、武田軍が攻めてくるのをひきよせ、
「それ、撃て！」
いっせいに射撃をした。
これは、武田軍もかくごをしている。はじめは鉄砲のたまがとんできても、つぎにはやりと刀だと思っていたからだ。
ところが、つづいて、
……だ、だあん……だだあん……。
と鉄砲のたまがとんでくる。
「もうよいだろう」
と、思って、
「それ。さくをつきやぶれ！」
武田の騎兵が、馬をかって突進すると、また、いっせい射撃であった。
ばたばたと、武田軍の将兵がたおれた。
「いったい、織田信長は鉄砲をいくつもっているのか……」
と、武田軍はあきれてしまった。
信長は、このいくさに三千丁もの鉄砲を用意してきていたのである。
これにたいして、武田軍の鉄砲は、五百丁にもたりないほどであった。

信長の鉄砲隊は、三列横隊にならんでいて、一列が敵を撃つと、すぐにうしろへさがってたまをこめる。

その間に、二列めが撃つ。そしてさがる。三列めが撃ってさがると、はじめに発砲した鉄砲隊は、すでにたまをこめ、火薬に火をつけているから、すぐに発射できるのである。

こうして、つぎつぎに、やすむ間もなく鉄砲がつかえたのも、その数がたいへんに多かったからだ。

これでは、いくら強い武田軍でも、たまったものではない。一万五千のうち、一万人もの将兵が戦死をしてしまったのだ。

武田勝頼は、涙をのんで甲府へ逃げかえった。

この戦いでは、武田軍の中でも世に知られた勇士がたくさん死んでしまい、武田軍の力の半分以上は、この戦いできえたといってもよい。武田勝頼は、とりかえしのつかぬ大きな失敗をしてしまったわけだ。

それにしても……。

織田信長は、どのようにして、これだけの鉄砲をあつめたのだろう。

一つは、貿易港でもある堺の町を手に入れていたから、この町でつくる鉄砲のほとんどを、自分のものにすることができた。

もう一つは、これも鉄砲をつくるところとして有名な、北近江の国友村を、自分の手に、しっかりとつかんでいたからだ。

国友村は、浅井長政がいた小谷城のすぐ近くにある。そして、すでに浅井は信長にほろぼされてしまった。

堺といい、国友村といい、もっとも新しい科学的な武器である鉄砲をつくるところにねらいをつけ、早くも、この重要な場所を、わがものにしてしまった織田信長であった。

いまでこそ、鉄砲などはどこにもあるように思えるが、そのころの鉄砲は、いまのジェット機のように貴重で高価な物だったのである。

「もう、武田も出てくるだけのちからはあるまい」

と、信長は考えた。そして、

「ひとつ、わしが住む新しい城をきずいてみよう。いままで、だれもつくったことのないような、りっぱな城をつくるのだ」

と、思いたった。

安土の城

新しい城をつくる場所に、織田信長は、近江の安土をえらんだ。

琵琶湖の南がわの岸に、三つの峰からなる安土山という山がある。

山というよりは丘といってもよい。この山のもっとも高いところで二百メートルほどだが、ここへ、信長は七層づくりの天守閣をきずくことにした。

つまり、七階建ての城をつくろうというわけで、そのような天守閣をもつ城は、それまで日本のどこをさがしてもなかったのである。

この安土の城をつくるのに、信長は、三年の歳月をかけた。

できあがった安土城を見た、キリスト教の宣教師、ガスパル＝クエリヨという西洋人が、つぎのように書いている。

「この城は、ヨーロッパのどんな大きな城とくらべても、見おとりはしないだろう。城のまわりの石がきは高く、城の中のひろさ、大きさ、美しさは、たとえようもないほどのりっぱさだ。黄金のかざりをつけた御殿や、屋敷がたちならび、そのつくりは、人の手のおよぶかぎりのみごとな細工がしてある。

城の中央には、七階の塔（天守閣）があって、そのつくりのたくみさには、つくづくおどろかされる。中にある彫刻は、すべてが金によってぬられ、白や黒や、赤や青の色とりどりにぬられた壁や窓。そして青いかわらによって屋根がつくられ、そのかわらの前のところは、金をかぶせたまるいかたちになっている……」

このガスパル＝クエリヨが見た安土城の屋根のかわらが、昭和四十年に、安土山の土の中から発見された。

安土城は、むかしの戦火にやけおち、いまはるいるいたる石がきだけが残っているが、この金色の屋根がわらと石がきを見ただけでも、そのころの城のすばらしさが、よくわかる。

安土山にそびえる七層の城。

その城の屋根は、金色にてりかがやき、青い琵琶湖の水にうつっていたという。そのころとしては、夢のように美しい、おとぎ話にでも出てくるような城であった。

御殿や天守閣のかざりにえがかれた絵も、信長のこのみによった、すばらしいものであったらしい。

戦争をするときの、魔神のようにすさまじい織田信長と、このように美しい城をつくる信長とは、まことに別の人間のようだ。

すべてに「力」をもった人間という生きものは「りくつ」では、はかりきれないふしぎなものをひそめている。

人間を「りくつ」ではかろうとすると、たいへんなまちがいをおかすことがあると、むかしのえらい人がいったことばがあるけれども、織田信長がしてきたいろいろな事がらを知るにつけても、そのことが「なるほど」と、うなずけるのである。

この城ができあがった一五七八年（天正六年）正月で、信長は四十五歳になった。

あの桶狭間の決戦に、死をかくごして、今川軍へきりこんだときは二十七歳だったのだから、およそ二十年にちかい年月がすぎ去っている。

そして信長は、天皇から、右大臣の位をうけた。これは、天皇をたすけて政治をおこなう重い役目なのである。

羽柴秀吉をはじめ、家来たちもぞくぞく安土へあつまり、屋敷をかまえた。

えらい家来たちは、安土山へ屋敷をつくることをゆるされたので、この山ぜんたいが、まるで、き

らびやかな城や屋敷のかたまりのように見えた。
信長は、この城下町がさかえるために、こまやかな心づかいを見せた。
「商人たちは、この町で自由に商売をしてもよい。だからといって、わしは、そのかわりに何も、もとめるつもりはない」
また、
「この町に住みつくものには、税金をとることや、労働をさせることもしない」
また、
「他の国からきたものでもさべつなく待遇をする。また、もとはだれの家来であっても、かまわない」
などと、いうものである。
これで信長の町が、はんじょうしないはずはない。信長がたくわえてきた力と自信は、よほどに大きくふくれあがっていたのであろう。
信長は、自分の町に日本の寺をいくつもおいたが、それと同時に、キリスト教の教会堂もたててやった。
青い目をした外国の坊さんたちがやってきて、町を歩いたり、キリスト教をひろめたりした。
日本の寺では、お経がきこえる。
キリスト教会堂では、賛美歌がきこえる。
いまから四百年もまえに、このような町をつくった殿さまは、日本にも外国にもいなかった。

キリスト教の宣教師たちは、信長にねがって、セミナリオをたててもらった。
セミナリオとは、キリスト教の学校のことである。
この学校では、ラテン語やポルトガル語のほかに、日本語での勉強もさせ、大名や武士たちの子たちが生徒になり、青い目の先生に教えられた。
織田信長は、西洋のぼうしやマントを身につけ、この学校へきて、
「みなのもの、よく勉強をしているか?」
などと、きくのであった。
信長はこう思っていた。
「キリスト教のものたちは、何年も何か月もかかって、ひどい苦労をしながら、海をわたって日本へやってきた。わしが見たところ、みんな心のよいものたちばかりだし、このものたちが日本へひろめようとしている神の教えも、べつだん害のあるものではない。
それに、このものたちは、遠い遠い外国のようすや文化のありかたを、日本につたえてくれたし、それはまことにおどろくべきことが多い。外国のようすをつたえてくれるのは、いまのところキリスト教の宣教師だけなのだから、このものたちをたいせつにしたい」
けれども、信長はキリスト教の信者になろうと思ったことは、一度もない。
「人間は死んでしまったら、もう何ものこらぬ。ひとにぎりの灰になってしまうだけだ」
これが、織田信長の信念であった。
信長は安土の城ができあがってから四年後に死んでしまう。

もっと生きていたら、日本の国はどのような国になっていたろうか。
信長には、もっともっとやりたいことが、たくさんあったにちがいない。それは、どのようなものだったろうか……。
いま、安土セミナリオがあったという場所に立って、安土山をながめるとき、つくづくと、そのことを思わずにはいられない。

武田家ほろぶ

安土城をきずきながらも、信長は諸国に兵を出して、いうことをきかぬ大名や大将たちを降参させていった。
伊勢の国も……。
丹波の国も……。
また、中国地方をおさえている大大名の毛利家の水軍と、木津川で戦い、負けたこともある。
毛利軍は、あの石山（大阪）本願寺をたすけにやってきたのだ。本願寺は、比叡山の延暦寺を焼きはらったようにゆかなくて、信長も、ずいぶんてこずったが、やがて、石山も自分の手にすることができた。
越後では勇将、上杉謙信が病気で死んだ。
謙信は、武田信玄とならび、織田信長にとって、もっともおそろしい敵であった。もし、このふたりが、信長と家康のように力を合わせ、信長を攻めてきたら、城や町をつくりながら戦争をするなどというゆとりはなく、信長も、どうなっていたか知れたものではない。
なんといっても、信玄と謙信との仲がわるく、いつもたがいに戦争をしていたことと、このふたりが急に死んでしまったことは、信長にとって、ほっとする思いであったろう。
北陸や中国地方の一部にも、信長は手をのばし、これを自分のものとしたが、まだ毛利家は、びくともしていない。
毛利家が、このように勢いさかんになったのは、毛利元就の力が大きかったからだ。元就は、すでに死んでいたけれども、その子の輝元が、周防、長門（山口県）備後（広島県）備中（岡山県）石見（島根県）など、十か国のあるじとして、
「われらは、しいて信長を攻めようとは思わぬが、もしも信長が、こちらへ手をのばすならば、ゆるしはせぬ」
かたい決心をしている。
「とにかく、おまえが中国へゆけ」
と、織田信長は羽柴秀吉に命じた。
秀吉は、長浜の城から播磨（兵庫県）の姫路城へうつり、ここに腰をすえて、毛利方の敵と戦うことになった。
「よし、中国は、ひとまず秀吉にまかせておき、このさい、いっきょに武田家をほろぼしてしまおう」

と、信長は思いたった。
それというのも……。
長篠、設楽原の戦いで、あれほどにひどい目にあった武田勝頼が、
「来年こそは、尾張、三河へ押し出して、家康や信長に、ひとあわふかせてやる」
と、いいはじめたからである。
長篠の戦いから、早くも七年の月日がながれている。その間に、武田軍も力をたくわえていたことは、たしかであった。
「このままにしておくと、またうるさい相手になる」
と、信長は考えたのであろう。
しかも、武田軍は、遠くの毛利軍へもはたらきかけ、
「織田をはさみうちにしてしまいましょう」
などと、いっている。
一五八二年（天正十年）の春——。
織田信長は、大軍をひきいて安土の城を出発した。
こんども、徳川家康が駿河から、まず甲斐の国へ攻め入った。信長は、わが子の信忠とともに、信州の伊那から、武田の領国へはいった。
四方八方から攻めこまれた武田勝頼は、
「おのれ、おのれ。どこのやつばらも、信長のいうなりに尾をふってゆくのか！」

と、くやしがった。
滝沢、飯田、松尾など、武田家にぞくする城が、つぎつぎにうちやぶられていった。
そして、信州の高遠城もやぶれた。
この城は、勝頼の弟の仁科盛信がまもっていたのだが、盛信は兵をひきいてよく戦い、織田信忠の軍をなやました。しかし、ついにやぶれ、
「もはや、武田の命運もつきた」
とさけび、腹を切って死んだ。
いっぽう、徳川家康は、駿河の江尻城をまもっていた穴山伊豆守へ、
「むだな戦いをして負けたところで、つまらぬことではありませんか」
ひそかに、いってやった。
穴山伊豆守は、武田勝頼の姉むこであったが、
（それもそうじゃな）
あっさりと、かぶとをぬぎ、城をあけわたしてしまった。
親類の中から、こういう人が出たのでは、武田家も、おしまいである。
武田勝頼は、甲斐の新府の城へ兵をまとめ、家来たちに、
「信州、戸石の真田昌幸が、ひとあし先に国へ帰り、岩櫃の城へはいって、わしをむかえる準備をしている」
と、いうと、小山田信茂というものが、

「いや、それはあぶないことです。あちらでは、すでに徳川や北条の手がまわっておりましょうし、それよりも、わたくしの城へおいでください。あの城にこもって戦いましょう」

しきりにすすめた。

小山田のことばにうごかされた勝頼は、やっと心をきめ、兵をひきつれて新府の城を出た。

ところが、この小山田は、早くも織田信長に味方すると、ひそかに約束をかわしていたのだ。

親類にうらぎられ、家来にそむかれた武田勝頼は、小山田の岩殿城へはいることもできず、ついに天目山のふもとへ追いつめられた。

このとき、勝頼にしたがう家来は、五十名ほどにへっていた。

「もはや、これまでじゃ」

さすがの勝頼もかくごをきめ、いさぎよく自殺をしてしまった。

こうして、戦国の世に、

「甲斐に、武田あり」

と、うたわれた武田家も、ついにほろびたのである。

織田信長は、

「こんどこそは、根こそぎ、武田の力をほろぼしてやるのだ」

と、てっていてきに逃げちった武田の将兵をさがしては、首を切ってしまった。

このとき、徳川家康が、信長にはないしょで、武田の家来たちをかくまい、自分の家来にしてしまったのは、有名な話である。

「なき武田信玄のようにえらい大名の下ではたらいた家来たちであるから、助けておけばきっと、わしの力になってくれよう」

と、家康は先を見こしていた。

たしかに、いのちを助けられた武田の家来たちは、のちに、家康のためによくはたらいたし、家康は、その人たちの口から、武田信玄のいくさのやりかたや、政治のしかたをきき、それを自分のものとしてしまった。

とにかく、この戦争は、思いのほか、早くかたづいた。

そして、武田家のものだった甲斐や信濃、駿河などの国々が、すっかり信長のいうことをきくようになったのである。

織田信長は、意気ようようと甲斐を出発し、安土へがいせんをした。

安土へ帰ったのは、四月二十一日であった。

そして……。

その日から、およそ四十日ほどしか、信長は生きていなかったのである。

家康父子

こんどの武田攻めについて、徳川家康のはたらきは、なみなみならぬものであった。

織田信長は、そのほうびとして、駿河の国（静岡県）を家康にあたえた。

「家康どのは、まことによくやってくれた」
さすがの信長も、こんどばかりは、つくづくと家康の忠誠に、感心をしたようである。
それというのも、わずか三年まえの夏に、信長は、家康の長男、三郎信康に腹を切らせていたのだ。
三郎信康は、若い大将として武勇にもすぐれ、徳川の家来たちも、
「三郎さまのような、りっぱなあとつぎがあるからは、徳川のお家も万々歳だ」
と、よろこび、父の家康も、
「何とか、りっぱな大将になってもらいたいものだ」
大きなのぞみをかけていたものだ。三郎の妻は、織田信長のむすめ、徳姫である。
けっして夫婦仲はわるくなかったのだが、三郎の母（家康の妻）の築山どのと、嫁の徳姫とのあいだが、どうも、しっくりいかなかったようだ。
そのうちに……。
「築山どのが、武田勝頼とひそかに手をむすび、信長や家康にそむこうとしている。しかも三郎信康までひき入れて、むほんのたくらみをしている」
という知らせが、織田信長のもとへとどいた。だれが知らせたかというと、徳姫が知らせたのである。
この事件については、いろいろの説もあるし、手みじかにのべることはできぬが、徳姫としては、
「わたくしと三郎さまの夫婦仲をじゃまする築山どのを、しまつしていただきたい」

と、父の信長にねがうつもりだったのであろう。
築山どのは、今川家の一族で、関口親永というもののむすめにうまれ、のちに徳川家康の妻となったひとだ。
しかし、このひとは気ぐらいもたかく、こころがみだれがちの人で、三郎信康をうんだのち、夫の家康とも仲がわるくなり、別れてくらしていたほどである。
つまり、築山どのは、わが子の三郎や徳姫といっしょに岡崎の城にくらし、家康は浜松城にいたわけだ。
さて……。
むすめの徳姫のうったえをきいた織田信長は、ちょうど家康の家来、酒井忠次が、岐阜の城へやってきたので、
「これは、まことか？」
問いただすと、酒井は、
「まことでございます」
と、こたえた。
築山どのが武田家と、ひそかにれんらくをとっていたことは、たしかなことらしいが、三郎信康までは、どうだったろうか。
とにかく、徳川の家来が、
「徳姫さまのうったえごとは、たしかである」

とこたえたのだから、どうしようもない。
「これでは、どうにもなるまい。三郎どのに腹を切らせなさい」
きびしく、信長が家康にいってよこした。
こういうときの織田信長は、たとえ、むすめのむこだろうと、ゆるしはしない。徳姫も、まさかに、こんなだいじになろうとは思わなかったろう。
「徳川の母さまが、夫をわるいたくらみにひきこもうとしていますから、なんとかしてくださいませ」
と、父にあまえて、うったえ出たとみてよい。それなのに父は、愛する夫に「死ね！」と命じてきた。
それにしても酒井忠次は、自分の若主人である三郎が不利になるようなことを、なぜ信長にいったのであろうか。
三郎と酒井とは、まえから仲がわるかったともいわれている。とにかく、徳川家康の立場は、苦しくなった。
いったん、いいだしたらきかぬ織田信長のはげしい気性を、家康はよくわきまえていた。
三郎に腹を切らせなければ、そのかわりに信長を敵にまわして戦うだけのかくごがいる。そうなれば、せっかくいままで、血と汗をながし、苦しい戦いをつづけてまもりぬいてきた徳川の家と国は、おそるべき信長の力の前に、ふみつぶされてしまうかもしれない。
ついに……。

徳川家康は、決心をした。
三郎信康に腹を切らせることにしたのである。
「わたくしには、すこしのやましいことはありませぬ」
と、三郎は涙をながして、父、家康にいった。
しかし、そのいいわけを信長がきいてくれるなら、なんのことはない。信長の前には、このようないいわけが通るはずがなかった。
一五七九年（天正七年）八月二十九日。
まず、家康は、築山どのを浜松に近い富塚の向い谷というところへつれて行き、ころしてしまった。
さすがの家康も心をなやませつづけ、病気になってしまったが、
「三郎の介しゃくをたのむ」
と、家来の服部半蔵にいった。
そして、二十一歳の三郎信康は、二股の城で腹を切って死んだのである。
三郎は死にのぞみ、
「おれは、天地の神にちかって、いささかのやましいこともない。これは、父上も、よくごしょうちだ。いま、おれは、いさぎよく死んだと父上につたえよ」
いいざま、いきなり刀を腹につきたて、服部半蔵に、
「は、早く首をうて！」

よびかけたが、半蔵は、あまりのかなしさに、刀をなげすてて泣きふしたという。

この事件の何がうそで、何がほんとうなのか、いまだに、はっきりしたことはわからぬ。ただ、家康が信長の怒りにふれることをおそれ、かわいいわが子を死なせたことだけは、事実であった。

このようにしなくては、自分の国がまもれなかった時代なのである。

そして、なおも家康は、信長のためにはたらきつづけた。そうすることが、つまりは自分の国をまもることになるのだ。信長も、自分のしたことは、よくわきまえていた。

自分のことば一つによって、わが子を死なせた家康が、三年後の武田攻めにも、いっしょうけんめいにはたらいてくれたことは、信長の心を、強くゆりうごかした。

安土へかえった織田信長のもとへ、駿河の国をいただいたお礼に、徳川家康がやってくるという知らせがはいった。信長は、

「徳川どのが通る道すじにある大名たちは、それぞれに気をつけて、家康どのをもてなすように」

と、命じた。

五月八日に、家康は浜松を出て、安土へ向かった。

道中の泊まり泊まりには、それぞれの大名が、信長の命令によって、ていねいなもてなしをした。

十五日、家康は安土へつき、宿にあてられた大宝坊にはいった。

信長は、明智光秀をよび、

「そちに徳川どののもてなしを命ずる。くれぐれも心をつけて、おもてなしをするように」

と、いった。

明智光秀は、京都から堺にまでつかいをやり、さまざまなごちそうをととのえ、家康をもてなした。

光秀は、羽柴秀吉とならんで、織田の家来のうちでも、世に知られたひとである。

むかしの本によれば、せっかくに光秀がとりよせたさかなが、くさいにおいをしているのを知った信長が、

「このようなさかなを、徳川どのの口へ入れるつもりか」

ひどく、光秀をしかりつけ、

「おまえではだめだ」

と、家康のもてなし役を、別の家来にかえてしまった。光秀は、これをひどくうらみに思ったというのだ。

それはともかく、光秀がもてなし役をやめ、坂本にある自分の城へかえったのは、ほんとうであった。

信長が、

「光秀は城へもどり、出陣のしたくをせよ」

と、命じたからだ。

それは、なぜか……。

ちょうど、このとき、備中の高松城を攻めている、羽柴秀吉から、

「毛利の大軍が押し出してまいりました。わたくしひとりでは手におえなくなりましたので、なにと

そ、援軍をよこしてください」
と、信長へたすけをもとめてきたのである。
「よし。武田をほろぼした勢いで、毛利軍をいっきょに討ちたいらげてくれよう」
信長は、心をきめ、明智光秀、細川忠興、高山右近などの大将を先ぽう軍として出発させた。
そして信長は、家康に、
「このような、あわただしいことになったが、あなたはゆっくりとあそんでいってもらいたい。こういって、ゆうゆうと家康をもてなした。家康ばかりでなく、その家来たちにも気をつかって、信長は、さまざまな品物をおくったりしている。
ごちそうのときなどは、信長みずから、
「このさかなは、このように料理して、こういう皿に入れて、徳川どのにさしあげよ」
と、さしずするありさまだ。
あの織田信長が、このように心をくだいて家康をもてなすことは、そのまま、徳川家康の力が大きくひろがったことをしめすものである。
美しい安土城の中で、信長のもてなしをうけながら、家康は、しみじみと、三年前に死なせた三郎信康の思い出にふけるのであった。

本能寺の変

織田信長は、手あつく徳川家康をもてなしながら、
「ちょうどよいおりであるから、京都や大阪、堺、奈良などへも、ゆるりと足をのばし、見物してゆかれたらどうか」
と、いった。
そして、案内のために長谷川藤五郎というものを、家康につけてくれた。
家康は、京都見物などをしてのちに、いったん浜松へかえり、軍をひきいて、信長の中国攻めにくわわることになったのである。
「すでに、明智、細川などが、兵をひきいて出発するしたくにかかっておることだし、自分も二十九日ごろに安土を出て、ひとまず京都の本能寺にとどまり、ゆるりと、諸将の兵があつまるのを待って出陣するつもりでござる」
「さようですか。では、それまでに堺見物をすまし、わたくしも本能寺へごあいさつにまいりましょう」
「さようか。では。来月の二日ごろがよろしかろう」
「しょうちいたしました」
と、家康は五月二十一日に安土を出発した。
家康が去ったのち、二十九日になると、織田信長は安土の城を出て、京都へむかった。このときの信長は、わずかに三十人ほどの供の家来をつれただけであった。
つまり、安土から京都までの間は、

「おれの庭のようなものだ」

と、思いこんでいたからであろう。

すでに、長男の信忠も手勢五百をひきいて、京都へはいっている。

京都へついた織田信長は、六角通り油小路にある本能寺へはいった。現在の本能寺のあるところより、少しはなれている。

京都での信長の人気は、ひじょうに大きなものとなっていた。いまや、信長は、日本全国のうちの半分以上の国々と大名たちを、自分の下にしたがえている。

日本の中心からはなれている東北や九州などは別にしても、これで中国地方の毛利家さえ降参させてしまえば、天下をとったもおなじことであった。

京都では、信長が天下をおさめているという感じそのままであった。天皇の信頼もあって、信長の力で、このところ京都は、まことに平和なあけくれがつづいているのだ。

六月一日の朝から、天皇のおつかいがあいさつにきたり、つぎつぎに公家たちが本能寺をおとずれる。

信長は、大勢の客をむかえ、本能寺の書院で大茶会をもよおした。

このころの美術品としても有名な茶の道具などを、信長は、わざわざ安土からはこんできていた。

これから、いくさにいこうとしている総大将が、このように、ゆうゆうとあそんでいたのだから、信長のいきおいは大したものであった。

「明智光秀も、きょうかあすには、亀山の城を出て、中国へむかうことだろうし、筒井、池田、中川

などの諸大名も、おいおいに兵をひきいてあつまってこよう。それまでは、ゆるりとすることじゃ」

信長は、気に入りの家来、森蘭丸に笑いかけた。

四十人あまりの公家たちや、茶人、大商人、えらいお坊さまなどが本能寺へあつまり、信長が武田家をほろぼしたことへのお祝いをのべた。

客たちが帰り、しばらくしてから、織田信長は寝所へはいった。夜中をすぎていたろう。

ずいぶんと酒をのんでいたし、信長は、すぐにねむりこんだ。どれくらい、ねむったろうか。

(おや……?)

信長は、ふとめざめた。

本能寺の、どこか遠い場所で、ただならぬ物音がきこえるではないか。

(酒によった者どもが、けんかでもしているのか?)

と思ったが、きびしい主人の信長が泊まっている寺の中で、家来たちがそのようなまねをするはずがない。

夜明けは近かったが、あたりには、まだあかつきのやみがたれこめている。

そのうちに門のとびらをたたきやぶる音がきこえ、人の叫び声や悲鳴がきこえはじめた。

「殿、なにごとでございましょうか」

森蘭丸をはじめ、信長の身のまわりにつかえている家来たちも、おき出してきた。

「見てまいれ」

と、信長がいった。

森蘭丸たちが、大廊下へかけていった。
突然、鉄砲の音がおこり、同時に、
「わあっ……」
ときの声が、門のあたりから寺の中へながれこんできた。
「殿っ！」
森蘭丸が顔色をかえ、かけもどってきて、
「明智光秀殿がむほんにござります」
「なに……？」
信長は、信じかねる顔つきであった。
自分が信じきっていて、こんどの戦いの先発を命じた明智光秀が、中国へゆくのをやめ、主人の信長を討ちに本能寺へ攻めこんできたというのである。
（まさか……？）
思いはしたが、これは、ほんとうのことであった。
そうと知ったとき、織田信長は、
「刀をもて。弓をもて」
てきぱきと戦いのしたくを命じながら、蘭丸にいった。
「女たちを早くにがしてやれ」
「はいっ」

「光秀がむほんか……。こうしたこともあるものか」
にやりと笑いつつ、信長は弓と矢をつかみ、廊下へ出ていった。

明智光秀

織田信長が、
「まさか、光秀が……？」
と、思ったように、明智光秀は自分でも、つい一か月ほどまえまでは、主人、信長の首をとろうなどとは、考えてもみなかったろう。
明智光秀とは、どのようなさむらいであったのか。
明智家は、美濃の国、明智庄におこったもので、いまの岐阜市の東、およそ四十キロメートルほどのところにある。
光秀の父、明智光隆は、稲葉山城主の斎藤道三に味方をし、自分の明智の城をまもっていた。
道三が死んで、斎藤家は、やがて織田信長にほろぼされたわけだが、そのまえに、明智家は斎藤父子のあらそいにまきこまれ、美濃の国を去っていた。
こののち、明智光秀は越前の朝倉義景の世話をうけるようになった。
足利将軍、義昭が、朝倉家の世話をうけているのに、織田信長へつかいをやり、
「どうか、わたしをたすけて、天下をおさめてもらいたい」

と、いっきた話は、前にのべたが、このとき、明智光秀は、
「いまに、きっと、天下は信長のものになるであろう」
見きわめをつけていた。
だから光秀は、足利将軍と信長の間にはいって、ふたりをむすびつけるために、いろいろとはたらいたようである。
信長のほうでも、
「明智光秀という男は、見どころがある。いまにわしの役にたってくれるだろう」
と考え、光秀をたいせつにした。
光秀は、さむらいでありながら、そのころの一流の学者でもあったし、歌をよむこともじょうずで、茶道にも通じている。
それでいて、いくさをさせてもうまい。
こういうわけで、光秀は将軍、義昭の代理というかたちで、京都の朝廷へもよく出入りをしており、
「うまく光秀をつかえば、すべてがうまくはこぶにちがいない」
織田信長は、光秀を家来にした。光秀も、けんめいにはたらいた。信長は、光秀をどしどし出世させた。
近江、坂本の城主にさせ、光秀が丹波の国を攻め、これを苦心の末に征伐をしておさめたときには、近江十万石の土地にくわえて、丹波の国もあたえた。

そして光秀は、亀山の城のあるじともなったのである。
まず、信長の家来の中での出世がしらといえば、羽柴秀吉と明智光秀だと、世にうたわれたものであった。
このように、信長からかわいがられていた光秀なのに、なぜ、主人を殺そうとしたのか……。
そのわけについては、いろいろの物語がうまれている。まず、
「信長の荒々しい気性と、学者のような光秀のおだやかな人がらとはどうしても、合わなくて、信長のほうではなんとも思わぬことでも、光秀にとっては、たまらない恥をうけたと感じることが多かった。光秀は、ひそかに信長をうらんでいた」
という人もあるし、
「羽柴秀吉が、あまりに出世してゆくので、光秀はこれをねたみ、信長をころして天下をとり、秀吉も押えつけてしまおうとした」
また、
「ながい間、光秀の胸の中にひそんでいた天下をとる夢が、とつぜん、かたちになってあらわれた」
と、いう人もある。信長から、
「おまえは、中国へ向けて先発せよ」
との命令をうけ、明智光秀は坂本城へもどり、さらに亀山の城へうつって出陣の準備にとりかかった。
この間に、主人の信長が、わずかな家来をつれただけで京都へはいり、本能寺で大茶会をもよおす

ことなども、もちろん光秀の耳へはいっていた。
光秀の家来たちも、六月一日になるまでは、まさか自分たちの主人が、織田信長という主人をころそうとしていることを知らなかった。
六月一日の夕方になって、
「信長公が、わが軍の出発のありさまをごらんになるそうじゃ」
急に、光秀はいいだした。
そして、全軍を亀山の東にあつめ、あっというまに京都へ向かって、すすみはじめたのである。
このときはじめて、光秀はおもだった家来たちへ、
「右府さま（信長）の首を討つつもりだ」
と、うちあけた。
光秀のむこである明智左馬之助は、この決意をきくや、
「ひとたび、口に出されたからには、あとへひかれませぬ」
と、こたえた。
とにかく、信長と光秀との間には、歴史の書物などにしるされてはいない、なんらかのことがあったのであろう。
（信長を討つなら、いまこのときだ。信長はわずか、三十人ほどの家来にかこまれて、寺の中にねむっているのだ。かならず首をとれる！）
明智光秀が、そう決心したことだけはまぎれもないことである。

なにしろ、亀山城から京都までは二十四キロメートルそこそこの道のりだから、こうした明智軍のうごきが、信長の耳へはいるすきもなかった。
夜道をかけて、すすみにすすみ、いざ、京の町へはいろうとするときに、
「信長公のみしるしを討つ！」
はじめて全軍につたえたのだから、兵士たちにしても「いや」だとか「いい」とか考える間もない。
さすがの織田信長も、あの、いつもおだやかな光秀が、このようにすばやく自分にせまってこようとは、夢にも思わなかったのだ。
人のこころやおこないには、表から見ただけでは、考えおよばぬものをひそめていることがある。
「あのような人が、まさか、あのようなことをするとは思ってもみなかった」
と、いうことが多い。それは、新聞にのる社会面の記事ひとつ見てもわかることだ。
また、事をおこす当人でさえ、
「まさか、自分がそんなことをすることはない」
と、ふだんは思っていることも、もののはずみでやってのける。
これがよい事ならばいうことはないのだが、悪い事にあらわれたときには、意外な大事をひきおこすものだ。
明智光秀のしたことが、よいとか悪いとかいっているのではない。人間というすばらしい生きものは、りくつでは知ることのできぬ一種の力によって生きている。それは自分でも他人でも、どうする

こともできぬ力なのだ。

さて……。

亀山を発した明智軍は、一万三千といわれる。

あかつきのやみがたちこめた京の町へ、明智軍はひたひたとはいりこみ、たちまちに本能寺のまわりを、あり一匹もはい出せぬように取りかこんでしまった。

寺といっても、本能寺はただの寺ではない。信長のような大将が泊まる寺であるから、ほりをつくり、土居をきずき、これで仏殿や殿舎をかこみ、小さな城のようなかまえになっている。

しかし、一万三千の兵にかこまれては、どうしようもない。

「それ！」

明智光秀が、さいはいをうちふり、

「かならず信長の首をあげよ」

と、さけんだ。

こうして、本能寺の変の幕は、切っておとされたのだ。

信長死す

本能寺での戦いは、短い間に終わりをつげた。この夜は百人あまりの家来が信長とともにいたけれども、一万あまりの敵を相手にしては、かなうはずもない。

織田信長は、弓の弦が切れると、十文字のかまやりをふるって明智勢をつきくずし、最後までたたかいぬいた。

だが、むざむざ自分の首を敵にわたすような信長ではない。

「わしの首をわたすな！」

ときを見て、森蘭丸に命じ、自分は殿舎の奥の一室へはいると、すばやくまわりに火をかけ、中から戸をとざし、そこで、みごとに腹を切って死んだ。

信長は、ときに四十九歳。

あと十年、この人が生きていたなら、日本の歴史は大きく変わっていたろう。そして、その影響はなんらかのかたちで、現代に生きているわれわれにも、つたわっていたにちがいない。

こうしてみると、人間の生き死には、何かのかたちで、後の世の人にかかわりあいがあるものだ。一つの家、一つの家族の歴史にはそれがある。

やがて、本能寺は内と外からの放火によって燃えあがり、すさまじい火柱をふきあげて焼けおちてしまった。

あの物事に注意ぶかかった信長にしては、信ぜられぬゆだんのもとに、あっけなく世を去ったのである。

本能寺の変をきいた信長の子、織田信忠は、自分が泊まっていた妙覚寺という寺を出て、五百ほどの兵をひきい、

「父上をたすけよ！」

本能寺へかけつけ、父とともにたたかおうと思ったが、すでに敵軍がひしひしと本能寺を取りかこみ、外から突入することができない。

「もはや、これまでじゃ」

と、信忠はあきらめ、すぐに二条の御所へはいった。

ここは二条の城ともよばれ、十四年ほどまえに、織田信長が将軍、義昭のためにたててやった屋形である。

義昭が信長によって、京都から追いはらわれたのちは、天皇の皇太子が住まわれていたのだが、

「かようなわけでございまして、わたくしは父、信長のかわりに明智勢とたたかわねばなりませぬ。それには、どうしても、この御所にたてこもらぬと、おおぜいの敵をむかえうつことができませぬゆえ、なにとぞ、上の御所までおうつりくださいますよう」

信忠は、こういって皇太子を上の御所へうつした。

すでに朝の光は、くまなく京の町にゆきわたっている。

そのうちに、信忠をたすけるため、二条の城へあつまってくるものもあり、城にたてこもる織田軍は千人ほどになった。城といっても、ほりや、石がきや、やぐらがあるだけで、もともとは将軍の屋敷であったのだから、一万あまりの大軍をむかえては、とてもかちめはない。

本能寺が焼けおちると、明智光秀は、全軍をひきいて、二条の御所へ攻めよせてきた。

織田信忠は、父ゆずりの鉄砲隊をたくみにつかい、何度も何度も、押しよせる敵を追い返した。

このときの信忠のたたかいぶりは、

「さすが、右大臣の子だけのことはある」

評判になったほど、めざましかったという。

明智軍は、なかなかに二条の御所をうちやぶれないので、御所の近くの近衛家の屋根へあがり、ここから御所を見おろし、鉄砲や弓で攻めたてた。

このため、織田方の戦死者がふえてきて、ついに御所へ火がつけられてしまった。

「このぶんでは、父上もなくなられたと見えるな」

と、信忠はあきらめの笑いをもらし、

「親子ともども、死ぬるとは……、よくよく運がつきたのであろう」

と、家来の鎌田新介に介しゃくを命じ、腹を切って死んだ。二十六歳であった。

この信忠だけでも生きのこっていたら、また天下のようすもちがってきていたろう、と思われた。

ともあれ一五八二年（天正十年）六月一日夜から二日朝にかけて、織田父子を魔の時がつつみ、見のがしてはくれなかった。

信忠は、死にのぞみ、家来の前田玄以に、

「なんとしても、逃げて岐阜の城へもどり、わしの妻や子を清洲の城へうつし、おまえが守ってくれ」

とたのんだ。

玄以はうまくのがれ出て、信忠の妻や、子の三法師をつれ出し、清洲へうつすことに成功をした。

明智光秀は……。

信長父子をころしたのち、

「逃げ散った織田方のものをさがし出し、のこらず引っとらえよ。またはきれ」

と命じ、いっぽうでは、

「いま、自分が信長父子を攻めほろぼした。これも信長の悪逆が天下のさまたげになるからである。五十日、百日の間には、京都のまわりの国々をおさめるつもりであるから、なにとぞ、この光秀に力を合わせていただきたい」

という意味の手紙を、中国の毛利や、四国の長宗我部、越後の上杉など、これまで織田信長のいうことをきかなかった大名たちへ送った。

そして、光秀は、兵をまとめ、近江の坂本城へいったん帰ったのである。

安土の城へ、本能寺の変のうわさがつたわってきたのは、その日のうちのことであった。夜になると、うわさがまことのことだとわかった。

京都から安土までは四十キロにみたぬ近さだし、安土城のるすをしていた織田家のものたちは、いろいろ相談をしたあげく、

「安土に、敵、明智軍をむかえても勝ちめはない」

るすいの大将、蒲生賢秀がいった。

「この上は、わしの城へのがれよう」

賢秀は、信長の妻そのほかをつれ、翌日の夕方までに近江、日野にあたる自分の城へひきあげた。

みすみす、安土の城に敵を入れるのは、くやしいことだから焼いてしまおうというものもいた。

しかし、賢秀は、

「この城は、信長さまが心をつくしてきずかれた、天下に二つとない名城である。これを焼きはらうには、しのびない」

といい、城の中の金銀や宝ものにも手をつけずに、引きあげた。

明智光秀は、六月五日に安土城へやってきた。

つい先ごろまでは、この城の中で、信長にあたまをさげ、その命令にしたがっていた光秀が、この金色にかがやく城を自分のものとして帰ってきたのである。

信長の財産も、光秀の手につかまれた。光秀は、これを家来たちにわけあたえた。

「この城は、おまえがまもれ」

と、光秀は、むこの明智左馬之助にいった。

豊臣秀吉

高松城の水攻め

本能寺の変が、出陣中の羽柴秀吉の耳へとどいたのは、六月三日の夜のことだといわれている。
これは、堺の商人で長谷川宗仁というものが、いち早く秀吉へむけて、急使をはしらせたからだ。
そのころ……。
羽柴秀吉は、備中（岡山県の西部）の高松城を攻めていた。この城は、毛利方の清水宗治という武将がまもっており、いくら秀吉が降参をすすめても、いうことをきかない。
高松城には五千ほどの兵が、たてこもっている。これをかこむ秀吉の軍は三万ほどであった。
はじめのうちは、秀吉も城へ攻めかけてみたのだが、清水宗治の兵はなかなかにつよく、こちらの戦死者が多くなるばかりなので、
「これは、気長に攻めるより、しかたがあるまい。わしは、むだな血をながしていくさをするのは、大きらいだからな」
いろいろと考えた末に、城のまわりへ土手をきずき、川の流れをせきとめ、高松城を水びたしにし

てしまったのである。
城は、まるで湖にうかんだようになった。しかも、おりからのつゆどきで、水はまんまんとふえ、城の中へも流れこんでいった。
こうして、すっかり城をかこんでしまったので、清水方では手も足もでず、城の中の食べ物を食べつくしてしまえば、うえ死にを待つばかりとなった。
水攻めは、兵糧攻めをかねていたわけだ。
これを知った毛利輝元は、おじの小早川隆景と吉川元春とともに、四万あまりの大軍をひきい、高松城をすくうためにすすんできた。
「毛利軍の主力が出てきたな。いまこそ上様（信長）にも出陣していただき、このさい、いっきょに毛利をうちやぶってしまったほうがよい」
羽柴秀吉は、こう考え、いそいで使いを安土の織田信長のもとへはしらせたのである。
信長は、これにこたえ、京都まで出てきたところを、明智光秀にそむかれて、急死をした。
本能寺の変を知ったとき、秀吉は、
（このことを毛利方でも知っているだろうか……？）
と、考えた。
明智光秀からは、むろんのこと、
「信長を討ったから、これからは、たがいに力を合わせよう」
と、毛利方へ、使者がかけつけたはずである。

そうなれば、毛利軍も高松城の清水宗治も、急に気が強くなり、秀吉のいうことなどは、けっしてきくまい。

ちょうど、高松城からは、

「もしも自分が切腹をして果てたなら、城中のものの命はたすけてくださるか？」

と、大将の清水宗治が、秀吉へ申しこんできたところであった。

水攻めにあって一か月もたち、しかも毛利軍が、なかなか秀吉を追いはらってくれないので、宗治は最後の決心をしたものらしい。

（こうなれば、なんとしても、上様の死んだことを、清水宗治に知らせてはまずい）

と、羽柴秀吉は、ただちに、

「しょうちをした」

返事をあたえた。

一説によると、明智光秀が毛利方へやった使いの者が、まちがえて秀吉の陣中へまぎれこんできたので、すぐにつかまえ、光秀の手紙は秀吉の手にわたってしまったともいわれている。

六月四日の朝になっても、毛利方では信長の死を知らなかった。

この朝……。

清水宗治は、秀吉からおくられた船一そうにのり、城から水面へこぎだしてきた。

そして、みごとに腹を切って死んだ。

秀吉は約束どおり、城中のものたちを毛利方へ送りかえしてやった。

「いそげ、いそげ」

と、秀吉はたくみに毛利軍へはたらきかけ、備中、美作（岡山県）、伯耆（鳥取県）などの国を、織田方へゆずりわたすという約束をとりつけ、毛利方との休戦講和に成功したのである。

毛利方では、

「織田信長のひきいる大軍が、すぐそこまでやってきているらしい。このうえ、いくさをしかけても、むだなことである」

と、思いこんでおり、まえまえから休戦のとりきめをいそいでいたところだったし、秀吉のいうなりになってしまった。

それにしても、どこまでも信長の死をかくし、わずか一日のうちにすべてをしまつしてしまった羽柴秀吉のはたらきは、たいしたものだといわねばなるまい。

毛利との休戦がきまると、秀吉は、わざとゆるゆるしたくにかかりながら、それでも六日のひるすぎになって、

「それ、ひきあげよ」

高松の陣をはらって、出発をした。

毛利輝元が京都においていた家来がかけつけて、本能寺の変を知らせたのは、このあとのことである。

「それと知っていたら、秀吉のいうままになるのではなかった！」

と、毛利軍はくやしがったが、もうおそい。秀吉は、

「明智光秀の力がととのわぬうちに、いっこくも早くかけもどり、光秀を討って上様のかたきをとらねばならぬ」

そのことで、頭がいっぱいであった。

信長父子が死んでしまったなら、ふたたび天下はみだれかかる。そうなれば、力が大きく強い大名が、まっさきに天下をとる機会をつかむことになる。

「よし、おれがやる！」

秀吉は、はじめて、いままでの自分が思ってもみなかった力がわいてくるのを知った。

信長の死を、かなしんでいるひまもないほどである。

「いそげ、いそげ！」

おりからの大雨の中を、しゃにむに軍をすすめ、七日の夜ふけに、自分の城がある姫路へついたのである。

およそ、まる一日で、秀吉は二十里（八十キロメートル）の道のりを馬で走った。この数日のつかれがでて、秀吉は馬の上で何度もいねむりをし、馬から落ちたりした。

八日いっぱいは、明智軍とのいくさの準備をおこない、九日の朝になると、

「上様のかたきを討ちにゆくのじゃ。みなのもの、生きてかえるな」

と、兵をはげまし、羽柴秀吉は勇気りんりんとして姫路を出発した。

このとき、秀吉は、城の蔵をあけ、中の金銀や米を全部出し、

「身分におうじて、家来たちへ、みんなわけてやれ」

と、いった。

家来たちは、みな、

「殿さまは、ご自分の財産をみんな投げだして、われわれにあたえられた。それは、きっと、この城へもどるつもりはないほどの強いかくごをなさって、明智光秀を討とうというのだ。われわれも殿さまのために、命をかけてはたらこう」

と、いい合った。

秀吉が、家来たちをつかうありさまは、いつも、このようにたくみであった。

六月十日の夜ふけ……。

秀吉の軍は、兵庫（神戸市）へついた。十一日の朝になると、さらに尼崎まですすんだ。

いっぽう、徳川家康はどうしていたろうか……。

家康は、五十名ほどの供の家来をつれ、堺見物をすませたのち、六月二日の朝に、本能寺の信長へあいさつをするため、京都へむかうつもりだった。そこへ、

「明智殿むほん」

の知らせがはいった。

家康としても、家来は少ないし、いくさのしたくもないから、このまま京都へゆくことはできない。明智軍に見つかれば、家康はころされてしまうであろう。

家康は、とりあえず河内（大阪府）へでて、知り合いの商人からくわしいもようをききとり、伊賀（三重県）の山中をぬけ、伊勢へでて、白子の浜から舟にのり、三河の大浜へついた。大浜から、家

康の城がある岡崎は目の前である。
徳川家康が岡崎城へはいったのは、四日の夜とも、五日の朝ともいわれている。
「よし、わしも光秀を討って、天下を……」
と、家康は思ったかもしれない。
けれども、家康は秀吉のように、自分の城の財産をみんな家来にわけ、あとのこともかまわず戦争にでてゆく、というようなまねはできなかった。
自分の国の政治のこと、戦争のこと、家来たちのことなど、若いときから口にはつくせぬ苦労をなめてきた家康だけに、あとのことをきちんとしておかぬと、思いきっていくさをする気持ちにはなれない。
家康は、少年のころから、一国のあるじであった。
身分のかるい小者として織田信長につかえ、いつも信長の大きなつばさの下で、思いきりはたらいてきた羽柴秀吉とは、そこがちがっていたのである。
六月十四日になって、徳川家康は、ようやく兵をひきいて尾張の鳴海まで押し出した。
ここは、二十数年まえに、いまはなき織田信長が、今川義元の首をあげた桶狭間の近くであった。

山崎の決戦

明智光秀は、

「わたくしが信長をほろぼしました」
と、天下に発表するとともに、
「ぜひぜひ、味方になってくれるように」
細川忠興へ、つかいをやった。忠興の妻は、光秀のむすめである。
おまけに忠興の父、藤孝は、むかし、足利義昭の家来で、光秀といっしょに、将軍をたすけてはたらいたこともある友だちであった。
だから、
「むこの忠興どのは、きっと、わしの味方についてくれるであろう」
光秀が、そう思ったのもむりはない。
細川父子も、信長の命令で、中国へ出陣するしたくにかかっていたところ、本能寺の変を知らされた。
細川家の城は、丹後（京都府）の宮津にあった。
「これは、たいへんなことになったぞ」
と、細川藤孝は、
「わしは、このさい隠居してしまおう。そのほうがよい。おまえが家をつぎ、すべての指揮をとれ」
子の忠興にいった。
「父上。きっと明智どのから味方をせよ、と申してまいりましょうな」
「うむ。なれど明智方に味方をしてはあぶない。光秀どのは天下をおさめるだけの力をそなえてはお

らぬ。このさい、きっぱりとこころをきめ、どこまでもなき信長公のめいふくをいのるという態度を、くずしてはならぬ」

「はい」

「おまえの妻のことを思えば、こころもいたむであろうが……。なにごとも戦国のならいと思え」

「わかっております」

細川父子は、まげを切って、信長のめいふくをいのった。

だから、明智光秀が、

「味方をしてくれれば、摂津の国をあたえよう」

と、いってきても、これを、ことわったのである。

光秀は、あせりはじめた。そして、大和（奈良県）郡山の城主、筒井順慶にも、

「味方をたのむ」

と、いってやった。

順慶も、むかしから光秀にかわいがられていたさむらいだし、一城のあるじとなれたのも、光秀からはじめのうちは、信長へうまくとりなしてくれたからである。

「よろしゅうござる」

と、筒井順慶は光秀の味方になって、兵をくりだしたりした。

ところが……。

「羽柴秀吉の軍が、早くも高松をひきあげ、姫路の城へはいって、いくさのしたくにかかっております」

との知らせがはいった。

「もう、ひきあげてきたのか……？」

順慶は、秀吉のすばやいうごきにびっくりした。

（こりゃ、秀吉にはかなわぬかもしれぬぞ。うっかり光秀の味方をしたら、あとで、とんだことになるわい）

そこへ、明智光秀から、

「秀吉の軍が、もうすぐに出てくるから、おぬしは急いで河内まで押し出し、陣をかまえてもらいたい」

使者がとんできた。筒井順慶は、

（どちらへ味方をしたらよかろうかな？）

頭をひねったあげく、

（しばらくは、どちらの味方もせず、ようすを見ることにしよう）

光秀のいうことなどきかずに、自分の城へこもり、食物などをはこびこんで、うごこうとしなかった。

「早く出陣してくれ」

しきりに、光秀のつかいがやってくる。しかし、順慶はのらりくらりといいのがれていた。

羽柴秀吉からも、やがて、
「わしの味方をせよ。わるいようにはしないから……」
と、つかいがきた。
（やっぱり、秀吉に味方しよう）
そうきめて、ちかいの証文を書いて送ったが、むろん光秀にはだまっていたのである。
羽柴秀吉は、全軍をひきいて富田のあたりへ押し出してきた。
明智光秀も、
（秀吉がもどってくるまえに、もっと、こちらの力を大きくしておきたかったのだが……）
と、秀吉の進軍の早さにおどろき、いくらかあわてぎみに軍をひきい、洞ケ峠に陣をかまえ、
「筒井順慶は、まだこぬか？」
じりじりしながら待ったけれども、筒井軍はあらわれない。
しかたなく、峠をくだって下鳥羽（京都府）へでて淀の城へも兵を入れた。
この淀城の近くが、山崎とよばれるところである。
ここは、いくさをするについての、重要な地形をなしていた。
つまり、京都盆地の平野が、山崎のあたりへきて、東と西の山にはさまれ、この山と山の間を淀川がながれている。西の天王山、東の男山にはさまれたところが、くびれたようにせまい。
このせまいところを通って、むこうの大阪方面から、羽柴秀吉が攻めてくるのであった。せまいところなのだから、秀吉の大軍は一度に通れない。

そこをねらって、こちらからたたきつぶす。作戦としては、それがよい。
だが、どうしたわけか……。
明智光秀は、いったん山崎へくりだした兵をひっこめ、盆地がひろびろとしたあたりまでくだって、勝竜寺、淀や下鳥羽のあたりへ陣地をかまえた。
光秀は、秀吉のすさまじい進軍の早さにおどろき、
（おれの使いのものは、毛利方へついたのだろうか？　いや、たしかについているはずだ。ついていれば、信長の死んだことを知った毛利輝元は、こうもかんたんに秀吉を引きあげさせることはないはずだが……？）
まよい、なやみ、自分では気づかぬうちに、いくさをするための闘志をうしなっていたのかもしれない。
六月十二日の夜……。
秀吉は、天王山を占領した。
秀吉軍は、山と山にはさまれたところを通りぬけ、明智軍の前にあらわれたのである。
決戦は、十三日の昼ごろからはじまった。
秀吉軍は、すべてを合わせて四万。
光秀軍は、一万六千。
兵力において、光秀は、すでに負けていた。戦場は、前夜からの雨にけむっていた。
織田信長の三男、信孝が、丹羽長秀とともにかけつけ、秀吉の軍にくわわったころ、両軍の鉄砲が

なりひびいた。
「主人にそむいた逆賊、明智光秀を討て！」
と、羽柴秀吉はさけんだ。
秀吉軍にはいっている黒田孝高、高山重友、中川清秀、池田恒興、加藤光泰などの部隊が、
「うわあ……！」
ときの声をあげて、突進した。
それでも、明智方の斎藤利三がひきいる一隊は、この秀吉軍の先ぽうにおそいかかり、はげしく戦った。
「天王山をうばいかえせ」
と、光秀は命じた。
そのくらいなら、なにも山崎からひきあげず、秀吉軍が山へのぼるまえに、天王山へはいっていればよかったのである。
ときは、すでにおそかった。
押しかえし、また押しもどされ、必死に戦ううちに、
（これは、もういかぬ）
と明智方の武将、御牧三左衛門は、
「このままでは、わが軍は全滅してしまいます。そうならぬうちに、ひとまず軍をひき、近江へもどって敵をむかえてください」

つかいのものを、総大将、明智光秀のもとへ走らせた。
光秀は青ざめ、くちびるをかみしめていたが、そばにいた比田則家というものが、
「御牧どのの申すこと、もっともでござる」
すすめたので、光秀はこころをきめ、全軍に退却を命じた。
「それ逃げろ」
「とても、かなわぬ」
こうなると、光秀軍の兵たちは、先をあらそい、雨とどろにまみれ、めったやたらに逃げはじめる。
「勝ったぞ！」
「ひとりものがすな！」
反対に、秀吉軍は勢いづき、馬をならべ、やりの穂先をひらめかせて、追撃をした。
このありさまを見て、
「もう、だいじょうぶ。わが軍の勝利じゃ」
羽柴秀吉は、にっこり笑ったが、
「なれど、敵が逃げる道々をきびしくかためよ。光秀は勝竜寺の城へ逃げこんだらしいが、けっして逃がすな」
きびしい命令をくだした。
この勝竜寺城から、明智光秀がのがれたのは、夜がふけてからであった。

まだ、雨はやまない。
光秀は、明智茂朝。進士作左衛門など、わずかな家来たちにまもられ、ひそかに勝竜寺をでた。
（坂本の城へかえり、そこで秀吉と戦おう）
そのつもりであった。
敵のかこみはきびしい。
雨のやみの中に、敵のたいまつのあかりがはしり、やりが光っていた。
その中を、光秀の一行はどうにかきりぬけ、淀川の岸べから伏見桃山の中腹をこえ、山の東がわへくだりさらに北へ道をとってすすんだ。
光秀たちが、小栗栖の村のあたりへさしかかったときである。
「あっ……！」
先頭をゆく村越三十郎というものが、さけび声をあげた。
「どうした？」
「三十郎、返事をせよ」
くらい竹やぶの道である。
明智光秀が、馬から身をのりだしたとき、竹やぶの中から突き出されたやりが、光秀の腹を突きさした。
「む、むう……」
とっさのできごとだ。

光秀は、うなり声をあげた。
竹やぶの中から、
「おまえたちは落ち武者だろう」
「刀も、よろいもおいてゆけ」
大勢の声がした。
これは、このあたりの土民である。いくさに負けて逃げるさむらいをころし、刀ややり、よろい、かぶとなどをうばって金にする者たちらしい。
光秀は、痛みがはげしく、馬にのっていられなくなり、明智茂朝へ、
「わしの首をうて。とても坂本へは帰れぬ」
といい、ついに、ここで死んだ。
茂朝は、光秀の首を竹やぶの中へかくして、逃げたが、やがて首は見つけだされ、羽柴秀吉の前へとどけられた。
織田信長を討ちほろぼしてから、わずかに十日あまりで、明智光秀の天下とりの夢はきえた。
そして、光秀をほろぼした羽柴秀吉は、主人のかたきをまっ先に討ったばかりでなく、このことによって、思いもかけなかった天下とりの足がかりをえたことになる。
まるで、光秀は、秀吉に天下をとらせるために生まれてきたようなものではないか。
秀吉は、光秀の首を京都の粟田口というところへ、さらしものにして、
「このとおり、明智光秀を討って、主人のうらみをはらしました」

と、世の中に知らせたのである。

さらに、羽柴秀吉は近江へはいり、光秀に味方していた人びとを降参させ、あるいは攻めほろぼした。

近江から美濃へ、秀吉は、本能寺の変があってから、一か月もたたぬうち、まえの主人の信長の本国だった国々を手におさめてしまった。

この、すばやいはたらきには、信長の重臣である、柴田勝家も、かけつけるひまがなかった。

柴田勝家は、北国も北国、遠い越後のほうへ出陣していて、上杉景勝と戦っていたのだ。

本能寺の変を知ったのは六月八日ごろだし、とても十三日の山崎の決戦にかけつけるわけにはいかない。

徳川家康は、

「光秀は、わたしがほろぼしましたから、ひとまずお帰りください」

との秀吉のつかいがきたので、浜松へもどらぬわけにはいかなかった。

こうして、羽柴秀吉は、だれよりも早く、主人のかたきを討った。その、めざましいはたらきをみとめぬものはない。

秀吉のえらさは、急に大きなものとなった。そういってよい。

ここで、あの美しい夢の城——安土城のことをのべておきたい。

安土城は、焼けてしまったのである。

この城は、一時明智軍のものとなり、光秀のむこの明智左馬之助がまもっていたが、山崎の敗戦を

きくと、

「父上は、きっと坂本へ引きあげたにちがいない。こうなれば坂本へはいって、父上とともに戦おう」

全軍をひきいて安土を出発し、坂本へむかった。

このとき、左馬之助が安土城を焼きはらったと、しるしている書物もある。

また、左馬之助が出ていったあと、信長の次男の織田信雄がはいってきて、この信雄が、なき父がたんせいこめてきずいた宝物のような名城を焼きはらってしまったともいわれている。

こうなると、わけがわからなくなる。

敵は逃げてしまったのだから、父の城を灰にすることはないはずだが、もしそうなら、歴史の表面にあらわれてはいない何かの理由があったのだろう。

まことにおしいことだが、死んだ織田信長は、あの世から、

「なに、生きているものは、必ず死ぬ。つくりあげたものは、必ずこわれるのだ。それでよいわ」

こともなげに、笑っていたかもしれない。

秀吉のおいたち

羽柴秀吉は、一五三七年（天文六年）の二月六日に、尾張、中村（いまの名古屋市内）に生まれた。

父の名を、木下弥右衛門という。

弥右衛門は、織田信長の父、信秀につかえたことがある。つかえたといっても、ごくかるい身分のもので、兵隊の中でもいちばん下の小者にすぎなかった。

そのうちに、弥右衛門はいくさに出て傷をうけ、じゅうぶんにはたらくことができなくなったので、中村へひきこもり百姓になった。

そして、この傷がもとで、秀吉が七歳のとき、病死をしてしまったのである。

秀吉の母はなかといって、はたらきものの婦人であったが、夫に死なれ、子どもの秀吉をそだてているうち、人のすすめもあり、これも織田信秀の茶坊主をつとめていた筑阿弥のもとへ、二度めの嫁入りをした。

秀吉をつれ子にして、再婚したなかは、筑阿弥との間に、一男一女をうんだ。

子どものころの秀吉は、日吉丸とよばれていたともいうが、それよりも、

「小ざる、小ざる」

と、あだ名をつけられていたのは、そのころから、やはり顔つきが、さるに似ていたのであろう。

やがて小ざるは、近くの寺へ小僧にだされた。

しかし、いたずらばかりして、お寺の仏像をこわしたり、和尚さんのいうことをきかなかったりで、

「もう、寺へはおけぬ」

追い出されてしまった。

そのつぎには、かじやへ小僧にいった。そこでも追い出される。そのつぎも、またそのつぎも、追

い出される。

母のなかは、

「こまったのう。なんとか家へひきとり、わたしの手でそだてたいのだけれど……」

なげくと、小ざるは、

「かあさんは、二度めの嫁入りをしたのだし、それに、こんどのおとうさんとおれとは、気があわない。心配しないでもいいよ。ねえ、かあさん。おれはな、この中村をとびだし、どこかのえらい大名の家来になって、きっと出世をしてみせる」

「どこへゆくつもりなのだえ？」

「わからないが、とにかく三河のほうへいってみようと思う」

死んだ父の弥右衛門が、

「わしは、こんなけがをして、からだがきかなくなってしもうたが、いまはいくさの世の中じゃ。いくさに出て、手がらをたてれば、いくらでも出世ができる」

と、いっていたことを、小ざるは忘れなかったらしい。

小ざるが、ふるさとをとび出したのは、十五歳のときだといわれている。

小ざるは、なき父のかたみにもらった銭で、まず針を買いこみ、その針を売ったり、食べものにかえたりして、旅をつづけたそうだ。

小ざるについての話は、いろいろつたえられているが、ほんとうのところ、若いころの秀吉が、どこでなにをしていたか、はっきりしたことはわかっていない。

十六歳ごろから三年ほど、遠江の国（静岡県）で、松下加兵衛という大将の家来になっていたこともある。

とにかく、子どものころから秀吉は、さまざまな苦労をし、その苦労にまけず、いつも、あかるい気持ちで頭をはたらかせて、よくはたらき、世の中のいろいろなしくみをおぼえたのである。

秀吉のあいきょうのあるおもしろい顔つきや、気転が人なみ以上にすぐれていたことも、こうした世わたりのうちに、ますますみがきがかけられていった。

こうして、松下家をでたさるの秀吉が、織田信長につかえたのは、十九歳か二十歳ごろであったのだろう。

信長につかえてからの秀吉は、とんとんびょうしに出世をしていった。それは、もちろん秀吉のはたらきがすぐれていたからだ。

はじめ、信長のぞうりとりになった秀吉が、ある寒い朝、まだ暗いうちから、主人のぞうりを、ふところにいれてあたためていて、

「おはようございます」

やがて、外へ出かける信長の前へ、ぞうりを出した。

「おや……？」

信長は、つめたいと思っていたぞうりのあたたかさを足に感じて、

「おまえがふところであたためていたのか。心のきいたやつじゃ」

いっぺんに、秀吉が気に入ってしまったという話は有名である。この話がうそかほんとうかは別に

して、一事が万事、秀吉のはたらきぶりは、このようなものだったにちがいない。

あの気短で、するどい神経をもち、らんぼう者として有名だった若いころの織田信長に気に入られたことだけでも、秀吉はなみなみの男ではなかった。

「さるは、いつも人のいやがることをひきうけてはたらく。これには、まことに感心をさせられる」

と、いつも信長はいっていた。

気むずかしい信長が、かんしゃくをおこしているときなぞ、

「うっかり、殿さまのおそばに近づいて口をきいたりすると、お怒りにふれて、手討ちにもなりかねないぞ」

と、家来たちはおそれていたが、しかし秀吉は平気で、のこのこ信長の前へでてゆき、

「殿さま。けさはよいお天気でございますな。お日さまがにこにこしております」

などと、笑いかける。

すると信長のきげんもふしぎによくなり、秀吉のおもしろい世間話などにひきこまれ、しまいにはゆかいそうな笑い声をたてはじめる。

まず、こういったわけで……。

ぞうりとりの木下藤吉郎が羽柴筑前守秀吉という大名にまで出世をしたわけである。

そして、主人の信長の急死。

信長のかたきを討った山崎の戦争。

世の中のだれの目にも、

「秀吉どのは、天下をとるつもりじゃ」
と、わかるほどの大きさを、むかしの針売りの小ざるは、身につけていたのであった。
このとき、羽柴秀吉は四十六歳になっていた。

清洲の会議

山崎の決戦に明智光秀がほろびてから、およそ半月ほどのちの六月二十七日——。
尾張、清洲の城で、会議がひらかれた。
この会議は、
「信長公がなくなったあとの織田家を、だれがつぐべきであろうか」
それをきめるためのものであった。
本能寺の変では、信長と、長男の信忠とが死んでしまった。
あとに残った信長の子は……。
次男の信雄——。
三男の信孝——。
このふたりである。
ふたりのどちらかが織田家をつぐか、または、死んだ信忠の子の三法師が、祖父の信長のあとをつぐか、この三つの方法にしぼられた。

あつまったものは、なき織田信長の重臣たちである。
まず、羽柴秀吉。
つぎに、柴田勝家——越前（福井県）北ノ庄城主。
池田恒興——摂津（兵庫県）尼崎城主。
丹羽長秀——近江（滋賀県）佐和山城主。
などのほかに、織田のおもだった家臣たちが、みなあつまってきた。
「つぎの主人となられるのは、信孝さまであろうな」
「なぜだ？」
「信雄さまは、山崎の戦いにかけつけることができなかったのに、信孝さまは丹羽長秀どのとともに、戦場へかけつけ、御父君のかたきをとられたわけじゃ。それだけに、のぞみはある」
「なるほど……」
家来たちの評判は、さまざまなものであったが、
「わしは、どこまでも三法師君を織田家のあとつぎにするつもりだ」
と、羽柴秀吉は心にきめていた。
この会議は、なかなかにむずかしかったといえる。
たとえば、柴田勝家などは、
「この機会に、秀吉は三法師君をかつぎあげ、じぶんが天下をとろうと考えているにちがいない。そうなっては、何ごとも、あの小ざかしい羽柴秀吉の思うままになってしまう。これは、おもしろくな

いことである」

しきりに考えているところへ、織田信孝が、

「勝家どの。わしは、なんとしても父のあとをつぎたい。兄上（信雄）とちがって、わしはなき父上の弔い合戦に出陣しておるのだし、勝家どのにたすけていただき、織田家のあるじとなって、天下のためにつくしたいのだ」

ひそかに、申し入れてきた。

勝家もよろこび、

「筑前（秀吉）は、三法師君をあとつぎにと、諸方へはたらきかけておりますが、なんと申しても、まだ三歳の幼児にござる。これでは御家をついだとて、なんのお役にもたてますまい」

「いかにも。では、たのむ」

「こころえました」

次男の信雄は、

「兄の信忠がなくなったからには、次男のわしが家をつぐのは、あたりまえのことだ」

と、きめこんでいる。

このように、会議がひらかれるまえから、三人の候補者をめぐり、諸大名たちへ、いろいろなはたらきかけがおこなわれた。

何といっても賛成者が多くなくてはこまるからだ。

それは、ちょうど現代の選挙がおこなわれるときのようなありさまであったと見てよい。

信長の妹、お市は、夫、浅井長政がほろびてのち、清洲の城にくらしていたが、

「ぜひとも、お市どのを妻にむかえたい」

と、かねてからねがっていた柴田勝家の気持ちを知っている織田信孝は、

「おば上。このさい、織田家のために、ぜひとも勝家どのの妻になってくだされ」

しきりに、たのんだ。

そして、お市は……。

まえには、兄、信長のために、こんどは兄の子の信孝のために、二度めの結婚をすることになったのである。

このように、信孝は、柴田勝家を自分の味方にするためほねをおった。

なんといっても勝家は、織田家第一の身分のおもい家臣である。

勝家が信長の家老のような役目をしていたころ、羽柴秀吉は「さる、さる」とよばれ、こまねずみのようになってはたらいていたのだ。

そのさるは、いまや主人のかたきを討ったえらい家来として、たいした人気ものになっている。

勝家としても、よい気持ちではなかったろうし、なんといっても勝家には「天下をとる」つもりはない。どこまでも、主家の織田家のためにはたらこうと考えていた。しかし秀吉は、

「よし。おれが天下をとってくれるぞ」

と、こころをかためていたのであった。

いよいよ、清洲の城中で会議がはじまった。

ここでも、羽柴秀吉の人気は大きい。

秀吉が、いきなり、

「なんといっても、なき上様の御長男である信忠さまの、わすれがたみである三法師さまが、織田家をおつぎになるのが正しいことはいうまでもござるまい。なるほど、三法師さまは、わずかに三歳のお子さまではあるが……」

と、両腕に抱きあげた三法師へ笑いかけながら、

「しかし、このお子さまをおまもりして、柴田どの、丹羽どのをはじめ、およばずながらこの自分も天下のためにはたらけばよろしい。そして、三法師さまをりっぱにおそだて申しあげようではないか」

こういうと、会議の席につらなる家来のほとんどが、

「なるほど――」

「いかにも羽柴どのの申されるとおりじゃ」

「それがよい、それが正しい」

賛成をしてしまった。

信雄もおもしろくない。

信孝も柴田勝家も、いやな顔をした。

けれども、秀吉のいうことは、まちがっていないことなのだし、なんといっても、いち早く明智光秀をほろぼして、天下のみだれをふせいだ秀吉の手がらは大きい。

ついに、秀吉の主張のとおりになった。

こうして、小さな、三法師は、近江の国のうち三十万石をあたえられ、なき祖父や父の家来たちにまもられることになった。

こののち、織田信長のものだった国々を、それぞれの身分におうじて、わけ合うことになった。

その結果は、つぎのようになった。

尾張の国（織田信雄）
美濃の国（織田信孝）
丹波の国（羽柴秀勝）
――この羽柴秀勝は、信長の四男にうまれたのを、秀吉が養子にもらいうけていたのである。
山城の国（羽柴秀吉）

などであった。

このとき、柴田勝家は、

「自分は、近江、長浜をいただきたい」

と、いい出した。

長浜は、いうまでもなく羽柴秀吉の城が、まだある。しかも、ここは、政治のうえからも、戦略のうえからも、たいせつなところであった。

（まさか、秀吉はしょうちするまい。もし、いやだといったら、その場所で、たとえけんかになってもよい。そうなれば、思いきって秀吉をころしてしまおう）

と、柴田勝家は、決心していたともいわれている。

ところが、秀吉は、

「ああ、よろしゅうござるとも。長浜は、あなたにさしあげましょう」

あっさりと、こたえたので、勝家は、ひょうしぬけがしてしまった。

「さしあげるかわりに、長浜の城へは、あなたの御養子の柴田勝豊どのにはいっていただきたい」

気持ちよく、長浜をくれたのだから、勝家も「いやだ」とはいえなかった。

柴田勝豊は、吉田次兵衛というものの子にうまれたのを、勝家が自分の養子にしたのである。

秀吉は、

（長浜などは、いまのところおしくない）

と、思っている。

秀吉は、山城の国を自分のものにしてしまったのだ。山城は、いまの京都府であって、天皇がおられる日本の中心である。長浜とひきかえにしてすこしもおしくはない。

また、

（いずれは、長浜もわしの手にもどるさ）

と、秀吉は平気だった。

清洲の会議がおわると、秀吉は、さっさと京都へひきあげ、こんどは、なき主人、信長のお葬式の

準備にとりかかった。こういうところにも、秀吉のぬけめのない人がらがうかがわれる。

この年の十月十一日から、京都の大徳寺において、織田信長の葬式がおこなわれた。

十七日間にわたる大がかりな葬式である。その、盛大なありさまは、天下の人々の目をおどろかせた。

この費用は、ほとんど羽柴秀吉がだした。

さらに秀吉は、大徳寺の中に、総見院という寺をたて、ここに、信長、信忠の墓をもうけた。

「ぜひとも、上様のお葬式に出ていただきたい」

と、秀吉は勝家にいい送ったが、柴田勝家は、あらわれなかった。

勝家ばかりではない。

秀吉の勢いがさかんになるにつれ、

「かってなことばかりして、けしからん」

「秀吉は、天下をとるつもりだろうが、そうはさせぬ」

と、おこりはじめる大名もでてきた。

こうして……。

羽柴秀吉と柴田勝家の仲は、だんだんにわるくなっていったのである。

このふたりのあらそいが、どのようなかたちになってあらわれるか……。その結果が、天下のうごきを左右するであろう。

ところで、徳川家康はどうしたろうか。

家康は、こうしたあらそいの中へは、はいらず、先に信長とともに征服した甲斐の国や信州の国にいる大名や大将たちのほとんどを、自分の手もとへさそい入れることに力をそそいだ。

関東の北条家とも、手をむすんだ。

秀吉は秀吉で、家康は家康で、自分の思うように、その力をたくわえつつあったのである。

家康は、こう思っていた。

（信長公がなくなったからには、わしはもう、だれの家来でもない。わしは、わしひとりの力をもって、秀吉に立ちむかってゆこう」

あわただしい一年が、暮れていった。

この一五八二年（天正十年）という年は、日本の歴史のながれが大きくかわった年である。

それもこれも、織田信長という大英雄が、突然に死んでしまったからだ。

長浜城攻め

伊勢、長島の城主で、滝川一益という大名がいた。

一益は、織田信長の家来で、本能寺の変がおこったとき、遠い上州（群馬県）厩橋の城におり、北条氏直と戦っていた。

だから、主人のかたきを討つため中央へかけつけてくることができなかったのは、柴田勝家とおなじである。

一益も、羽柴秀吉のことを、

「成りあがりものめ」

と、あまりこころよく思ってはいなかった。

だから、柴田勝家とむすびつき、

「このままでは、秀吉が何をするかしれたものではござらぬ。織田家のことを考えるなら、少しでも早く、秀吉をほろぼしてしまわねばなりますまい」

と、いった。

滝川一益のほかに、越中、富山城主の佐々成政などもおなじこころで、

「来年の雪どけを待ち、ぜひとも秀吉にいくさをしかけ、首をとってしまおう」

そのつもりでいる。

柴田勝家も、しだいに秀吉と戦うつもりになってきた。

しかし滝川一益は、勝家や成政、それに味方へひきこもうとしている前田利家などが、いずれも雪ふかい北国の城にいることを考え、

（雪がとけぬうちは兵をうごかすことができぬから、なんとかして、来年の春までは秀吉と勝家があらそわぬようにしておきたい）

と思いついた。

そして、秀吉へ、

「近ごろは、あなたと勝家どのとの仲がわるいというわさもきこえるが、織田家のためにも、どう

か仲よくしていただきたい」
と、手紙をやった。
すると、羽柴秀吉は、
「じぶんはなんとも思っていない。けれども、清洲の話しあいできめた三法師君を安土の城へ帰していただくやくそくを、勝家どのも信孝どのも守ってくれぬのはどうしたわけであろうか？　焼けおちた安山の城もなんとか三法師君がお住まいになれるよう、修理したのに、なぜ、こちらへ送ってはくださらぬのか」
と、返事をした。
織田信孝や柴田勝家は、あとつぎにきまった三法師を秀吉の手にわたしてしまっては、
「何をするかわからぬ」
と、きめこんでいた。
それに、岐阜城にいる信孝は、勝家のあとおしで、秀吉をほろぼし、いまに自分が織田のあるじとなるつもりだから、三法師を秀吉へわたすわけがない。
それでいて、柴田勝家は、
（なんとか、来年の春がくるまでは、秀吉にゆだんをさせておかなくては……）
と、
「いっさいのうらみをすてて、仲よく三法師君をたすけようではないか。このため、おたがいに誓いの証文を書こうではないか」

などと、羽柴秀吉のもとへつかいを出したりした。
だが、秀吉の目には、信孝や勝家や滝川一益のはらの底が見とおしであったといってよい。
「はい、はい。しょうちをいたしました」
おもてむきは調子を合わせながらも、いざというときに自分の味方をしてくれる大名たちを、しっかりとこちらの羽の下へ入れてしまったのである。
そうしておいて、
（準備はととのった）
自信ができると、急に、
「岐阜の信孝さまや、柴田勝家どのが、ひそかにいくさのしたくをして三法師君を返さぬのは、せっかくみんなでとりきめた織田のあとつぎのことを、うちこわすつもりであります」
織田信雄へ、うったえた。
なき信長の次男である信雄は、三男の信孝と、ひごろから仲がわるい。このふたりは、父がおなじでも、母はちがっていたのだ。
だから信雄は、
「信孝は、けしからぬやつじゃ」
と、秀吉の味方をした。すると秀吉は、
「いま、北国は雪にうもれていて、柴田軍はこちらへ出てまいれません。いまのうちにこちらから押し出して、いくさのそなえをしておきたいと思います」

「よろしい。やりなさい」
信雄が、しょうちをした。
そこで秀吉は、例によってすばらしい早さで軍をひきい、近江の国へはいると、もと自分の城だった長浜を「あっ」という間に取りかこんでしまった。
長浜の城を柴田勝家の養子勝豊にゆずったことは、まえにのべておいた。
「わしのいうとおりにしなさい。わるいようにはせぬから……」
と、秀吉はつかいのものをやって、たくみに勝豊を説きふせにかかった。
勝豊は、もと柴田の家来だったのをみこまれて、勝家の養子になった人だ。
そののち、勝家は、自分のおいにあたる佐久間勝敏を養子にしたし、そのため勝敏の兄、盛政の勢いがさかんになり、
(どうも、おもしろくない)
と、勝豊は思っていたのである。
そうした柴田勝豊の不満を、秀吉はよく知っていた。だから、長浜の城を勝豊へゆずっておいたのである。
「わしに味方してくれるなら、長浜は、このままあなたにさしあげよう。どうかな」
やさしく秀吉にいわれると、勝豊は、
(ここで城をまもったところで、養父の勝家が雪の中をたすけにきてくれるわけでもないし、それかといって、あのような養父のために、戦死するのも、ばからしい)

とうとう、秀吉に降参してしまった。
秀吉は、やくそくどおり、長浜の城を勝豊にまもらせた。
これが、信長の葬式がすんで二か月のちの、十二月十五日ごろであった。
信長が死んでから、わずかに六か月。天下のうごきは、めまぐるしいばかりである。
「なに、勝豊が秀吉に降参したと……?」
知らせをきいておどろいたのは、柴田勝家であった。
まさか、このように早く秀吉が出てこようとは思わなかった。秀吉をだましたつもりが、みごとに裏をかかれてしまったわけである。
「おのれ、秀吉め!」
勝家は、北ノ庄(福井市)の城でじりじりしながら、雪のとけるのを待つよりしかたがなかった。

賤ケ岳の戦い

羽柴秀吉と柴田勝家が、近江の賤ケ岳一帯の山地で決戦をしたのは、翌年の四月である。
「早く……、早く雪がとけぬものか」
と、勝家は、
「なんとか、街道の雪をかきのぞき、兵をすすめよ」
二月も末ごろになると、たまりかねて、こう命じた。

そのころの二月は、現代の三月にあたる。
勝家がいる北ノ庄の城から秀吉にうばわれた長浜までは、およそ百キロメートル（二十五里）ほどの道のりである。
いまなら急行列車で一時間四十分。あたたかい列車のシートにすわって、サンドイッチなどを食べているうちに着いてしまうが、このあたりの雪のふかさは、有名なものだ。
人夫をくりだし、勝家がけんめいに雪かきをさせているうちに……。
「いまのうちに、こちらのそなえをかためておかねばならぬ」
と、秀吉もいそがしかった。
秀吉は、織田信孝を降参させ、ついに三法師を安土へうつすことができた。
「よし。こんどは滝川一益を降参させてしまおう」
正月やすみに、いったん姫路の城へかえっていた秀吉は、やがて京都から安土へもどってきて、
「伊勢を攻めよ」
七万あまりの大軍をひきいて、伊勢へむかった。
伊勢の国には、滝川一益がいる。秀吉は、たちまちに、桑名、亀山などの城を攻めおとしてしまった。
しかし、滝川一益は、
「もうすぐに、柴田どのが大軍をひきいて、たすけにきてくれる。みなのもの、がんばれ！」
必死に戦う。

そのうちに、雪をかきかき、柴田軍が南へくだってきた。
柴田軍の先ぼう部隊八千五百は、長浜の北方二十八キロメートル（七里）ほどの柳ケ瀬のあたりへせまっていた。
「これはいかん」
秀吉はそれと知って、織田信雄と蒲生氏郷に、
「伊勢のほうは、あなたがたにおたのみいたす」
といい、自分は軍をひきい、いそぎ長浜へやってきた。
三月にはいると、柴田勝家の本軍も、北ノ庄を出発し、ぞくぞくと南へくだってきはじめた。
秀吉軍も、長浜を出て北へすすむ。
こうして両軍は、琵琶湖の北岸にそった賤ケ岳を中心に、にらみあうかたちとなった。
賤ケ岳は、標高四百二十三メートル。このあたりの山つづきの峰の中では、もっとも高いといわれる。
柴田軍は、越中（富山県）七尾の城主、前田利家の部隊をふくめて、二万ほどであった。
羽柴軍も、おなじほどの兵力だが、秀吉はこのほかに、自分が自由にうごかせる軍隊を一万以上も用意していたらしい。
両軍の、にらみあいが十日、二十日とつづいた。
「これでは、いくさのしようもないな」
羽柴秀吉は、にがわらいをうかべ、

「よし。このひまに、ちょいと岐阜の城を攻めおとしてこようか」
と、いった。
岐阜城には、あの織田信孝がいる。
信孝は、いったん秀吉に降参したが、
「柴田勝家が出陣してくれたからには、もう秀吉なぞに、あたまをさげておられぬ」
というので、まだ勇ましく戦いつづけている滝川一益と力をあわせ、伊勢や美濃にのこっている秀吉軍に立ちむかってきはじめた。
「このさい、信孝どのをかたづけてしまわぬと、うるさくてしかたがない」
そう思った秀吉は、柴田軍とのにらみあいの中をぬけだし、二万にちかい兵力をしたがえ、四月十七日に長浜をでて、岐阜に近い大垣城へはいり、
「いっきょに岐阜城を攻めおとせ」
と、総攻撃の準備にとりかかった。
いっぽう柴田軍では……。
「なに、秀吉めが岐阜へむかったとな」
柴田勝家のおいにあたる佐久間盛政は、このことをきくと、
「よし！　いまのうちに、敵の陣地を一つでも二つでもうばいとってくれよう」
腰をあげた。
これが十九日である。

おなじ十九日に、大垣城の羽柴秀吉は、
「きょうこそ、岐阜城を攻めおとしてくれる」
準備にかかったが、大雨となって川があふれ、兵をうごかすことができなくなったので、
「やれやれ、しかたがない。兵士たちをゆるりとやすませてやれ」
などといっていたのである。
夜がふけて、やがて、二十日の午前一時すぎとなった。
大垣の秀吉は、すやすやとねむっていた。
賤ケ岳では、
「それ、打ち出よ！」
佐久間盛政は、八千人の攻撃隊をひきい、山をこえ、谷をぬけ、余呉湖にそってすすんだ。
秀吉軍の陣地、大岩山をまもっていたのは、中川清秀である。
清秀は摂津、茨木の城主で、山崎の戦いのときも羽柴秀吉にしたがい、てがらをたてている。
「それ！　中川清秀の首を討て」
と、夜明けとともに、柴田軍が、いっせいに攻めのぼってきた。
このとき、賤ケ岳をまもっていたのは桑山重晴という大将であったが、
「中川どの。大岩山では敵の大軍をささえきれますまい。兵をまとめ、わしが陣地へおいでなされ。いっしょに戦いましょう」
すぐに、つかいのものをやって退却をすすめたが、

「いや。それがしは死ぬかくごで、大岩山をまもります」
と、中川清秀はきかなかった。
清秀は、千人ほどの兵を指揮し、
「ひくな、ひくな！」
みずから、やりをふるって戦った。
下から攻めのぼる柴田軍を、清秀はなんども押しかえしたが、
「中川清秀どの、見参！」
佐久間盛政の家来で近藤無一というものが、木立ちの中からとびだし、するどくやりをつけた。
そして、清秀は、ついに首を討たれたのである。
中川軍は、ほとんど戦死したといわれる。
このありさまを見た岩崎山の高山長房も、
「これはかなわぬ」
と、陣地をひきあげ、田上山にいた羽柴秀長（秀吉の弟）の陣地へ逃げこんだ。
「それ、岩崎山もうばいとれ」
柴田軍は、戦うこともなしに岩崎山を占領する。
この日のひるごろまでに、秀吉軍は二つの陣地を敵にうばわれてしまったのだ。
こうなってしまったので、
「なんとしても、賤ケ岳だけは、敵にわたしてはならぬ」

と、秀吉軍の羽柴秀長や藤堂高虎なども、賤ケ岳をまもる桑山重晴をたすけに、兵をひきいてのりこんできた。
この知らせは、もちろん、大垣にいる秀吉のもとへ知らされた。

秀吉、出陣

大垣城の羽柴秀吉のもとへ、
「大岩山の陣地が、敵にとられました」
「岩崎山も、うばいとられました」
つぎつぎに、馬をとばして使者がかけつけてくる。
すると、秀吉はすこしもおどろかず、
「よし、よし。いくさは勝ったぞ」
にやりと笑って、
「足のはやい兵士を、五十人ほどあつめよ」
と、その五十名をよびよせ、
「おまえたちのうち二十人は、長浜へついたらすぐに、近くの町や村からたいまつをたくさんあつめ、これに火をつけ、村びとたちにもたせて、この大垣から長浜までの道すじにくばっておけ」
そしてまた、

「のこりの三十人は、これも長浜の村々にいいつけ、にぎりめしをたくさんつくり、道すじにおいて、すぐに食べられるようにしておけ。よいか」
と、命令をくだした。
長浜の領内にある村々では、まえに秀吉が殿さまだったころ、よくめんどうをみてやっているので、
「秀吉さまのためなら、なんでもしよう」
と、いうにきまっている。
五十人の兵は、すぐに大垣城をかけだしていった。
「わしがるすの間は、おぬしに大垣をまかせる」
と、秀吉は堀尾吉晴にあとのことをまかせ、
「わしは、ひと足さきに出かけるぞ」
たったひとりで馬へまたがり、城門を出ると、風のように走りだした。
「それ、つづけ」
あわててあとを追ったのは、一柳直末ほか十人ほどの家来だけである。
兵士たちのしたくも間にあわぬほどの早さだった。
こういうところは、むかし織田信長が清洲の城をひとりでとびだし、今川義元と戦うため、桶狭間へかけむかったようすとそっくりではないか。
「それ、殿さまにおくれるな」

と、秀吉の軍が大いそぎでしたくをととのえ、大垣城からつぎつぎに出ていった。
大垣から長浜までは、およそ四十キロメートル（十里）ほどだ。
秀吉は、関ケ原をかけぬけて近江の国へはいり、
「それ、いそげや」
馬にむちをくれ、やすむ間もなく、いっきに長浜へつき、さらに琵琶湖の岸べをかけにかけぬき、木之本へついたのは、夜の九時ごろだったという。
そのころ、秀吉のあとを追って大垣をでた一万五千の兵たちは、
「やあ、どうじゃ。道ばたに村びとがたいまつをもって出ているぞ」
「あかるくて走りよいな」
「見ろ、見ろ。にぎりめしをくばっているぞ」
「これはうれしい」
走りながら、にぎりめしをほうばる。
「うちの殿さまは、いつもこのように、おれたちのことを考えていてくださる」
「これではいやでもいくさに勝たなくてはならんぞ」
兵たちは勇気百倍して走りつづける。
秀吉の兵のつかいかた、うごかしかたは、いつもこのようにたくみであった。
木之本へついた羽柴秀吉は、弟の秀長が陣をかまえている田上山へのぼり、
「弟よ。いまついた」

「これはこれは……」
と、秀長はびっくりした。
この羽柴秀長は、秀吉の母が二度めに結婚をした筑阿弥との間にうまれた子で、秀吉とは父ちがいの弟である。
「こんなに早くおつきになるとは、ゆめにも思いませんでした」
「ぐあいは、どうじゃ？」
「賤ケ岳の兵力をふやしましたが、敵は、きっと夜があけると同時に攻めよせてきましょう。いや、よかった、よかった。あなたさまがこのように早くおもどりになってくれて……」
「よし。近くの村びとたちに銭をあたえて、できるだけたくさんあつめてくれ」
「大垣の兵は、どうなさいました？」
「すぐに、わしのあとからやってくるさ」
たくさんの村びとたちをあつめると、
「みんな、大きな声をはりあげて、ときの声をあげろ。ほうびは、たくさんやるぞ」
秀吉がいった。
村びとたちは、おもしろがって、
「わあっ……うおっ……！」
ときの声をあげる。
くらやみの中できこえるこの声は、まるで何万もの秀吉軍が大垣からかけつけてきたようにおもえ

た。
柴田軍は、
「これはどうじゃ」
「ま、まさか秀吉軍が、こんなに早くもどってくるとは……」
あわてふためいたし、いっぽう、賤ケ岳そのほかの山の陣地にいた秀吉軍は、
「大垣にいた軍隊が、かけつけてきてくれたぞ」
「もう、だいじょうぶだ」
「さあ、くるならこい」
たちまち、元気がわいてくる。
秀吉の命令が、つたえられた。
「いま大軍が、みなをたすけにきた。夜あけとともに、敵に攻めかかれ！」
柴田軍は、夜あけとともに賤ケ岳を攻めとるつもりだったが、
「たいまつのひかりが、道という道につらなっている。秀吉の大軍がもどってきたのだ。これではとても勝ちめはない。ひきあげよ」
と、大将の佐久間盛政は、兵をまとめて退却しはじめた。
これで、もう勝負はついたようなものだ。
夜があけると……。
にぎりめしをたっぷり腹へつめこんだ一万五千の兵がつき、秀吉軍は逃げる敵を追って、

「それ、かかれ！」
「どこまでも、追いかけろ」
すさまじい追撃戦にうつった。
加藤清正や福島正則など、秀吉の若い家来たちが、武勇のはたらきをしめし、
「賤ケ岳の七本やり」
なぞとよばれたのも、このときである。
柴田勝家は、狐塚というところに本陣をかまえていたが、
「敵が押しよせてまいります」
「とても、ふせぎきれません」
兵たちは、ばらばらにみだれたち、どこかへ逃げてしまうものも多い。
さいごには、柴田勝家も五十人ほどの家来にまもられただけで、北ノ庄へ逃げてゆかねばならないことになった。
勝家は、ふるくからの織田の重臣で、勇気もあるりっぱな大将であったが、羽柴秀吉とあらそったために、このようなひどいめにあうことになった。
北ノ庄の城へかえると、勝家は二百の兵とともに、城の天守閣へのぼった。
秀吉は、たちまち、追いついてきて、城をかこんだ。
四月二十四日……。
柴田勝家は、城に火をつけ、妻のお市の方とともに自害をした。

秀吉も、なき主人の妹であるお市のいのちだけは、ぜひ、たすけたかったのだが、どうにもならなかった。
しかし、お市が浅井長政との間にもうけた三人のむすめは、勝家が、
「死なすにはしのびぬ。のがせ」
ひそかに一乗ケ谷というところへ逃がした。
秀吉は、このむすめたちをさがしだし、よくめんどうを見てやったが、このむすめたちのひとりが、のちに淀の方となって、秀吉の子、鶴松と秀頼を生むことになる。
こうして、柴田勝家は、ほろびてしまった。
このたたかいは、織田信長のあとつぎをめぐっての、秀吉と勝家の勝負である。
それだけに、勝った羽柴秀吉の勢いは、
「もはや、天下をとったのもおなじことだ」
と、うわさされるようになった。
秀吉は、勝家の国だった越前を、手におさめた。
織田信孝は、まもなく、兄の信雄によって、
「腹を切れ」
と、せめたてられ、ついに自害をした。
越後の上杉家も、中国の毛利家も、そして、あの徳川家康も、
「このたびのいくさにお勝ちになって、おめでたいことでござる」

と、祝いのことばを送ってきた。

大阪の城

人間と人間とが争いをおこし、戦いあうのは、たがいに相手のほんとうの心が、はっきりとわからないからである。

賤ケ岳の戦争がおわると、

（羽柴秀吉は、こんどは、このわしをじゃまにするのではないだろうか？　このままでいると、わしも、弟の信孝のように、秀吉の手にかかってほろぼされてしまうのではないか……？」

織田信雄が、そう思いはじめた。

信雄は、信長の次男に生まれたので、伊勢の北畠家をついでおり、北畠信雄ともよばれている。

このまえの戦争では、弟の信孝がにくかったので、秀吉の味方をしたわけだが、世間のみょうなうわさをきくと、いてもたってもいられなくなった。

それは、

「羽柴秀吉は、自分が天下をとるためには、信雄どのがじゃまになるので、殺そうとしている」

というもので、もっとひどいのは、

「いやもう、信雄どのは殺されてしまったらしい」

との、うわさがとんでいるというのだ。

このうわさは、わざと秀吉がまきちらしたのだともいわれている。

秀吉は、

「信長さまの子でも、なくなった信忠さまとは大ちがいじゃ。そのときどきで心がかわり、いつもふらふらと他人の力ばかりをたよっている信雄どのには、天下のことなどまかせられるものではない」

と、思っていたことはたしかだ。

だから、秀吉は、まず信雄の家老たちを味方にひきいれることにした。

「どうも、あなた方の御主人の信雄どのは、たよりない。三法師君をまもってゆくためには、信雄どのの家来であるあなた方に、誓いのことばをもらいたいのじゃ。むろん、この秀吉に味方をしてくれれば、かならずわるいようにはしない」

これは、うそではない。

これまでに秀吉は、自分の味方になったものを裏ぎったことはない。

信雄の老臣たちは、だんだんに秀吉のほうへかたむいていった。家来たちから見ても、信雄はたよりなかったのであろう。

年があけて、一五八三年（天正十一年）になると、

「もう、こうしてはおられぬ」

と、織田信雄は、まわりの大名たちを味方につけることを考え、そして徳川家康へも、

「どうも、羽柴秀吉のうごきがあやしくなってまいった。なにとぞ、わたくしの力になっていただきたい」

と、申しこんだ。

そして、自分にそむき、ひそかに秀吉とむすびついた家老三人を、ころしてしまった。

徳川家康も、いまや五か国百三十八万石を自分の国としており、大名としての力は、ひじょうにふくれあがっている。

（わしは秀吉をにくむわけではないが、このさい、信雄どのの味方をしてやることにしよう。たしかに、このままほうっておくと、秀吉はのぼせあがり、わしがいることを忘れかねまい）

と、家康は決心をした。

だが、秀吉は、家康の力をおそれていた。

いろいろな贈りものをしたり、天皇におねがいして、家康を「正四位下・左近衛権中将」という位につけたりしているし、その後も位をあげてやって、しきりに仲よくすることにつとめてきた。

春になると、秀吉は家康に、つぎのようなことばをつたえた。

「自分は信長さまに恩をうけたものであるから、そのお子の信雄どのにたいして、にくむ心などあるわけがないのに、信雄どのは自分をじゃまものあつかいにするようになった。これは、つまらぬやつどものことばを信じこんでしまうからで、信雄どのはこのように、とてもとても国をおさめることのできぬ人である。もしも、あなたが自分の味方をみてくださるのなら、美濃（岐阜県）と尾張（愛知県）の二国をさしあげよう。いかがでござろう？」

これをきいた徳川家康は、

「この家康は、そのあたりにころがっている大名たちとはちがう、と、秀吉どのにつたえよ」

秀吉の使者を追いかえしてしまった。

これで、秀吉と家康との間にたもたれていた友情が、たちきられたのである。

羽柴秀吉は、このころ、姫路から大阪へうつり、安土城よりも雄大でりっぱな城をきずきつつあった。

秀吉の力の下にある国々は、二十あまりにおよび、兵力は十六万から十八万の大軍を、いつでも出せるほどであった。

「よし、家康がその気なら、ひとつこらしめてやろう」

秀吉も、立ちあがった。

秀吉の軍と、家康、信雄の軍が戦いはじめ、両軍が尾張の小牧山のあたりで陣をかまえたのは、三月の末である。

「わしは、なき信長どののお子をたすけて戦うのだ」

と、徳川家康は胸をはっている。

いくさをするための名目としては、家康のほうがりっぱであった。

小牧山は、むかし織田信長の城があったところである。

ここへ本陣をかまえた家康にたいして、秀吉は、十二キロ（三里）ほど北へはなれた犬山の城へ、本陣をおいた。

両軍のにらみ合いは、春から秋にかけて、つづきにつづいた。両方とも相手の力のすぐれていることを知っているから、うかつに手をださぬ。

しかし、この間に、秀吉の軍の一部がひそかに三河へはいり、
「家康の本国を荒らしまわってやろう。そうすれば、家康もあわててひきあげてゆくだろう」
こう考えて、小牧山のうしろへまわり、そっと三河の国へはいった。
それを知った家康は、あとを追いかけ、長久手のあたりで、さんざんに秀吉軍を打ちやぶったのである。
もちろん、それは秀吉軍の何分の一かにすぎなかったが、
「家康は、つよいのう」
秀吉は、にがわらいをうかべるより、しかたがなかった。
これより先に、小牧でも一度、秀吉軍は負けている。
長久手の戦いでは、秀吉軍の池田恒興や森長可など、人に知られた大将が討ち死にをしたし、秀吉軍の戦死者は徳川軍の四倍から五倍の数にのぼった。
(家康め、なんとかおびきだして……)
と、秀吉はくやしがったが、それからも家康はさそいにのってこない。
それでいて、にらみあっていても、
「秀吉なぞ、少しもこわくないぞ」
というようすが、徳川軍にみちあふれている。
長久手で勝った徳川軍は、
「秀吉軍なぞ、強くないわい」

すっかり自信をつけてしまった。
そのほかにも、小さい戦いはいろいろとあったが、
「もう、こんなことをしていてもはじまらぬわい」
秀吉は、たくみに織田信雄へ、
「仲なおりをしましょう」
と、もちかけた。
秀吉が礼儀をつくしてきたので、信雄はわるい気もせず、いくさをやめることにした。
信雄にたのまれた徳川家康だが、かんじんの信雄が敵と仲なおりをしてしまったのでは、しかたがない。ついに、家康も仲なおりをし、軍をひいて岡崎へかえった。
このとき、仲なおりのしるしとして、秀吉は家康の次男、於義丸を、
「わしの養子にもらいうけたい」
と、いった。
於義丸は、このとき十一歳。のちに結城秀康というえらい大名になったひとだ。
そして秀吉からは、
「わしの妹を、妻にむかえてくだされ」
こういって、父ちがいの妹の朝日姫を、家康にさしむけた。
姫といっても、もう中年の女性である。しかし、家康は前の妻の築山どのが死んでからひとりぐらしだったので、秀吉のことばのままに、朝日姫を妻に迎えた。

このように、肉親を相手におくり、縁をむすぶことによって仲なおりのしるしとするのは、戦国のころのならわしであったのだ。

それでもなお、徳川家康は秀吉にあたまをさげない。

「一度、大阪へおいでなされ」

いくら秀吉がすすめても、やってこない。

こちらから大阪へあいさつにゆくことは、頭をさげることになるからだ。

これには、つくづく秀吉もこまって、

「家康のたすけがなくては、とうてい、わしは天下をとることができぬ。なんとしても家康の心をやわらげねばならん」

ついに、思いきって、

「わしの母を、そちらへ人質におくるから、ぜひぜひ大阪へきてもらいたい」

と、いいだした。

秀吉が、母へ孝行をつくしていることは有名だ。その母思いの秀吉が、母を人質にだすというのである。これには世間もおどろいたし、さすがの徳川家康も、びっくりした。秀吉は思いきったやりかたで、自分のまごころを家康にしめしたのだ。

徳川の家来たちは、主人の家康が、うっかり大阪へなどいったら、秀吉がだまし討ちにするにちがいない、と思っていたものもいる。

家康は、

「あの秀吉どのが、母ごを人質にだすというからには、もはや、うたがいをもつべきではあるまい。これ以上、わしが頭をさげないと、また戦争になる。そうなれば、わしのたいせつな家来たちのいのちも戦場できえることになる。よし、ここのところは、わしが大阪へあいさつにゆこう」

こころをきめた。

やくそくどおりに、秀吉は母の大政所を岡崎の城へ送ってよこした。

そして家康は、本多忠勝、酒井忠次などをしたがえ、大阪へおもむき、秀吉と会見したのである。

「おう、これはこれは、ようこそまいられた。さ、こちらへ、こちらへ……。どうか、ゆるりとおくつろぎあれ」

と、秀吉は下へもおかぬもてなしぶりで、にこにこと家康に笑いかけ、

「これからは、あなたとわたしは兄弟もおなじだ、と思ってくだされ」

手をにぎりしめた。

こういう、人なつっこい秀吉のしかたは、どんな相手もひきこまずにはいない。

秀吉は、また天皇にねがって家康の位をあげ、近江、守山三万石の領地を、

「うけとってくだされ」

と、家康におくりものした。

そればかりでなく、家康の供をしてきた家来たちにまで、さまざまなおくりものをした。

(どうも、秀吉公にはかなわぬ)

徳川家康も、かぶとをぬいだ。

こうして、家康と手をむすんだ秀吉の勢いは、大きくなるばかりだ。

大阪の城は、およそ七年がかりで完成されたものだが、その規模のすばらしさがどんなものか……いまにのこる大阪城のあとを見てもわかるような気がする。

大阪は、瀬戸内海に通じ、いくつもの川によって海から陸への交通が、むかしから発達している土地だ。

貿易港の堺の町も、目と鼻のところにある。

しかも、天皇のおわす京都へも、四十キロ（十里）の近さだ。

この大阪が石山とよばれ、ここに本願寺の本山があって兵をたくわえ、織田信長に手むかい、信長をひどくこまらせたことは、すでにのべておいた。

本願寺が紀州へ去ったのち、この城は信長のものとなり、信長死してのちは、長久手で戦死した池田恒興の城になっていた。

それをもらいうけて秀吉が、

「天下第一の城をつくってみせる」

と、城のつくりなおしにかかったのだ。

いくさのしかたばかりでなく、城をつくるときも、秀吉は、むかしの主人、織田信長のやりかたをよくおぼえている。

鉄の門のすばらしさ。

御殿の、座敷という座敷をかざる絵やびょうぶのみごとさ。

御殿の中には、天井も壁も、ふすまも、みな黄金づくりの茶室である。

天守閣は、七階九重であった。

この天守の中には、鉄砲や火薬のほかに、秀吉があつめた宝物、金銀などが、びっしりとしまいこまれてある。

本丸、二ノ丸、三ノ丸からなる大阪城のまわりは、十二キロ（三里）以上もあった。

城をかこむほりの幅が、広いところで七、八十メートルもあったという。

この大きな城の、大きな御殿の中の、秀吉がねむるへやには、黄金づくりのベッドがおかれていたそうだ。

大阪城をつくることによって、

「わしは、天下をとったのだぞ」

と、秀吉はさけんでいるかのようであった。

羽柴秀吉は、五十歳になった一五八六年（天正十四年）に、関白太政大臣という位につくことを、天皇からゆるされた。

これは、天皇の家来のなかで、もっとも高い位であるし、天皇をたすけて天下の政治をとりおこなうことをゆるされたわけであった。

秀吉は、羽柴の姓をすてて、豊臣とあらため、豊臣秀吉と名のることにした。

ながい、ながい戦乱の世も、いまやおわりをつげようとしていた。

織田信長が、その土台をかためたあとをうけ、豊臣秀吉は「天下を一つにまとめる」という大事業を、いまなしとげようとしている。

日本の国の中に、戦争がなくなってしまい、諸国の大名のほとんどが、秀吉のいうことをきくようになっている。

あとは、九州の島津家とか、関東（小田原）の北条家とか、東北地方の伊達家など、少しのこっている大名たちが、頭をさげないでいるだけで、これらの大名も、すすんで秀吉と戦うつもりはない。

「戦ったところで、とてもかなわぬ」

と、知っているからだ。

戦争がなくなれば、戦争のためにつかっていた力は、ほかのところへまわされることになる。

大名たちも兵士も、国民も、みな戦争にはあきあきしていたから、

「なるべくいくさをしないように……」

と、こころがけはじめる。

いくさがほうぼうでおこなわれていたときは、国民も、おちおち商売をすることもできぬし、旅をすることもあぶないので、じっとちぢこまっていた。

ところが、世の中が平和になると、京都の商人も、

「ひとつ関東へいって、あきないをしてこよう」

と、出ていくし、関東の人々は、

「ひとつ、京の都を見物にゆこう」

などと、思いたつわけなのである。

旅行がさかんになれば、道もひらける。宿屋もできるし、茶店もできる。

世の中がべんりになってくるし、食べものもゆたかになってくる。

そして、信長とおなじように、秀吉も、新しいことが好きであった。

大工、鋳物師、左官、茶わんつくりなど、さまざまな職人を保護してやり、その仕事の発展をたすけた。

画家や彫刻家のような芸術家も、おなじことである。

織田信長は、伊阿弥という畳さしを、

「おまえがつくるタタミは、天下一である」

と、ほめてやり、土地も位もあたえたほどである。

商人たちが、どこの町でもあきないができやすいようにしたのも、秀吉は信長を見ならったのである。このため、諸国の町もはんじょうし、大名たちも秀吉のすることをまねて、自分の国の発展に力をいれるようになった。

こういうわけだから、国民も、

「もう戦争はないぞ」
「安心して、仕事にはげめる」
あかるく、生き生きとはたらきだす。
こうした元気いっぱいの空気が、国じゅうにあふれだしたのは、かつてないことである。
むかしは、貴族や将軍が、国民たちのあたまをおさえつけているばかりだったし、なにしろ戦争のたえまがなかったのだ。
信長と秀吉が生みだした、このように活気がみなぎった時代を、いまでは「安土桃山の時代」とよんでいる。安土には信長がいたし、伏見の桃山には、のちに秀吉が大きな城をきずいて住んだからである。
けれども……。
秀吉は「刀がり」といって、寺や、町や村から、武器をとりあげてしまう命令もだしたし、おもい税も取りたてた。
これは、そうした場所に金銀や武器があっては、ふたたび戦争がおこるもとになると考えたからだ。
秀吉だって、
「せっかく苦心して天下をとったのだから、いつまでも天下さまでいたいものだ」
と、ねがったことであろう。
また、諸国の土地についても、

「よく、ようすをしらべ、どこの国からどれだけの米や作物がとれるかを、きちんとしらべあげよ」
と、命じた。
これを、秀吉の「検地」という。
これも、秀吉の天下を安全にするための政治であった。
そのころ、日本の山からは、金や銀が、ゆたかにほり出されたし、それが信長や秀吉の「はでごのみ」を、いっそうはなやかにいろどったのである。
大阪城の中には、金銀が、つかってもつかっても、つかいきれぬほど、ためこまれていたという。
秀吉は、天皇がおられる京の都の町づくりにも熱心であった。
町をひろげ、道すじをひろげ、皇居を修理し、のちには、京の町をかこむこと二十キロ（五里）にわたる堤をきずいた。
この堤を、御土居とよぶ。
京の都は、天皇のすむところである。
それだけに、むかしから、この都がいくさの中にまきこまれ、焼けおちたことは、かぞえきれなかった。
皇都を戦火からまもるために、御土居をきずいて外から侵入する敵をふせぐ。その目的もあったが、秀吉は、
「わしには、これだけの大工事をおこし、天皇と都をまもる力があるのだ」
それを天下にしめしたかったのである。

この御土居のあとが、いまも京都市に、わぜかながらのこっていて、その工事の大がかりなことをまざまざと知らせてくれる。

御土居ばかりではない。

豊臣秀吉は、京都に大邸宅をつくった。

「わしが、京都へいったときにくらす屋敷じゃ。思いきり、りっぱなものをつくろう」

と、秀吉は夢中になって、この屋敷づくりにうちこんだ。

この屋敷を、聚楽第とよぶ。

「材木のよいのをあつめよ。石垣の石をはこべ」

と、秀吉は大名たちに命じた。

屋敷のひろさは、東西六百メートル、南北七百メートルにおよぶ広大なもので、まわりにほりをうがち、石垣をきずき、まるでひとつの城のようなものであったらしい。

その場所は、いま京都にのこっている二条城の北がわで、大きさは二条城よりもひとまわりほど大きかったというから、個人の屋敷としては、これほどりっぱなものはなかったろう。

鉄の門にかこまれ、金銀をちりばめた夢の御殿である。

中には、山もあり谷もあり、湖のような池には舟がうかび、秀吉は、その舟にのって、庭のあちこちにたてられている建物へ出入りをした。

いま、京都市の西本願寺の中に、この聚楽第の一部だったとつたえられる「飛雲閣」という建物がのこされている。池から舟がつく座敷や茶室、書院など、二階づくりのこの建物からしのぶ聚楽第の

すばらしさは、まるでおとぎ話にあらわれるような美しさだ。

これも、戦争の世をおさめた天下さまだからできたことで、

「いまのわしは、思うままに、どんなことでもできる。むかしの、きたない百姓家で牛や馬といっしょにねむったことを思えば、まったく夢のようじゃ」

と、秀吉は思ったことだろう。

現代では、どこの国の、どんな人でも、個人の力でこのようなぜいたくなまねをすることができないし、ゆるされもしない。

しかし何百年もまえの、こうした英雄や皇帝のぜいたくによって、日本でも外国でも、土木、建築の工事や、芸術の発展が見られたことは、たしかなことであった。

とにかく、秀吉は得意の絶頂にあった。

北野天満宮の森で、身分の上下をとわず、人々をあつめて、茶の湯の会をもよおしたのも、このころだ。

天皇を聚楽第へおむかえして、おもてなしをしたのも、このころである。

「天皇さまが、家来の屋敷へおいでになった」

このことだけでも、世の中の人はびっくりした。

それは、とりもなおさず、豊臣秀吉のいきおいの大きさをしめすものであった。

こんなことをしながらも、秀吉は九州へ攻め入り、薩摩の大名、島津義久を降参させたりしている。

妻のねねとの間には、子がうまれなかった秀吉だが、側室の淀の方との間に、鶴松という男の子が

生まれた。
「こんなうれしいことはない。この子のためにも、日本国のすべてを、わしのものにしなくてはならぬ」
秀吉は、いさみたった。
「あとは関東の北条家を降参させ、東北の大名たちに頭をさげさせるだけじゃ」
一五九〇年（天正十八年）になると、豊臣秀吉は、いよいよ腰をあげた。
北条氏政がいる相模（神奈川県）の小田原城を攻めるためであった。
このとき、秀吉は五十四歳になっている。

いざ関東へ

北条家は、先祖の北条早雲（伊勢新九郎）が小田原の城主となってから、およそ百年もの間、関東の国々をしたがえ、
「北条家は、関東のあるじなり」
というほこりを、もちつづけていた。
それだけに……。
武田も上杉も、織田も徳川も、北条家にたいしては、いろいろ手段をつかい、なるべくは戦争をさけてきたといってよい。

そのころの北条家のあるじは、北条氏政であった。
「豊臣秀吉がなんじゃ。素姓もしれぬ山ざるが天下をとったつもりでいても、この北条家だけは、頭をさげぬぞ」
氏政は、なんども秀吉から、
「ぜひ一度、大阪へきてもらいたい」
と、よびだしをうけても、がんとして応じなかった。
そこで、秀吉の小田原攻めとなったわけだが……。北条氏政について、こんな話がある。
氏政が、父の氏康のあとをつぎ、小田原城主になってからのことだが、ある夜、家来たちもいる宴会の席で、
「ああ……」
とつぜん、いまは隠居の身になった北条氏康が、はしをおいて、ふといため息をもらし、
「北条の家も、わしの代でおわってしまうのか」
と、つぶやいた。
父のすぐそばで食事をしていた氏政が、びっくりして、
「父上。それは、どういうことでございますか？」
「おまえのことじゃ」
「えっ？」
「いま、おまえがめしをたべているのを見ると、おまえは、一ぜんのめしにしるを二度もかけている

ではないか」
「はあ……？」
「はあではない。人は毎日、めしをたべる。ばかものでないかぎり、食事については何千回、何万回ものけいこをしているわけではないか。それなのに、おまえは、一ぜんのめしにかけるしるの分量もまだわからぬのか。一度かけてたらない。だからまた、しるをかける。まことに、おろかなまねをするものじゃ」
「いけませぬか」
「まだわからぬのか、わしの申すことが……。よいか、よくきけ。朝夕におこなうことをはかり知ることができぬようでは、一皮へだてた他人の腹の中にひそんでいる考えを知ることなど、とてもできぬ、人のこころがわからなくては、よい家来もしたがってはくれぬし、まして敵と戦って勝てるはずがない。なればこそ、北条の家も、わしの代でおわると申したのじゃ」
きびしく、わが子をいましめた。
このいましめがきいたか、どうか……。
父の氏康が死んでから、十五年ほどの間に、どうも北条家の勢いはおとろえてゆくばかりである。
「この小田原城は、天下の名城である。どんな敵でも、この、わしの城を攻めおとすことはできまい」
などと、氏政はいばっている。
そのくせ、安土城や大阪城のようなすばらしい城ができたことを、耳できいたとしても、見たことはないのだ。
これでは新しい時代のながれに乗りおくれてしまうことは当然であった。
一五九〇年（天正十八年）二月一日に、豊臣秀吉は、
「小田原攻めにくわわるよう」
と、諸大名へ命令をくだし、三月になると、大軍をひきいて京都を出発し、早くも四月三日には、箱根の山々にある北条がたのとりでや城をうちやぶり、小田原城をとりかこんでしまった。
京都を出発するときの秀吉の行列は、まるでお祭りさわぎであったようだ。
聚楽第からあらわれた豊臣秀吉は、つくりひげを鼻の下へつけ、唐冠のかぶとをかぶり、赤のよろいを着こみ、こがねづくりの太刀をよこたえ、これも赤ぬりの弓を手にもち、金銀をちりばめたかざりをつけた馬にまたがっている。
おともの家来たちも、みな美しくかざりたて、何千本の旗や吹き流しをつらねてすすむ。
「ひゃあ、なんと美しい」
「さすがは天下さまだのう」
町の人びとは、ひしめき合って、出陣の行列を見物する。
御所の前へさしかかると、天皇もあらわれ、高台にのぼられて、見送られた。
「では、いってまいります」
馬からおり、天皇にあいさつをする秀吉は、まさに得意満面というところであったろう。
大名が戦争にいくのを、天皇が見送られる、などということは、あとにも先にもなかったことであ

る。

京の加茂川にかかる三条大橋を、秀吉が、

「大軍が通るのじゃから、石づくりにせよ」

と、命令をしたのも、このときだ。

（他人のやったことがないことをしてみせる）

というのは、むかしの主人だった織田信長ゆずりで、それはけっこうなのだが、このように秀吉がいばりはじめると、

「あまりにも、人としてのこころをわきまえぬやりかたじゃ」

「やはり、成りあがりものだな」

かげでは、ひそひそ話をするものもでてきたようだ。

こんなぐあいだから、小田原城をかこんでも、

「いそぐな、いそぐな。むだな血をながすことはない。むこうが降参するのを、まてばよいのじゃ」

小田原城にたてこもる北条軍は五万ほどで、これをかこむ豊臣軍は、およそ十五万ちかくにふくれあがった。

小田原の海にも軍船をうかべ、陣地という陣地には、

「食べものをたくさんくばれ、酒もわたせ」

と、秀吉が命じたので、兵士たちも、ゆっくりと腰をおちつけて、

「敵が出てくれれば、討ちとってしまえばよいのだ」

もう勝ったものときめこんでいる。

秀吉は、石垣山に本陣をかまえ、小田原城を見おろしている。

この本陣が、またたいへんなものなのだ。

石垣をきずき、りっぱな屋敷まであるひとつの城といってよい。

この本陣から、秀吉が京都にいる妻のねねへあてた手紙がのこっている。次のようなものだ。

そなたからの陣中見まいのお手紙をよみ、まるで目の前にそなたがいるような気持ちがして、何度も何度もよみかえした。いま、わしがいる本陣の城には、石の蔵もできたし、台所もでき、広間もつくり、やがて天守閣もたてるつもりじゃ。

どちらにしてもことしのうちには、敵も降参するであろう。こちらは敵の城のほりぎわまで押しよせているので、北条がたもこまりきって、青息吐息のありさまじゃ。

こうなったら、敵が飢え死にするまで、かこみをとかぬという意気ごみを見せたものだから、敵も、たいへんにあわてている。秀吉のいきおいにおどろき、東北の大名たちも、小田原へやってきて、この秀吉のごきげんうかがいをするありさまだ。

北条家に味方をする関東のほうぼうの城も、ほとんど攻めおとしたし、安心してもらいたい。

母上さまも鶴松も、そなたも、みんな元気でいるとのことで、わしもうれしくてならぬ。早くかえって、そなたとゆっくり語りあいたいものだ。いまからたのしみにしていなさい。

まんどころどの　　てんか（天下）

秀吉は自分のことを「天下さま」と書いている。妻にたいしても、このように得意になっているさまは、むしろ、ほほえましい気持ちもするが、とにかく秀吉は、この小田原攻めのころが、もっとも得意で、やることなすことが、たのしくてしかたがなかったのであろう。

「敵は負けるにきまっている」

という戦争なのであった。

それにしても、この手紙には、五十をこえた秀吉の妻にたいするやさしいこころが、にじみ出ているではないか。

むかしむかし、信長の馬のくつわをとり、やりをかついでかけまわっていたころに夫婦となったねねへの思いやりが、純真にあらわれており、秀吉のこうした性格が、多くの人のこころをひきつけずにはおかなかったのであろう。

それがまた、秀吉が天下をとり、天下をおさめることができた原因のひとつとなっているにちがいない。

天下統一

夏にはいると、北条がたの敗北は決定的なものとなった。

前田利家（加賀、金沢城主）や、上杉景勝（越後、春日山城主）などの豊臣軍のはたらきによって、

北条がたの上州（群馬県）の松井田、箕輪、厩橋などのほか、武州（東京、埼玉県）の八王子や鉢形の城も攻めおとされた。

こうなると、外から小田原城をたすけるものはなくなり、

「もういかぬ」

北条氏政も、頭をかかえてしまった。

この氏政より、子の氏直のほうが、まだしっかりしたところがある。

氏直は、秀吉からの、

「もう、降参してはどうか？」

というすすめにしたがい、豊臣軍の黒田孝高の陣地へあらわれ、

「わたくしが腹を切って、秀吉公におわびをするから、父や家来たちのいのちはたすけていただきたい」

と、申しでた。

これをきいた秀吉は、

「父の氏政には似ぬいさぎよい男じゃ。よし、よし」

かえって氏直のいのちをたすけ、高野山へ謹慎させたが、氏政や家老たちの四人に、

「責任をとれ」

と、切腹を命じたのである。

北条氏直は、徳川家康の娘を妻にしていたし、

（まず、よかった）

と、家康も安心したことであろう。

のちに氏直は罪をゆるされ、一万石をあたえられて秀吉につかえた。

「関東も、こちらのものになった。さて、徳川どの。あなたは、ほろびた北条家のかわりに、関東をおさめてくれぬか、どうじゃな」

秀吉が、家康にこういった。

「しょうちいたしました」

家康は、こころよくひきうけた。

家康には、秀吉の腹のうちにひそむ考えがよくわかっていた。それは、

「家康の領国（尾張、三河など五か国）をとりあげ、そのかわりに関東八州をあたえることにしよう。そうすれば、家康は京都や大阪からも遠ざかることだし、新しい国づくりをするためには、たいへんな金もいる。したがって、家康の功は弱まるであろう」

という考えである。

信長がそうであったように、秀吉もまた徳川家康の強い軍隊と、一致団結をした徳川家の主人と家来の力をおそれていたのだ。

それを知りながら、家康は気持よく、関東へうつることをしょうちしたのであった。

これは、秀吉に負けたのではない。

（いまのところは、おとなしくして、自分の力をたくわえておくことだ）

と、家康は思っていた。

秀吉にそむき、もしも戦争をはじめたなら、

（それは、関東へうつるよりもひどい損害をうけることになる。第一に、家来たちがたくさん死んでしまうではないか）

家康は、どこまでも冷静に考えていたのだ。

さて……。

豊臣秀吉は、小田原城が落ちたのち、関東を通って会津（福島県）までゆき、奥羽地方をも手におさめた。

九月一日、秀吉は京都へがいせんをした。

これで、日本全国が、ついに秀吉のもとにしたがうことになった。

名実ともに、天下が統一されたのである。

そのころから、秀吉は、

（もう日本は自分のものになった。このうえは、外国も、わしのいうことをきくようにしたいものじゃ）

と、思うようになった。

心のみだれ

豊臣秀吉が天下統一をなしとげたのは、五十四歳のときである。

織田信長が死んでから、八年の間に、秀吉は、めまぐるしいばかりに活躍をつづけ、ついに、天皇は別として日本一の位と権力を、にぎることができたわけであった。

だが、こうして「天下人」になった瞬間から、秀吉の人生は、わるいことばかりつづくようになる。

「日本をわがものとしたら、つぎは、外国にも頭をさげさせてくれよう」

というのが、秀吉ののぞみである。

このように、外国へたいしてこころをむけるところも、秀吉は信長に似ている。

それで……。

「日本にいちばん近い外国、それは朝鮮じゃ。まず、それを降参させなくてはならぬ」

小田原戦争がおわってまもなく、

「秀吉公には、日本国内を統一されたとのこと、まことにおめでたいことです」

と、朝鮮国王からの手紙をたずさえた使者が、朝鮮からやってきた。

秀吉は、この使者を聚楽第へよび、上きげんであった。

「朝鮮の王が、わしにおせじをつかい、ごきげんうかがいにきた。わしの大きな力は、すでに朝鮮ま

で知れわたっている。朝鮮は、わしに降参したのもおなじことじゃな」

そう、思いこんでしまった。

これは、秀吉の慢心である。

あまりにも、とんとんびょうしに天下をとってしまったので、五十をこえた秀吉にも、

「わしの力のまえには、かなわぬものはない」

と、思いこみ、おごりたかぶるこころが出たとみえる。

人間というものは、若いころに、おごりたかぶるこころや、わるい性質があって、そのために失敗をしても、

(ああ、自分がまちがっていた)

と、反省し、わるいところをあらためてゆくことができる。

しかし、年をとってからだと、もう、こころをあらためるだけのよゆうが、こころにもからだにもなくなってしまう。つまり、死ぬときが目の前にせまってきているので、

(おれは、死ぬまでにこうしたい、ああしたい)

というこころだけが、先にたってしまうからであろう。

だから、人というものは年をとってゆくにしたがい、若いころより自分のこころのうごきに気をつけなくてはならぬ。

秀吉のようにえらくなると、

「それはいけません。それはまちがいです」

と、注意してくれる人もいなくなるものだ。

秀吉は、朝鮮国王に、こういってやった。

「自分は、日本をおさめ、唐を降参させ、天竺までもきりしたがえるつもりだ。朝鮮は、日本にしたがい、自分のいうことをきいて、東洋諸国を征伐するわが軍の道案内をせよ」

この秀吉の手紙を見た朝鮮国王は、

「とんでもないことだ。そんなばかなことができるものか。こうなっては、こちらもいくさのしたくをととのえておかぬと、秀吉が攻めてくるにちがいない」

大いそぎで、戦争の準備にとりかかった。

秀吉は秀吉で、朝鮮が、

「はい、かしこまりました。よろこんで日本にしたがいます」

と、返事をよこすのを待っている。

そのうちに、秀吉の弟、豊臣秀長が病気で死んでしまった。

秀長は、秀吉の父ちがいの弟であるが、若いころから兄秀吉につかえ、いくさもじょうずなら、人がらもよくできた人物で、

「わが子の鶴松は、まだ小さいし、もしも万一、わしが死んだときは、おまえが後見となって、豊臣家がいつまでもさかえるようにしてくれ」

と、秀吉も、この弟がいることを力強く思っていたのだ。

その秀長が死んでしまった。

秀吉も、がっかりしているところへ、こんどは、たったひとりの男の子、鶴松までも病気にかかって死んでしまったのである。

鶴松は、まだ三歳の幼児であった。

「なぜ死んでしもうたのじゃ。わしを、このようなかなしいめにあわせようとは……」

秀吉はなげきかなしみ、およそ七日ほども、食べものを口に入れなかったという。

妻のねねとの間には子が生まれず、やっと側室の淀の方との間に生まれた鶴松——。それも五十をこえてからもうけた男の子だけに、秀吉のなげきは非常なものだったといえる。

(もう、わしには子も生まれないだろう)

と、秀吉もあきらめたらしい。

そこで、関白の位は豊臣秀次にゆずることにした。

秀次は、秀吉の親類の子に生まれたが、

「わしの養子になれ」

と、秀吉が自分の子にもらいうけたのである。

鶴松をうしなったいま、豊臣家のあとをつがせるものは、この秀次のほかにはいなかった。

秀吉は、

「そのつもりで、おまえもこころをきめ、どうかりっぱな人物になってくれるように」

秀次へいいきかせ、京都の聚楽第へ住まわせることにし、

「わしは、伏見へ新しい城をきずき、そこへうつろう」

と、いいだした。
一年のうちに、弟とわが子に死なれてしまった秀吉のこころは、みだれにみだれた。
新しい城をつくることによって、さびしいこころをまぎらせようとしたのかもしれない。
茶人の千利休に切腹を命じたのも、このころである。

朝鮮戦争

千利休は、堺の町の商人であったが、武野紹鷗のでしとなって、茶の湯をまなび、ついに、茶道の名人とうたわれるようになった。
茶の湯は、客をまねき、まっ茶をたててもてなしながら、主人と客との間にかわされる、心と心のふれあいがたいせつなものとされている。
しずかなへや（茶室とよばれる）には、主人によって、さまざまなおもむきがあり、床の間の花いちりんにも、主人のこころが通っていなくてはならぬ。
へやの中にかざられる絵や書。または、茶の湯につかわれる茶わんや茶がま、炉の中の灰や炭にまで、美しい、ふかい心がこもっていなくてはならぬ。
だから、茶の湯には、絵画や工芸や建築など、人間の生活の中にあるすべての「芸術」がふくまれているといってもよい。
千利休は、茶道によって、ひろい芸術の世界を指導することができた名人である。

豊臣秀吉が、武士として大名として天下をとった人なら、千利休は、茶の湯をもって芸術の天下をとった人といってもよい。
秀吉は、はじめ利休をそんけいし、そのでしとなった。
そのうちに、利休は秀吉のそばにいて、政治のことにまでおもくもちいられるようになったのである。
その利休に、
「腹を切れ」
と、秀吉が命じた。
秀吉と利休の物語は、いままでに何度も小説や映画、舞台にのせられたが、なぜ、秀吉が利休をにくむようになったか、はっきりしたことはわからない。
利休も、
「わしは、日本一の茶人じゃ」
というほこりが強く、秀吉のまえでも、茶の湯のことになると一歩もひかない。
そして、金や銀にいろどられた大がかりな、はでやかな秀吉の趣味を、
「いなかもののすることじゃ」
と、こころの中では、けいべつをしていたのかもしれない。
大名やさむらいたちまで、利休の茶の湯にたいしては、頭があがらなくなり、利休も少し慢心していたこともあったろう。

とにかく、腹を切れといえば、
「これからはこころをあらためます。いのちだけはゆるしてください」
利休もあやまってくるだろう、と、秀吉は思っていたらしい。
ところが、千利休はあやまるどころか、いさぎよく自害をしてしまった。
茶人ではあっても、利休のこころの強さは、りっぱな武士におとらぬものであったといえよう。
利休の死をきいたとき、きっと秀吉は、よい気持ちがしなかったろうと思われる。
さて……。
一五九二年（文禄元年）になると、秀吉は気ちがいのようにいそぎ、あわただしく朝鮮へ出陣するしたくにかかった。
肥前（佐賀県）の名護屋に城をきずき、ここを朝鮮征伐の基地にすることにした。
玄界灘をへだてて、はるかに朝鮮をのぞむ名護屋の小高い山の上に、いまも秀吉がきずいた城のあとがのこっている。
これも堂々たる城のかまえであったことが、のこっている石がきを見てもわかる。
またも、戦争であった。
しかも、こんどは海をわたって外国へいくさをしに出かけるのだ。
「みなも、いくさのしたくにかかれ」
と、秀吉は諸国の大名へ命令をくだした。
どの大名たちも、

「また、いくさをなさるのか」
うんざりしてしまった。
徳川家康は、
「太閤殿下は、気がくるったのではないか」
と、いったそうである。
こうしたうちに、また秀吉をかなしませることがおきた。
母の大政所が、なくなったのである。
この知らせをきいたとき、秀吉は、九州の名護屋城にいたが、
「わしがもどるまでは、生きていてくだされ」
けんめいに祈りながら、夜を日についでかけもどってきたが、もう間にあわなかった。
かなしみ、なげきつつ、秀吉は母の葬式をすますと、
「さ、こんどは伏見の城をきずくのじゃ」
いっときも、じっとしていられないように、さけんだ。
伏見は、京都から十二キロ（三里）のところにあり、ここの桃山の上に、金と銀の城をきずき、
「いずれ、朝鮮の国王が降参するだろうから、そのときは、朝鮮の使者をこの城へよびつけ、わしの力のすばらしさ、日本の国の勢いの大きさを見せてやるのじゃ」
これが、豊臣秀吉の夢であった。
たちまちに、城づくりがはじまった。

朝鮮へすすむ軍隊は、京都から西南にいる大名たち——つまり中国地方や九州地方の大名によってととのえさせた。

だから秀吉は、

「徳川をはじめ、東北、北国にいる大名たちは、伏見の城づくりに力を入れよ」

と、命じたものである。

外国との戦争をしながら、とほうもない大きな城づくりをするのだから、たいへんなさわぎであった。

さいわいに、朝鮮での日本軍は勝ちに勝ちつづけ、加藤清正、小西行長、松浦鎮信、鍋島勝茂などのひきいる兵は、平壌まですすみ、さらに明国とのさかいに近い会寧を占領した。

秀吉は、大よろこびで、

「わしも朝鮮へわたるぞ。そして明国をも降参させ、天皇を明国の首都、北京へおむかえし、明国にも天皇の御料地をおつくりしよう。さらに、琉球（沖縄）や高山国（台湾）も征伐してくれる」

そればかりか、フイリピンやインドにまで、

「日本にしたがえ」

と、手紙を出したりしている。

「日本は神の国であり、これをおさめている自分は、太陽の申し子であるぞ」

などと、秀吉は外国にたいしていばっている。

徳川家康が、

「殿下は、いよいよ気がくるいだした」

と、顔をしかめた。

顔をしかめたが、

（こんなようすでは、秀吉公の天下も長くはあるまい。もし、そうなったとき、天下はふたたびみだれよう。そのときこそ、このわしが……）

ひそかに、家康はこころをかためていたのではなかろうか。

ところで……。

朝鮮を攻めた日本軍が、すぐ近くまでやってきたというので、

「こうしてはいられぬ」

と、明国も軍をととのえ、朝鮮をたすけはじめた。

朝鮮でも、海軍をひきいる李舜臣という大将が、船をそろえてのりだし、このため日本の水軍はひどい負けかたをした。

陸で勝っても、海で負けてはどうしようもない。

なぜなら、食糧も兵隊も武器も、船で海をわたり、朝鮮へ送りこまねばならぬからだ。

日本軍の力は、しだいにおとろえてきた。

「なんとか、朝鮮とのいくさをやめにしなくてはならぬ」

と、こころある日本の大将たちは、心配しはじめたし、天皇も、

「よいかげんに、いくさをやめなさい」

と、秀吉にいってよこされた。
このさなかに、淀の方が男の子を生みおとしたのである。
「わ、わしの子が……。しかも男の子が、また生まれたか。よし、すぐに顔を見にもどろう」
秀吉は、よろこびのあまり泣きだしたという。
かなしいことがつづくかと思うと、また、こんなよろこびがうまれる。
戦争をしながら、城をつくる。
六十にちかい秀吉が九州と京、大阪の間をいったりきたりするのだから、たいへんなことだ。
列車も航空機もない時代なのである。
馬やこしにのって、老いたからだをいそがしく、あっちへこっちへうごかしている豊臣秀吉の姿には、ひとりですもうをとっているような感じさえするではないか。
淀の方が生んだ子を、
「拾丸と名づけよ」
と、秀吉はいった。
この拾丸が、のちの豊臣秀頼となる。

伏見の城

伏見の城は、約四か年の歳月をかけて完成した。

おもいもかけなかった男の子が生まれ、朝鮮との間も、いちおう休戦のかたちとなり、豊臣秀吉は、まだできあがっていない伏見の城へうつり、
「さあ、しばらくはお拾（秀頼）をかわいがりながら、この城づくりに力を入れよう」
元気がわいてきた。
伏見の城は、大阪、江戸の二城とならび、日本の三大名城といわれている。
その中でも伏見城が、もっとも雄大で美しい城であった。
伏見城は、秀吉が死んだのち、戦火に焼かれたうえに、徳川幕府によって打ちこわされてしまい、伏見桃山の現地には、その遺跡が、ほとんどない。
けれども、そのころ伏見城内にあったいくつかの門や建物が、いまも諸方にうつされており、それを見ることによってわたしたちは、
「なるほど。このようにすばらしい城だったのか」
と、なっとくがゆくのである。
たとえば、京都の西本願寺には、伏見城で、豊臣秀吉が大名たちに対面したという、白書院の対面所がうつされている。
ここは二百畳あまりの大広間で、上段は秀吉のすわるところ、下段は大名たちがいならんだところで、そのけんらんとしたりっぱさ、大きさ、美しさは、見るものの目をみはらさせずにはおかない。
西本願寺の玄関、浪の間、虎の間なども、伏見城にあったものだという。
とにかく、この対面所を見ることによって、信長や秀吉がつくりあげた、安土桃山の時代や文化と

いうものが、いまのわたしたちの目で、とらえることができるのは、まことにたのしいことだ。

わたしたちは何よりも、こうしたすばらしいものを人間の手ひとつでつくりあげた四百年も前の日本人の才能に、おどろかぬわけにはゆかないのである。

そのふすまや格天井にえがかれた、そのころの有名な絵師たちの作品を見るだけでも、一日が暮れてしまうことであろう。

このほか、伏見の町の御香宮神社の表門は、伏見城の大手門を移したものだし、京都の二条城の唐門も、伏見城にあったものといわれている。

ところで……。

伏見桃山の、丘の上にきずかれた城のひろさは、およそ二千メートル（半里）四方にわたり、本丸、二ノ丸、三ノ丸をはじめ、十二か所の区画からなっている。

現在、コンクリートでつくられている伏見城の天守閣は、もとの「御花畑」とよばれた場所にたてられたものだが、そこへのぼって眼下にひろがる伏見の町と城あとの木立ちを見わたすとき、この城のすばらしさがまぶたの底にうかんでくるような思いがする。

城のまわりは、二百数十におよぶ大名たちの屋敷によってかこまれ、宇治川の水を城の下までひきこみ、淀川へかけて大堤防をきずくという大工事である。

この城の工事には、二十五万人もの人たちが全国からあつまり、はたらいたという。

この城も金や銀によってかざられ、天守閣の金のかわらが、むかしの伏見にあった、巨椋池（おぐらのいけ）という湖のように大きな池の水面へうつり、あまりにぴかぴかするので、池にはさかなが住まなくなったなどという話さえ生まれた。

秀吉は、城をつくりながら、吉野山で大がかりな花見をもよおしたり、能のけいこをしたり、二歳になったわが子とあそんだり、まんぞくのようすであった。

しかし、そのよろこびも一年ほどしかつづかなかったのである。

まず、秀吉のおいで関白の位をゆずられた豊臣秀次が事件をおこした。

秀次は、秀吉の姉の子で、のちに秀吉の養子となった。長男の鶴松が死んでから、秀吉は、

「わしには、もう子はできまい」

と、秀次に豊臣の家をつがせるつもりであった。

ところが、思いもかけず、秀頼という子が生まれた。

六十歳近くなった秀吉に、またも子ができようとは、秀吉も秀次も考えていなかったろう。

それだけに……。

「ほんとうの子ができたので、わしはじゃまものにされるのではないか？」

と、秀次は思いはじめた。

また、世間のうわさも、

「まことの子が生まれたからには、太閤さま（秀吉）は、秀次公のようなできのよくない男に、天下をゆずりわたすはずがない」

しだいに、たかまってくる。

たしかに豊臣秀次は、あまりりっぱな人物だったとはいえなかったようだ。まえまえから、おじの

秀吉はなんども、秀次をきびしくいましめている。
秀次は、関白となってからおごりがつよくなり、ぜいたくばかりして、秀吉をこまらせたり、家来たちをつかうのにもやりかたがへたで、政治家としても武将としても、あまり感心できる人ではない。
こういう秀次だから、
「きっと、わしはじゃまにされる。天下をゆずってはもらえないのだ」
ひとりかってに思いこみ、ふてくされてしまった。
そして、やけをおこし、いろいろとらんぼうなまねをするようになった。
つみもない百姓をころしたり、道を歩いている町人をつかまえてきて、
「おまえは、弓の的になれ」
といい、射殺してしまったりする。
こういう主人をもった家来たちの中には、わるいことをするものがかならずでてくる。
「おまえは、秀次のそばにいて、何かとたすけてやるように」
と、秀吉から命をうけ、秀次の家来になっていた木村常陸介などは、京の町の人々から金銀をかすめとり、たまらなくなった町人たちが逃げだすと、
「けしからぬやつめ」
と、こんどは主人の秀次が、その町人たちの家を売りとばし、逃げた町人たちをつかまえて殺し、その死体を山や野へすてたりした。

こうした乱行が、どこまでほんとうだったものかわからないが、とにかく、秀吉もほおってはおけなくなった。
なによりも、いろいろなうわさがとび、天下がさわがしくなるのはこまる。
「いまに秀次公はむほんをおこし、太閤殿下をころすつもりだろう」
などというぶっそうなうわさがながれはじめる。
ついに、
「秀次を高野山へ追いはらえ」
と、秀吉の命令がくだった。さらに、
「腹を切らせよ」
きびしい命令が追いかけてきた。
こうして、豊臣秀次が二十八歳の夏に、切腹をして死んだのである。
秀吉は、
「天下への見せしめじゃ」
と、おい（秀次）の首を、京都の三条河原へさらしものにした。
秀次の家来たちや、妻や側室たち女だけでも二十人あまりが、これも秀吉の命令によってみなごろしになった。
いままで、つくづくと秀次には手をやいてきただけに、いったんおこりだすと秀吉も、ずいぶんはげしいことをする。年をとってきたし、気も短くなり、信長につかえていたころのように、いつも

にこにこしている秀吉ではなくなってきた。
それにしても、血がつづいたおいをころしたのだから、よい気持ちではなかったろう。秀吉は、秀次がくらしていた京都の聚楽第さえも、打ちこわしてしまったのだ。
つづいて、伏見に大地震がおこり、せっかくきずいた天守閣や門などがこわれてしまった。
そうするうちに、朝鮮との間も、うまくゆかなくなってきた。
秀吉が大いばりで「いうことをきけばゆるしてやろう」と、朝鮮や明国へだした条件を、
「ばかなことをいうな」
と、朝鮮よりも、明国がおこってしまい、
「秀吉は日本の天皇になっても、それはかってだが、日本はあくまでも明国の下にいなくてはならん。そうすれば、貿易ぐらいはゆるしてやってもよい」
と、返事をよこした。
これをきいて、秀吉は、
「おのれ明国め。この太閤をよくもばかにしたな。よし、こうなれば、思い知らせてくれる」
またも、戦争のしたくに取りかかったものである。
大名たちの軍船は、ふたたび、海をこえて朝鮮を攻めに出かけることになった。
戦いは、またはじまった。
しかし、こんどは明国が腰をすえて朝鮮をたすけ、軍隊をくりだしてきたので、第一回の朝鮮攻めのようにうまくはゆかない。

豊臣秀吉のからだは、このころから、急におとろえはじめた。

秀吉の死

すでに、豊臣秀吉は六十をこえていた。
ときどき気持ちがわるくなって、食べたものをはき出したり、気がつかぬうちに小水をもらしたりした。
夜も、よくねむれない。
こんなぐあいでは、とても朝鮮へわたり、日本軍を指揮して戦いをすすめるわけにはゆかない。
一五九八年（慶長三年）の春——。
「気ばらしに、醍醐で花見をしよう」
と、秀吉がいいだした。
醍醐は、伏見城から東山連峰のうらがわ（東がわ）を北へ四キロ（一里）ほどいったところで、ここに醍醐寺という寺がある。
この寺は、西暦八百年から九百年ごろにかけてたてられたものだが、たびたびの戦火に焼け、あれはてていたのを、
「まわりのけしきもよいし、この寺をりっぱなものにしてやろう」
と、秀吉が気に入って、十年もの月日をかけて寺をつくりなおした。

寺は、醍醐の山の上と下にわかれ、ことに下醍醐にある三宝院という塔頭（本寺の中にある小さな寺）は、いまも秀吉のつくった建物や庭を、ほとんど、そのままにのこしている。

この三宝院の庭は、秀吉が、

「花見のときのために、わしがつくってみよう」

こういって、木や石や草、花などに、いちいち目をくばり、みずから設計したものだといわれている。

いま見ても、すばらしい庭だ。

いちだん高いところに、なみなみとたたえられた水は、滝となって庭の池へながれおち、この庭をながめる寺の、いくつかの建物をつなぐわたりろうかなどにまで、こまかいくふうがこらされている。

「さあ、花見じゃ、花見じゃ。なにもかも忘れて、あそぼうではないか」

まえまえから、諸国のサクラをあつめ、醍醐にうえさせてあった。

そのサクラの花が、いっせいに咲きそろったとき、秀吉は、いつものように大がかりなやりかたで、花見の宴をもよおした。

いくつもの茶屋が、それぞれに趣向をこらしてたてられ、大名たちも物売りや商人の姿になり、やきもちを売ったり、酒を売ったりしている。

「ゆかいじゃのう、お拾よ」

六十二歳の秀吉は、わが子の秀頼をだき、サクラの花の中にうもれて、こころゆくまであそんだ。

この花見がおわると、いよいよ秀吉の病気がわるくなってきた。

（わしも、もうながくは生きておられまい）

と、さすがの秀吉もかくごをしたようだ。

まだ六歳になったばかりの秀頼が大きくなるまで、とても生きてはいられぬとさとった。

それで……。

徳川家康をはじめ五人の大老をさだめ、石田三成ほか五人の奉行をつくり、これらの人たちの力によって、秀頼と豊臣家が、いつまでもさかえるように考えたのである。

だから、この五大老、五奉行は、年老いて死を目の前にした豊臣秀吉が、もっともたのみに思っている大名たちだといってよい。

その名をしるしておこう。

（五大老）　（五奉行）

徳川家康　浅野長政

前田利家　前田玄以

宇喜多秀家　石田三成

毛利輝元　長束正家

上杉景勝　増田長盛

この中でも、秀吉は、もっとも徳川家康の力をたのみにしていた。
というよりも、おそれていた。
なにしろ家康は、関東六か国の領主で二百五十万石の大きな大名となっており、しかも朝鮮戦争には出ていないので、その力は、はかり知れないものがある。
年をとった秀吉は、もう、なんとかして家康のきげんをとり、わが子の将来をたのむよりしかたがなかった。
この年の秋がくるころ……。
(いよいよ、わしのいのちもきわまった)
秀吉もあきらめた。
そして、徳川家康を伏見城へまねき、
「あなたの孫娘の千姫と、わしの子の秀頼とは夫婦になるやくそくをした。そういうことであるから、あなたも、秀頼をほんとうの孫と思い、よろしくたのみます」
なみだをながし、家康の手をにぎりしめてたのんだ。
「こころえました。ご安心ください」
家康がこたえると、
「たのむ、たのむ。秀頼のことのほかに、わしはもう、なにごとも思いのこすことはないのじゃ」
天下の英雄といわれた豊臣秀吉が、はずかしいとも思わず、徳川家康の手をおしいただくようにして、うったえたのである。

それというのも……。
こうした約束ごとが、かならずしも、守られるものでないことを、秀吉は、よく知っていたからであろう。
天下をとり、敵に勝つためには、約束も人のなさけもふみにじって戦ってきた「武士の世界」を、秀吉はいやになるほど見てきたではないか……。
秀吉だって、主人の織田信長の子供たちにたいして、こころから世話をしてきたわけではないのだ。
いや、むしろ自分が天下をとるために、利用したほどだ。
それだけに……。
(わしが死んだあと、小さい秀頼は、どうなることか……)
おちおち、寝てもいられない。
心配で心配で、夜もねむれず、なみだをながしながら病気がおもくなってゆくのを、たまらない気持ちで感じているのであった。
死ぬときが近づくと、秀吉は、さらに五大家老にあてて遺言状を書いた。
この遺言状は有名なものだから、わかりやすく、次にしるしておこう。

くれぐれも、秀頼のことをたのみます。
五人の人たちよ。たのみます、たのみます。自分は間もなく死にます。名ごりおしいことでござ

る。

秀頼が、大きくなり、りっぱに豊臣家のあるじとなるよう、たのみます。
このほかには、思いのこすことはありません。
八月五日

秀　吉

いへやす（徳川家康）
ちくぜん（前田利家）
てるもと（毛利輝元）
かげかつ（上杉景勝）
ひでいへ（宇喜多秀家）
まいる

こうして「天下さま」の豊臣秀吉は、いざ死ぬときになると、どこにでもいるひとりの老人、わが子のしあわせのみをねがう、涙もろい老人になってしまったのである。
この世のわかれによんだ秀吉の和歌は、

「つゆとおち、つゆときえにしわが身かな
難波（なに）のことも、ゆめの又ゆめ」

と、いうものだ。

この年（慶長三年）の八月十八日。
豊臣秀吉は、六十三歳で死んだ。
秀吉の死によって、いよいよ徳川家康が天下にのり出してくる。

「もはや、自分をおいて、天下をおさめるものはいない」

と、家康は、はっきりと自信をもつようになった。
家康はまず、

「朝鮮でのいくさをやめ、兵士たちをよびかえすように」

と、このことから手をつけはじめた。

徳川家康

天下のみだれ

豊臣秀吉が死ぬと、

「さあ、つぎに天下をとるのはだれだろう」

「それは、徳川にきまっている」

「いやいや、五人の大老たちが力を合わせて、小さい秀頼さまをおまもりし、天下をおさめてゆくのだそうだ」

「けれども、そんなことがうまくゆくかな」

早くも、世のうわさがたかまりはじめた。

朝鮮にいた日本軍も、この年いっぱいには引きあげてきた。

翌年の二月二十九日。

秀吉の葬式が、京都の方広寺で、おごそかにとりおこなわれた。

この後、天下の政治は、秀吉が死ぬまえに、

「なにごとも、家康と利家の意見によって決定するように……そして、家康は伏見にいて政治のことをつかさどり、利家は、秀頼をまもって大阪へうつり、おもり役をしてもらいたい」

と、いいのこしていたので、七歳になった豊臣秀頼は大阪の城へうつり住むことになった。

五大老といっても、徳川家康と前田利家のふたりが、大名たちをおさえきることができる力をもっていたとみてよい。

前田利家は、若いときの名を犬千代といい、秀吉が木下藤吉郎と名のっていたころ、ふたりはともに織田信長の家来として、仲よくはたらきつづけてきたものだ。

秀吉が、

「お犬どのよ」

といえば、利家は、

「さるどのよ」

と、こたえ、家族ぐるみのしたしい友だちであった。

この友だちにたいして、秀吉はよくめんどうをみたし、利家もまた、秀吉が天下をとるようになってからは、こころをこめてつかえてきたのである。

秀吉が死んだとき、前田利家は六十一歳で、あまり健康もすぐれていなかった。

利家は、越中（富山県）、加賀（石川県）を合わせ、八十三万五千石の領主で、城は金沢にあった。

国の力は、家康の三分の一ほどだが、前田利家の人がらのりっぱさを、大名たちはそんけいしている。

それだけに、徳川家康も、
（早く自分の勢力をのばしておかねばならぬ）
と、思ったのであろう。
家康は、わが子の忠輝（六男）に伊達政宗のむすめを、
「嫁にもらいたい」
と、やくそくし、さらに自分の養女を、福島正則の子の忠勝へ、
「嫁にしてほしい」
と、申しこんだ。
そしてまた、べつの養女を、蜂須賀家へ嫁にやることも、やくそくしてしまった。
伊達家は、奥州（東北地方）で六十一万石の大名だし、福島家は尾張で二十四万石。蜂須賀家は阿波（徳島県）で十八万石と、それぞれに力のある大名たちだ。
こういう大名たちと結婚によって縁をむすび、これを味方につけることを、秀吉は死ぬまえに、
「豊臣家のゆるしをうけぬうちは、けっして、してはいけない」
といい、家康はじめ五大老から、
「かってには、いたしません」
というやくそくの証文をとっている。
それなのに、徳川家康は、まるで、
（かまうものか）

と、なき秀吉とのやくそくを忘れはてたように平気で、どしどし縁をむすんでしまった。
これには大名たちもあきれたし、前田利家も、
「徳川どのを、きびしく問いつめよ」
すぐに使者をつかわしたが、家康は、
「そんなことがあったか。わしも年をとってものわすれをすることがたびたびじゃ。こりゃ、いかぬ。忘れていたわい」
忘れるはずがない。秀吉とやくそくしてから、まだ一年もたっていないのだ。
家康は、こう思っている。
（大名たちの間がいろいろにみだれて、天下のことがあわただしく動きはじめるほうがよい。そうなれば、わしの力をもって天下をとりしずめる。とりしずめれば、わしが天下をとったのもおなじことじゃ。なれど、むりはすまい。なき信長公も秀吉公も、あまりにもむりをしすぎた。そのために、せっかく手につかんだ天下も、自分が死ねばみだれてくる。わしは、そうしたくない。わしが天下をとったなら、わしの子も、わしの孫も、末長く天下をおさめられるようにしなくてはならぬ）
家康も五十八歳になっていたが、けっしてあせったりはしない。
じっと大名たちの動きを見まもっている。
そのうちに、いよいよ前田利家の病気がおもくなった。
利家は、死が近づいたのを知ると、妻の松子に筆をもたせ、あとつぎの子の利長へ、いいのこすことを書きとらせた。

このとき、利家の呼吸が急にせまってきたので、妻が白い経かたびらを着せようとすると、利家は笑って、

「まだ死なぬうちに、そんなものを着せられてはかなわぬ。しかも、妻のおまえにそうされては、ころさびしい」

「申しわけございませぬ」

「松どのよ」

「はい」

「せめて、あと五年。わしが生きておれば、わしの手で大名たちのこころをまとめ、秀頼公を奉じ、みなが力を合わせ、平和な世の中をつくってみせてやるのじゃが……」

くやしそうにそういったが、

「なれど、こうなれば……おれはおれ、せがれたちはせがれたちじゃ。せめて、おまえが生きているうちは世の中が平和であってほしい。いま死のうとするわしが思うことは、ただ一つ、松どの、おまえのことだけじゃ」

しっかりと妻の手をにぎりしめ、

「大仏も焼けた。狂え、あそべ。浮世のことはさだまらぬよ……」

と、うたいだした。

このうたは、まえにいくさが絶えなかったころ、世の中に流行したものである。

前田利家は、

（わしが死ねば、ふたたび天下はみだれるにちがいない）

と、思っていたのであろう。

こうして、前田利家は六十二歳で死んだ。

これは、秀吉なきのちの豊臣家をささえていた大きな柱が、地ひびきをたてて倒れたようなものであった。

こうなれば、

「天下は、いずれ徳川どののものだ」

と、家康の力の大きさ、深さが、あらためて、だれの目にもうつってきた。

（そうなれば、豊臣家はどうなるかわかったものではない。徳川の力を、これ以上ひろげさせてはならぬ）

ほんきになって、そう思ったのは、五奉行のひとり、石田三成である。

三成は、少年のころから秀吉につかえて出世をした大名だ。

むかしの織田家における秀吉のように、豊臣家と三成のつながりは深いものがあったわけだ。

石田三成

石田三成は、近江の国、坂田郡石田村に生まれた。現在の長浜市石田町である。

三成の父、正継については、いまのところ、たしかなことがわかっていないが、人がらもりっぱ

で、学問にもいかく通じていたようだ。
三成は、小さいころの名を左吉といった。
「わしの手もとをはなれ、いろいろと勉強をしたほうがよい」
と、父は考え、左吉を観音寺というお寺へあずけることにした。
この寺は、石田村の三成の家からも近い。
三成が観音寺へ来たころは、ちょうど、織田信長が小谷城の浅井長政を攻めていた。
観音寺のうしろの山には横山城という浅井方の城があり、浅井長政がほろびると、この横山城には、羽柴（豊臣）秀吉がはいった。
横山城から山道を散歩しながらおりていくと、いつのまにか観音寺の境内へはいってしまう。
こういうわけで、秀吉は気がるに、たびたび観音寺へきて、寺の和尚と世間話などをしたものであろう。
そして、秀吉は少年の石田左吉に目をつけた。
「りこうそうな子供じゃ。わしがひきとって、りっぱな武士にそだてあげてみたいな」
と、秀吉は思った。
『武将感状記』というむかしの本に、こんなはなしがのっている。
あるとき、秀吉が狩りにでて、のどがかわいたので、観音寺へはいってゆき、
「だれかおらぬか、茶がほしい」

と、声をかけた。
すると、少年の石田左吉が、大きな茶わんにぬるい茶をたてて持ってきた。のどがかわいている秀吉は、ひといきに、この茶をのみほし、
「ああ、うまいな。もう一服ほしい」
と、いった。
左吉は、まえのときよりも、いくらか熱めに茶をたてて、秀吉にさしだした。
「うまい。もう一服たのむ」
三度めに、左吉がたててきた茶は、小さな茶わんに、もっとも熱くたてられていた。
秀吉がきいた。
「だんだんに茶を熱くしたのは、どういうわけじゃ」
すると左吉は、
「のどがかわいているときは、ひといきに茶をのむものでございますから、あまり熱くしてはならぬと思いました」
と、こたえた。秀吉は、
「子供ながら、まことによく気がつく。これは見こみのある者だ」
と思い、和尚にたのんで自分の家来にした。
とにかく、十四、五歳の石田左吉が秀吉にみとめられたことはたしかであろう。

そして左吉は、もちまえの利発さに努力をくわえ、まだ三十歳にもならぬうちに、従五位、治部少輔という位につき、石田三成と名のるようになった。

豊臣秀吉は、三成のことを、

「わしとおなじように、心のはたらきがみごとなのは、三成だけじゃ」

と、ほめた。

それほどに、三成は秀吉の気持ちを、いわれぬうちにくみとり、秀吉が気にいるようにはたらいたのである。

これは、信長の家来だったときの秀吉とおなじようなものだ。秀吉は、

「信長公におつかえしていたときの、若いころのわしにそっくりじゃ」

と、三成を見ていたことであろう。

そして……。

秀吉が死んだとき、石田三成は近江の国、佐和山の城主で、二十万三千石あまりの国々をおさめていた。

秀吉の遺言により、三成は、五人の奉行とともに、五大老をたすけて、政治をおこなっていた。

石田三成については、いろいろの見かたがなされてきた。

秀吉が生きているうちから、たくらみごとにじょうずで、歴史のうえにはあらわれていない秘密も多いと、いわれている。

それだけに、加藤清正や福島正則、黒田長政などの、これも秀吉にかわいがられていた武将たちからもにくまれていた。

朝鮮戦争のときに、こんなことがあった。

石田三成は、仲のよい小西行長といっしょに、内地と朝鮮の間をなんども海をわたり、いったりきたりしながら、戦地のありさまを秀吉につたえていた。

そしてまた、秀吉の命令を戦地につたえた。

つまり、れんらくのための役目についていたのだ。

だが、戦地にいる加藤清正などは、

「石田三成めは、太閤殿下（秀吉）に、われわれのことを悪くいいふらしている」

はげしくおこったことがある。

これは三成が、

「清正が、かってに豊臣の姓を名のったり、小西行長の悪口をいいふらしたり、家来たちが明国人の金をぬすんだりしている」

と、秀吉へ知らせたりしたからだ。このため、加藤清正は秀吉から、ひどくしかりつけられた。

朝鮮からひきあげてきたとき、清正たち七人の武将は、すでに秀吉も死んでいたので、

「では内府（家康）に、三成のことをうったえよう」

しめしあわせて、徳川家康など五大老へ、

「三成のいいかげんなやりかたを、こらしめていただきたい」

うったえでた。

しまいには、
「めんどうじゃ。三成をころしてしまおう」
と、兵をくりだし、三成のいのちをねらったりしたものだから、家康は、
「大阪や伏見にいてはあぶないから、しばらくの間、佐和山へかえっていてはどうか」
と、三成にすすめ、三成もしょうちをした。
小さいときから本をよむこともなく、戦場で敵の首をとることをほこりに思って生きてきた加藤清正のような武将と、
「いくら落ちぶれても、学問をおこたるな」
との父、正継の教えをまもり、かたときも書物をはなさなかった三成とでは、どちらにせよ気持ちも通じあわなかったといえよう。
石田三成は、徳川家康のいうままに、佐和山の城へかえった。
家康のいうことをおとなしくきいてはいても、
(いまに、きっと家康は秀頼公をほろぼして、天下をとるつもりだ)
と、三成は信じていた。
三成は、
(なんとか、秀頼公が大きくなって、りっぱに政治がとれるようになるまで、われわれが力をあわせ、豊臣の天下をまもりつづけたい)
と、こころをきめていたのだ。

佐和山(いまの彦根市)へかえった三成は、自分の国の政治をととのえながらも、自分の味方になってくれる大名たちと、ひそかにれんらくをとりながら、
(機会がきたら、こちらもできるかぎりの兵力をととのえ、家康と戦わねばなるまい)
とじゅんびをおこたらなかった。
三成は、領民をかわいがり、よい政治をおこなっていたし、りっぱな武士を見つけると費用をおしまずに出して、自分の家来にした。だから、三成のために死のうという者も、たくさんいたのである。
また、三成をにくむものがあるなら、家康をにくむものもいる。
家康とおなじ五大老のひとりで、会津百二十万石の大名、上杉景勝も、
「家康の、このごろのいばりかたはどうじゃ。まるで自分が天下をとったつもりになっているではないか」
おもしろくない。
だから、上杉が石田三成と手をむすび合ったのも、「なるほど」と、わかる。
徳川家康も、
(ははあ、石田と上杉は、わしのことをほろぼそうとしているな)
すでに気がついている。
だから、会津(福島県)の国もとへ帰っている上杉景勝へ、
「そちらでは、ほうぼうへ新しい城をきずいたり、浪人をめしかかえたり、何やらいくさの準備にか

かっているそうだが、けしからぬことではないか。一度、こちらへきて、わけを話してもらいたい」

と、なんども家康はいってやった。

むろん、景勝はいうことをきかない。

家康がさしむけた使いのものも、追いかえされるしまつである。

「よし。こうなっては上杉景勝を討つよりしかたがない」

ついに、徳川家康は、遠い遠い会津の国まで、上杉景勝を攻めに出かけることになった。

石田三成は、このときを待っていた。

「家康が上杉攻めに出かけたるすに、こちらでも兵をあげよう。そして、上杉とこちらとで家康をはさみうちにしてしまおう」

これが、三成と景勝との作戦であった。

ところが……。

徳川家康は、

「それくらいのことは、わかっている。わしは、それを待っているのだ。むこうからいくさをしかけてくるのなら、こちらも負けてはいない。この機会に、わしにさからうやつどもを、みんな討ちほろぼしてくれよう」

なにもかも知ってのうえで、伏見を出発した。

伏見の城へは、重臣の鳥居元忠に千八百人の兵をあたえて、

「わしが去ったあとで、きっと、この城へ石田方の軍が攻めよせてくるであろう。ごくろうじゃな」

なみだをうかべながら、しみじみといった。

鳥居元忠は、

「なんの、平気でござる。会津攻めには一兵でも多くひきつれておいでなされ」

と、こたえた。

元忠は、伏見城で死ぬかくごをきめていたのである。

この年の六月十八日に、徳川家康は伏見城をでて、七月二日に江戸城へかえり、いよいよ上杉攻めの準備にとりかかった。

徳川家康

徳川家康は、一五四二年（天文十一年）の十二月二十六日に、三河の岡崎城で生まれた。

家康の父、松平広忠は、このとき十七歳であったというから、ずいぶん若い父親である。

このころの松平家は、三河の小さな大名であった。

となりの国々には、今川義元や織田信秀（信長の父）などの強い大名たちがいて、家康も、その父も、さんざんに苦しめられた。

松平氏の先祖も、これもいろいろに説があるけれども、ほんとうのところは、よくわかっていない。

とにかく、家康より九代もまえの松平親氏のころ、三河（愛知県）の山あいにある松平という土地

の大将となっていたらしい。
それから、だんだんに勢いをのばし、力をたくわえ、家康の祖父、清康のころに、岡崎へでて城をきずき、ここを松平家の本城としたのである。
この清康は、すぐれた大名であったが、二十五歳のときに自分の家来に、ふとしたことで殺されてしまった。
このため、松平家の一族の中であらそいがおこり、本家をついだ広忠のいのちもあぶなくなる、というさわぎになった。
広忠は、このとき十歳で、岡崎にいてはあぶないというので、伊勢の国へ逃げていったこともある。
だから、松平家は今川義元の力をかりて、ほそぼそと生きてゆかねばならなかったのだ。
「かわいそうじゃが、この子に今川家へ人質にいってもらおう」
と、松平広忠は、わが子の家康を今川義元へあずけることにした。
このとき、家康はわずかに六歳であった。
父の広忠としては、
「けっして、あなたにそむきません」
と、今川義元へちかいをたてた、そのしょうこに、わが子をあずけたのである。
それで、もしも広忠が今川家にそむくことがあれば、たちまちに、わが子の首を切られてしまうことになる。

人質というものは、こうしたものなのである。
家康は、まだ、ものごころもつかぬうちから親の手もとをはなれて、他人のところへあずけられてしまった。
家康の苦労は、このときからはじまっていた。
まだ、家康は不幸はつづく。
家康が八歳になったとき、父の広忠が、またも家来に殺されてしまった。
親類でも家来でも、ゆだんのならぬ戦国時代なのだ。
少年のころの家康は、岡崎にいる家来たちに会うときも、
「よろしゅうございますか？」
いちいち、今川義元のゆるしを待たなくてはならない。
「おかわいそうに」
「よし、いまにきっと若殿をおむかえして、松平家にむかしのような、さかんな勢いをとりもどそう」
「よし、やろう」
家来たちも、小さな主人といっしょに苦労をしてきた。
ひどいめにあっている主人についている家来たちだから、数は少なくても、みんなこころのしっかりしたものばかりがのこっている。
こうして、徳川家の強い団結の力が生まれたのだ。

織田信長が、桶狭間で今川義元の首をとったとき、家康は、いうまでもなく今川軍について戦っていたのである。義元が死んでから、はじめて岡崎城のあるじとして、家来たちのところへ帰った。

そして、家康は織田信長にしたがうことになる。

家康が、松平の姓をすてて、徳川家康とあらためたのは、一五六六年(永禄九年)、二十五歳のときであった。

このころの家康については、すでにいろいろとのべてきたつもりだ。

読者は、もう一度、織田信長のうたがいをとくため、家康が、わが子の信康に腹を切らせたときの話を思い出していただきたい。

自分の国と家来をまもるためには、

「どんなつらいことでも、じっとがまんしなくてはならぬ」

という考えが、家康のこころにしみついている。

六つのときから、国と家のために人質にだされた人間でなくては、とてもできぬことだ。

信長が急死したときも、秀吉に天下をとられてしまった。

しかし、このときも家康は、

「けっして負けてはいないのだぞ」

という自分の力を、秀吉に見せたうえで、秀吉にしたがうことにした。

力にまかせて、たいせつな家来を戦争で死なすことは、

「なによりもつらい、いやなことじゃ」

と、家康は思っている。

いったん、したがうときめたら、家康はけっしてそむかない。だから信長も秀吉も、家康の底力をおそろしいと思いながら、

「徳川どのは、まじめな人じゃ」

と、ほめないわけにはゆかなかった。

だが、豊臣秀吉も死んでしまった。

そうなると、五十九歳になった徳川家康の力と勢いは、どの大名よりも強く大きい。

「いまこそ、わしが天下をおさめるときがきた。わしが出てゆかぬと、いつまでも日本に戦争がなくならないだろう」

と、そこまで家康は、自信をもつようになっていた。

だからこそ、伏見城のるすをまかせた家来の鳥居元忠が、戦死することを見ぬいたうえで、上杉攻めに出ていったのである。

さて……。

徳川家康が去ったのち、石田三成は、五奉行の大谷吉継、長束正家らと相談をし、五大老の毛利輝元、宇喜多秀家も味方にすることができた。

こうして、いよいよ三成は軍隊をととのえ、大阪城を占領した。

この三成の軍を西軍とよび、家康の軍を東軍とよぶ。

石田三成は、

「家康は、なき太閤殿下の前でとりきめたちかいを十七もやぶった。これは、けしからぬ罪をおかしたことである」

と書類をつくり、これを大名たちへ送り、家康へも送りつけた。

そして、伏見城を攻めた。

かねて、かくごをしていた鳥居元忠は必死で戦い、十日あまりも城をまもったが、ついにやぶれ、元忠以下、徳川のさむらいは、全滅した。

徳川家康は、江戸城を出て、野州（栃木県）の小山まできたところで、西軍がいくさをしかけてきたことをきいた。

家康も、すでにかくごをしている。

さっそくに、上杉攻めにしたがっている大名たちをあつめ、

「おのおのが、どちらへ味方をしても、それは自由である」

思いきって、いった。

すると、豊臣家には恩をうけている福島正則などが、

「われらが先ぼうとして、西軍にむかいましょう」

と、ちかいの証文を書いた。

これが、きっかけとなり、大名たちは、ほとんど家康とともに西軍と戦うちかいをたてた。

なかには、信州上田の城主、真田昌幸、幸村の父子のような大名もいて、

「わしらは、西軍の味方じゃ」

さっさと兵をまとめ、真田父子は上田の城へかえってしまった。

このののち、真田父子は、家康の子の徳川秀忠がひきいる三万の大軍を上田城にむかえて戦い、ついに秀忠軍は関ヶ原の決戦場へ間にあわぬことになったのである。

徳川家康は、いったん江戸城へかえり、八月の末までうごかなかった。

そのころ、石田三成は西軍をひきい、美濃（岐阜県）の大垣城へはいった。

東軍の先ぽう部隊も、すかさず尾張の清洲城へはいり、さらに、岐阜城を攻めおとして、ここへはいった。

このとき、西軍にくわわり、岐阜城をまもっていたのは、織田信長の孫秀信であった。

秀信は、あの三法師丸だ。祖父信長が死んだとき、豊臣秀吉の腕にだかれて、織田家のあとつぎとなった三歳の三法師が、いまは二十一歳の岐阜城主になっていたのである。

秀信は、家康にこうさんしたのち、高野山へはいって、五年後に病死した。

こうして、東西両軍は、岐阜と大垣の城へそれぞれにはいったが、さらに東軍は、大垣城の西六キロ（一里半）ほどの赤坂まですすみ、ここで両軍は、にらみ合いのかたちになった。

「これで、天下分け目の決戦場も、きまったようなものじゃ」

と、徳川家康は、三万あまりの本軍をひきいて、江戸城を出発した。

会津の上杉景勝には、

「たのむぞよ」

と、伊達正宗など、東北地方の大名たちに見はりをたのんでおいてある。

そして、家康の本軍は、九月十四日に赤坂へついた。
決戦の日がいよいよ近づいてきた。

関ケ原の決戦

うごきだす両軍

東軍の総大将である徳川家康が、戦場にあらわれたことによって、
「いよいよ、戦いのときがきた」
と、両軍とも気持ちがたかぶり、この日の午後に、赤坂と大垣の間をながれる杭瀬川で、両軍の小さないくさがおこなわれた。
このときは東軍が、ひどい負けかたをした。
赤坂の町のはずれにある岡山という丘の上の本陣で、このようすを見ていた家康は、
「たいせつな決戦の前に、あのような小さないくさをして、兵力をうしなうとは、けしからぬことだ」
きげんがわるくなり、
「こちらの兵をひきあげさせよ」
と、命じた。

このとき家康は、五十九歳の老いた顔に、血をのぼらせ、
「ここで足ぶみをしていてもはじまらぬ」
大声になり、
「かまわぬ。まっしぐらに大阪へすすもうぞ」
と、いいはなった。
目の前の大垣城にいる石田三成の西軍なぞにはかまわず、大阪城を攻めおとそうというのだ。
大阪城には、豊臣秀頼をまもって、毛利輝元がいる。秀頼がいるこの城は、いうまでもなく豊臣家の本城である。
「大阪へむかうみちみち、石田の城がある佐和山をはじめ、ほうぼうにあつまっている西軍は、みなうちやぶり、いっきょに大阪へすすむのじゃ」
いままでは、おだやかだった徳川家康も、ひさしぶりのいくさにのぞみ、思いきったことをはじめようとしている。
いま、家康のひきいる東軍が大阪へすすむとなれば、西軍の大垣城を左手に見ながら中山道とよぶ街道を西へすすみ、山と山の間をぬけて関ケ原の平地を通り、佐和山から、琵琶湖にそって京都へ…
…さらに、大阪へということになる。
「それ、出発のじゅんびをせよ」
と、家康は、かくすこともなく命令をくだした。
なにしろ、大垣城の敵は一里半（六キロ）の近くにいることだし、たがいにてい察の兵をだした

り、スパイをだして、ようすをさぐらせているので、
「東軍は、いっきょに大阪へすすむらしい」
と、大垣城へも知らせがはいった。
家康は、わざと、かくしもせずに、こちらの作戦を敵に知らせるようにしたのだ。
（どちらにせよ、こうしておけば敵も大垣城を出て、こちらへ決戦をしかけてくるであろう）
家康は、そう思っている。
大垣城では、石田三成を中心に作戦がねられた。
「今夜、赤坂の家康本陣へ攻めかかろうではないか」
「ぐずぐずしていることはない。今夜を決戦のときにしよう」
「いかにも。家康のさそいにのるよりも早く、こちらから攻めよせたほうがいい」
勇敢な作戦をもちだす人もいる。
だが、石田三成のこころは、まよっていた。
（家康は、きっと、こちらが夜に攻めていくことを、けいさんに入れているだろう。そこへ攻めていっては、かえってあぶない）
と、思ったり、
（くらい夜のやみの中でのいくさは、めちゃめちゃになって、敵も味方も見わけがつかなくなる。そんなことをして、たいせつな決戦にまちがいでもおこしたら、とりかえしがつかなくなるだろう）
まよいつづけていた。

三成は、頭のはたらきが、あまりにもこまかくするどいので、かえって作戦を考えすぎてしまい、まよいがおこるのだ。

あまりに、三成がまよいつづけて、にえきらないので、仲のよい小西行長でさえ、

「三成どのは、夜のいくさがあぶないといわれるが、子供のあそびではあるまいし、いちいち、することをあぶながっていては勝てるものか」

と、おこりだしてしまった。

島津義弘、宇喜多秀家も、おなじように三成の決心がつかぬことに、

「これでは、とてもいくさにならぬ」

ふきげんになった。

小西、島津、宇喜多の三将は、かねてから三成が、

「いちばん、たのみにできるのは、この三人の勇士たちである」

といっていたほどだ。

その三人が、三成にあいそをつかしてしまったのである。

もちろん、三人の夜襲作戦に反対するものもいたし、ついに三成も、

「敵がうごくより先に、わが軍は大垣城を出て西へすすみ、関ケ原に陣をかまえ、あとからすすんでくる東軍をむかえて決戦することにしよう」

と、こころをきめた。

「そのようなことをしたら、みすみす家康のはかりごとにのせられてしまう」

小西行長は反対したが、けっきょく、石田三成の命令によって、西軍は関ケ原へすすむことになった。

そのころ、雨がひどくふりだしていた。

戦場の霧

西軍が大垣城を出たのは、夜の七時ころであった。

大雨の中に、火もつけず、ひそかにひそかに、西軍はずぶぬれになって、南宮山のふもとを南にまわり、関ケ原へすすんだ。

この南宮山には、長束、安国寺、長宗我部などの西軍の将が兵をひきい、陣をかまえていた。

石田三成は、

「戦いがはじまったら、関ケ原の本陣でのろしをうちあげる。それを合い図にして、あなた方は山を下り、敵にせめかかるように」

と、南宮山の西軍に命令をつたえ、なおも雨の中をすすみ、十五日の午前三時ごろには、関ケ原の北のはずれにある笹尾山へ本陣をかまえた。

そのころ……。

徳川家康も、七万あまりの東軍をしたがえ、赤坂を出て、垂井の町へはいっていた。

垂井の町は、南宮山の北がわにある。

つまり、西軍は山の南がわをまわって関ケ原へすすみ、東軍は北のふもとの道をまっすぐに決戦場へむかったことになる。

そして家康は、関ケ原の東のはずれにある桃配山へ本陣をかまえた。

雨はふりつづいている。

両軍とも、戦いのじゅんびにいそがしい。

まもなく、朝になろうとしていた。

夜は明けたが、雨が霧にかわった。

山も野も林も、乳色のこい霧につつまれ、どこに敵がいるのか味方がいるのか、まるでわからないほどであった。

ときに、一六〇〇年（慶長五年）九月十五日で、現代では十月二十一日にあたる。

石田三成は、笹尾山の本陣にいて、まだ心配そうな顔つきであった。

（もしも、わしをうらぎるものが出たら……）

そのことが気にかかる。

それというのも……。

松尾山に陣をかまえている、西軍の小早川秀秋のようすがおかしいのだ。

ひそかに、徳川家康が、

「いざというときに、こちらがわについてもらいたい」

と、使いの者をおくり、小早川秀秋をさそいこんでいるらしい。

「小早川どのは、あてにならぬ」

と、三成の親友、大谷吉継もいっていた。

その大谷吉継は、病気のからだによろいをつけ、小早川部隊のいる松尾山のふもとに、陣をかまえているはずだ。

「小早川を、よく見はってくれ」

三成は、大谷によくたのんである。

白くたちこめる霧の中に、両軍から斥候の兵が出て、たがいに陣形をさぐり合った。

午前八時ごろ……。

ようやく霧がうすれかかった。

戦いは、まず東軍の井伊、松平の隊と、西軍の宇喜多隊によって、火ぶたがきられた。

鉄砲隊が、どっとくりだす。

ごうぜんたる銃声が、山野にとどろくや、

「わあ……！」

「うおお、うおお……！」

やりのほさきをつらね、両軍がぶつかりあった。

両軍は、のろしをあげて、味方にいくさがはじまったことを知らせた。

戦う東西両軍

関ケ原は、東西二キロ、南北二キロの平原で、北西に一・五キロほど平地がのびている。四方を山にかこまれた平原をぬけ、山と山の間をぬって通じる道は、中山、北国、伊勢の三街道である。

西軍は、これらの道が京都、大阪へのびているところ……つまり、関ケ原の北、西、南、にかけて陣をかまえた。

東軍は、関ケ原の東から、まっすぐにすすんで戦場へのぞんだわけである。

東軍は、黒田長政の隊が山のふもとにまわって、

「それ、かかれ！」

いきなり、石田本陣の左がわから、いっせいに鉄砲をうちかけてきた。

このとき、本陣の前にいた石田三成の家来、島左近は、

「押しもどせ。一歩もひくな、ひくな！」

隊を二つにわけて、黒田隊へつっこんだ。

すると、これを見た細川、加藤の東軍が、

「黒田をたすけよ」

猛然として、島左近の隊へおそいかかる。

軍馬のいななき、銃声、突撃のさけびが、石田本陣のまわりにゆれうごき、

「島左近をたすけよ」

と、本陣の石田三成も命令をくだす。

すさまじい戦いがはじまった。

この戦いで、島左近は重傷をうけて、はたらけなくなり、石田本陣もあぶなかったが、

「ひくな、ひくな！」

三成もけんめいである。

ついに、三成の本隊が東軍を追いはらった。

いっぽうでは……。

西軍の宇喜多隊を、福島正則の隊へゆずった井伊、松平の東軍は、

「島津はつよいぞ。つよいものを早く討ってしまえ！」

ときの声をあげて、笹尾山の南にいる西軍の島津義弘の隊へ、とつげきしていった。

島津隊は、陣地の前に竹と木でつくったさくをもうけ、このさくの間から鉄砲をうつ。鉄砲隊は三つにわかれていて、かわるがわるうつものだから、東軍もなかなか近よれない。

しかし、鉄砲をうつだけで、島津隊は戦場へ出てこようとはしない。

寺沢、古田などの東軍も、小西行長の隊とぶつかり合い、もうれつに戦った。

霧が雨にかわった。

そして「あっ」という間に、時がながれていった。

徳川家康は、
「本陣をすすめよ！」
と、桃配山からおりて、戦場へあらわれ、
「松尾山の小早川はどうした？」
しきりに、家来たちへ問いかけた。
この戦場で、西軍の小早川秀秋が自分の味方になるように、かねてからさそってあった。
しかし、松尾山の小早川隊一万三千は、まだ山の上にいて動かず、戦いのありさまを見おろしているではないか……。
石田三成も、
「早く山をおりて、敵に攻めかかってくれ」
何度も使いをだしているのだが、小早川隊は、こちらのいうこともきかない。
つまり、小早川秀秋は、
（もう少し、ようすを見て、どっちか勝ちそうなほうへ味方しよう）
と、思っているのだ。
なんというひきょうな大将であろうか。
すでに、ひる近くなった。
引いてはすすみ、にらみ合っているかと思うと、またも突き合って戦う。
どちらかといえば、西軍のほうが東軍をおしつめ、圧迫してきた。

一里（四キロ）四方の平原に、数万の兵がひしめき、やりと刀をふるってもみ合い、おし合っている。
徳川家康は気が気でなく、
「本陣を、もっとすすめよ」
と、戦場のまん中までできて、
「小早川め、なにをぐずぐずしておるのじゃ」
足をふみならし、手のつめをかみながら、じりじりしていた。
「よし」
家康はついに、
「こうなれば、小早川へ鉄砲をうちかけよ！」
はげしい声で命じた。
すぐに、東軍の鉄砲隊が松尾山のふもとまですすみ、いっせいに射撃をおこなった。
だ、だだあん……！
ものすごい鉄砲の音だ。
松尾山にいた小早川秀秋も、
「徳川どのがおこっているぞ。こうなればもうしかたがない。東軍へ味方をしよう」
こころをきめた。
「うわあ……！」

松尾山の小早川隊が、いっせいに山を下りはじめると、山すそにいた、これも西軍の脇坂、朽木隊なども味方をうらぎり、小早川隊といっしょになって、西軍へとつげきしてきた。

「やはり、小早川たちはあてにならなかったわい」

これを見た西軍の大谷吉継は、四千の兵をひきい、

「これが最後じゃ」

病気なので、兵たちにかつがせたこしの上へのり、戦いの指揮にあたるため、陣地へくだっていった。

大谷吉継は、友だちの石田三成から、こんどのいくさのことをきいたとき、

「徳川どのといくさをするのは、よろしくない」

しきりにとめた。

だが、どうしても三成がいうことをきかず、

「たのむ、味方になってくれ」

そういわれて、

(わしと石田との友情は、ふかくてあついものだ。友をうらぎることはできない)

死ぬかくごで、西軍にくわわったものである。

四千の大谷隊が、ふんとうしたのちにやぶれ、大谷吉継も戦死をすると、にわかに戦場のようすがかわってきた。

小早川隊などのうらぎりをきいた西軍は、急にみだれはじめ、小西、宇喜多の隊が戦場から逃げはじめた。

このときになっても、まだ南宮山の西軍は戦場にあらわれなかった。

石田三成は、必死にいくさの指揮をとっていたが、敵が、どしどし本陣めがけておしよせてくるので、

(もはやいかぬ)

わずかな家来とともに、三成は笹尾山の本陣をすてて、山道づたいに伊吹山の森の中へ逃げこんでいった。

これで、西軍の負けがきまったようなものだ。

このときまで、じっと戦場のようすを見ていた西軍の島津隊が、とつぜんに陣地をでて、むらがる東軍の中をかけぬけ、退却にかかった。

うしろへ逃げるのではない。前にいる敵を打ちやぶって、逃げようというのである。

島津義弘が戦場にでなかったのは、石田三成のすることに不満であったからだろう。

義弘が、しきりにいいはった夜戦のことも、三成はしりぞけている。

「いくさのこともわからぬ三成の下では、はたらけるものではない」

と、島津隊はおこっていたらしい。

だからといって、小早川などのように、味方をうらぎるようなひきょうさはなかった。

そして……。

勝ち負けがきまったあとで、退却戦をはじめたわけだ。

これには、東軍もおどろいた。
すさまじい戦いのうず巻きの中を、島津義弘が切りぬけて、ようやくに戦場をはなれたとき、一千の兵が五十人ほどにへってしまったという。
戦場に秋の雨の音がきこえ、人馬のひびきもたえたのは、午後の三時ごろであったろう。

家康の勝利

関ケ原の決戦に勝った徳川家康は、つづいて、石田三成の佐和山城を攻めおとした。
このとき、三成の父、石田正継や兄の正澄も、城の中で自殺してしまった。
佐和山から大津へすすんだ家康は、大阪城にいる毛利輝元へ、
「あなたのことは、なんとも思っていないから、すなおに大阪城をあけわたしてください」
と、使いをやった。
輝元は、よろこんで家康をむかえいれた。
南宮山にいた毛利秀之は、輝元の養子で、ついに戦場へは出なかった。つまり、西軍にも東軍にも味方しなかったのである。
いろいろ考えてみると、西軍は、それぞれの大将たちはつよくても、それをまとめていく石田三成に、戦争をする大きな力がそなわっていなかったから、負けてしまったことがわかる。
三成も、えらい大名であるが、このように大きな戦争をするとなれば、やはり徳川家康にはかなわ

ない。戦死した大谷吉継がいったように、なってしまったのである。
ところで……。
逃げた石田三成は、
(なんとか生きのびて、もう一度、家康と戦うのだ)
そのつもりで、しまいには腹をこわして病気になったうえ、ひとりきりとなって、山の中や村々を逃げまわったが、近江の国の古橋にある、三珠院という寺へかくれているところを、さがしにきた東軍の田中吉政にとらえられた。
これが、九月二十一日である。
三成は、やがて家康の前へひき出されたが、すこしもわるびれることなく、堂々として家康に会った。
このとき、三成の前を通りかかった福島正則が、
「きさまは、つまらぬいくさをおこしたうえに、いまのざまはなにごとか」
ののしると、三成は、
「わしは、武運つたなく、きさまを生けどりにして、いまのわしのようにできなかったことが、ざんねんである」
と、いい返した。
つぎに通りかかった黒田長政は、馬からおりて、
「三成どの。不幸にも、このようなすがたになられ、さぞ、ざんねんでござろう」

いたわりのことばをかけ、雨とどろによごれている三成の着物の上から、自分の羽織をぬいできせかけてやった。

すると、こんどは三成をうらぎった小早川秀秋が通りかかった。これを見た石田三成は、

「まて、秀秋。わしがおぬしのうらぎりを知らなかったのはおろかであったが、なき秀吉公からうけた恩をわすれ、わしとのやくそくをやぶったおぬしは、さむらいとしてはずかしくないのか」

と、どなりつけた。

小早川秀秋は、まっさおになり、声もなく、こそこそと、どこかへいってしまったという。

三成は、とらえられても恥とは思わなかった。

戦場から逃げたのも、

(家康をほろぼさなくては、豊臣家のためにならぬ)

と、思いつめていたからである。

小西行長や、安国寺恵瓊なども、とらえられた。

十月一日になると、三成、行長、恵瓊の三人は一台ずつの車にのせられ、京都の町の中をひきまわされたのち、六条河原の刑場で首を切られた。

三成の首は、ほかのふたりの首とともに、三条の橋のほとりにかけられ、さらしものにされた。

勝った大将は、負けた大将の首を、世の中の人びとに見せて、勝ったことを知らせるならわしなのだ。

石田三成の首のないからだは、むかしから三成と仲がよかった、京都の大徳寺の円鑑というえらい

坊さまがひきとって、大徳寺の中の三玄院という寺へほうむった。

いまも、三玄院には三成の墓がある。

江戸幕府

関ケ原の決戦に勝った徳川家康は、もう天下さまとおなじようなものであった。

家康の実力を、うたがうものはない。

一六〇三年(慶長八年)、家康が六十二歳になると、天皇は、家康に、

「征夷大将軍に任命する」

と、お命じになった。

足利将軍義昭が、織田信長に京都から追いはらわれてから、三十年ぶりに将軍がでたことになる。

日本の軍隊をしたがえ、天皇にかわって政治の責任をになう将軍がいて、命令をくだすところを、幕府とよぶ。

足利将軍のときは、京都の室町がその場所であったから、これを室町幕府とよんだ。

こんどの徳川将軍家康の本城は、江戸にある。したがって徳川の幕府を、江戸幕府とよぶのだ。

家康は、江戸の町づくりを、熱心にはじめた。

江戸城も、

「幕府のあるところだから、もっと、りっぱな大きい城にしたい」

と、家康は諸国の大名に命じて、城の工事にとりかからせた。
むかしは、家康も、信長や秀吉の城づくりをたすけて、はたらいたものである。
大名たちは、もう家康に、あたまがあがらない。
石田三成といっしょになって、いくさをしかけた上杉景勝も、いまはこうさんして、江戸城の工事の代表者のひとりとなってしまった。
国民も、武士も、大名も、
「もう戦争は、たくさんだ」
というこころになっている。
戦争のためにつかう費用や時間が、全国的に、人のくらしのためにふりむけられてゆく。
その中でも、新しい将軍の城がある江戸の町は、生き生きとした建設工事が、やすむことなくおこなわれ、何年もつづいた。
そして、家康は将軍になってから二年ほどすると、
「わしは隠居をして、将軍はせがれの秀忠にゆずる」
と、天下に発表をした。
このことは、
「徳川将軍は、わし一代かぎりでおわるのではない。何代も何代もつづいてゆくのだ」
という家康の決心を、ひろく天下にしめしたことになるのだ。
信長や秀吉とはちがい、家康にはしっかりした男の子たちが多い。それも、ほとんど成長してい

る。そのうえ、家来たちも力を合わせてはたらくことが、徳川家のむかしからの伝統になっている。
徳川家康は、将軍の位を秀忠にゆずると、自分は駿府（いまの静岡市）の城へうつり、隠居の身となった。
健康な家康は、隠居になっても、じっさいは幕府のために、いちいち命令をくだしたり、しごとをしたりした。そして、秀忠に、
「わしが死んだのちは、かならず、りっぱな将軍になるように」
さまざまに教え、うるさく小言もいった。
信長、秀吉と、うつりかわる世のありさまを、四十年も五十年も、家康は見つづけてきた。
しかも、自分は、かわいい子に腹を切らせるほどのつらい思いを、なんどもくりかえしながら、ようやくに天下を切りしたがえることができた。
それだけに家康は、六十をこえてからも、いそがしくはたらきつづけ、
「わしが死んだのちも、徳川の天下がつぶされぬようにしておかなくては――」
まことに、こまかいこころくばりをして、政治の土台をかためていったのである。
たくさんの大名たちが、徳川将軍にそむくことがないように、人質もとったし、きびしい態度でのぞんだ。
家康は、
「百姓たちを、わがままにしてはならぬ」
といい、

「幕府も、なるべくむだな金をつかわずに、金や銀を、たくさんためておかねばならぬ。大名や家来たちにも、めったに、ほうびの土地などをあたえぬように」

と、自分でも、質素なくらしをつづけた。

冬なども、城の御殿にいてたびもはかず、あかぎれだらけの素足のまま、廊下をあるいていたそうだ。

だから、家康も江戸幕府も、秀吉にまけぬほどの金や銀をたくわえていた。

このように、家康の力が、日本全国をしたがえるようになったのだから、

(大阪にいる豊臣秀頼も、わしに頭をさげるのがほんとうじゃ)

と、家康は思っている。

自分も、信長や秀吉の力の大きさをみとめたときは、いさぎよく、頭をさげてきている。それでなくては、いつまた戦争がおこり、天下がみだれるかしれたものではない。

豊臣秀吉の子の秀頼も、二十歳をこえた青年になっており、母の淀君とともに大阪城でくらしている。

家康の孫の千姫(秀忠の子)も、なき秀吉とのやくそくどおり、秀頼の妻になっているのだ。

家康は、これまでに、自分が京都へゆくたびに、秀頼へ、

「京都まで、あいさつに出ておいでなされ」

といってやったが、秀頼よりも母の淀君のほうが、

「どうしても秀頼を京都へゆかせるくらいなら、親子いっしょに死んでしまいます」

などと、なかなか、いうことをきかない。

淀君は、織田信長の妹(お市の方)のむすめだし、豊臣秀吉の子を生んだひとである。

(むかしは、家康のほうが、頭をさげてあいさつにきたのではないか。秀吉の子が、いまさら徳川へ頭がさげられようか)

という、強い気持ちもあるし、

(家康は、豊臣家があるかぎり、安心できないのだから、秀頼を京都へやったら、ころしてしまうかもしれない)

女だけに、そんな心配もある。

けれども、家康が七十歳のとき、京都へでていき、

「京へまいられよ」

と、秀頼にいってやったとき、加藤清正などのすすめもあって、淀君も、やっとしょうちをし、秀頼を京都へやって、家康にあいさつをさせた。それも、いやいやながらである。

これで、家康のきげんもいくらかは、なおった。

「秀頼どのは大きくなられて、めでたい」

といい、これからも自分にしたがうつもりなら、りっぱな大名としてめんどうを見てやるつもりだったかもしれない。

ところが……。

こののちも、淀君をはじめ大阪城にいる豊臣方は、

「豊臣家は、徳川へ頭をさげるいわれはない」
という態度をくずそうとはしない。
それどころか、新しく浪人者をめしかかえたり、鉄砲や火薬などの武器も買いこんだりしているらしい。
（これは、考えぬといけない）
と、家康は思いはじめた。
まだ豊臣秀吉に恩をうけた大名たちも多いし、いざとなれば、家康にそむいて、大阪城へあつまるおそれがないとはいえぬ。
（わしの目のくろいうちに、なんとか、豊臣家のしまつをつけてしまわなくてはなるまい）
徳川家康のこころが、しだいにかたまっていった。

豊臣家ほろぶ

家康の決心

一六一四年（慶長十九年）の夏も、おわろうとするころであった。
徳川家康は、
（これが、さいごじゃ）
と、豊臣秀頼と淀君の親子のこころを、たしかめてみることにした。
ちょうど、秀頼親子は、京都の方広寺をたてなおしたところで、その寺の鐘楼へかける大きなつり鐘も、できあがった。
この鐘に、ほりつけた文字に、
「国家安康、君臣豊楽」
というのがあった。
「これは、まことにけしからぬことじゃ」
徳川家康は、

「その鐘にほりつけた文字は、わしの名の家康という字の間に安という字をいれ、わしの名を二つに切ってしまっているではないか。これは、まことに失礼なことである。しかも、その下には豊臣家を天下にいただいて世の中がたのしくなる、という意味の文字がある。これは、徳川将軍家をばかにしているのと、おなじことじゃ」

と、豊臣秀頼へ文句をつけたのである。

もちろん、それは家康のかってな、むりやりの文句であった。

こうして文句をつけて、秀頼母子が自分へ頭をさげてくれれば、よいと思ったのだ。

家康も、七十をこえている。

死ぬ日が、もう目の前にきていた。

（わしが死ぬまえに、はっきりと豊臣家をこうさんさせておかないと、徳川将軍のためによろしくない）

だから、家康は急いでいたのだ。

家康の怒りが、あまりにはげしいので、豊臣家からも、

「あの鐘の文字は、けっして、そのような意味をこめたものではありません」

いいわけの使者が、家康のもとへかけつけたが、家康はしょうちをしない。

家康は、こういった。

「こうなれば、しかたがない。秀頼どのが徳川将軍にしたがうつもりなら、大阪城からでて、別の国へいってもらう。それでなければ、母ごの淀の方を人質として、江戸へ送ってもらいたい。この二つ

のうちの一つをえらびなさい」

家康の、このことばをきいた淀君は、火がついたようにおこりだした。気の強いひとだけに、このような家康のことばにしたがうことは、どうしてもできなかった。

家康にしてみれば、

（もしも、秀頼が二つのうちの一つをしょうちしたら、ゆるしてやってもよい）

と、考えていたのであろう。しかし、

「こうなれば、徳川を相手に戦うよりしかたがない。大阪方が立ちあがれば、なき太閤殿下に恩をうけた大名たちが、きっと味方になってくれるにちがいない」

秀頼も淀君も、豊臣の家来もそう思った。

そして、ついに豊臣秀頼は徳川将軍と手をきる決心をしたのである。

「よし、それならば……」

家康も、七十三歳とは思えぬほどの元気をあふれさせ、

「大阪方を討ちほろぼすぞ！」

と、いくさがはじまることを大名たちにも知らせ、天下にも発表した。

すでに秋となっていた。

「それ、いくさがはじまるぞ」

「徳川将軍が攻めよせてくる」

「こうしてはいられぬ」

まえから、大阪と江戸との間の雲ゆきがあやしくなっていることを知っていた大阪の町に住む人たちは、大いそぎで荷物をつくり、戦場になる大阪から逃げだすしたくをはじめた。

大阪冬の陣

十月十一日になると、徳川家康は五百人ほどの家来をしたがえて駿府の城を出発し、二十三日に、京都の二条城へはいった。

つづいて二代将軍徳川秀忠が、六万の軍をひきいて京都へはいる。ほかの大名たちも、ぞくぞくとあつまってきた。

こうして、徳川の東軍は、二十万ほどになったのである。

いっぽう、大阪の豊臣方は、どうか……。

「きっと、ほかの大名たちが、味方をしてくれるだろう」

と、思っていたことは、あてにならなかった。

豊臣家に恩をうけた大名たちも、

「いまここで、徳川将軍といくさをするなどとは、まことにばかなことをしたものだ」

はっきりと、いいだすものもいた。

そこで、大阪城にいて秀頼につかえている大野治長兄弟や木村重成、薄田兼相、明石全澄などの豊臣の家臣と、あとは、よせあつめた浪人たちで、いくさをはじめることになってしまった。

浪人といっても、真田幸村、長宗我部盛親、毛利勝永、後藤又兵衛など、世に知られた武士たちも多い。

したがって、武将としてもすぐれたこの人たちが、兵を指揮してかつやくすることになったのである。

ことに真田幸村は、関ケ原決戦のとき、父の昌幸とともに、上田城へたてこもり、徳川秀忠軍をひきうけて、一歩もひかなかった。

西軍が負けたため、幸村は父とともに紀州（和歌山県）の九度山というところへおしこめられていたが、

「ぜひぜひ、味方をしてくれるように」

との、豊臣秀頼のたのみで、十五年ぶりに九度山をぬけだし、大阪城へはいった。

父、昌幸は、すでに九度山で病死してしまったが、幸村の兄の真田信幸は、関ケ原のときから徳川家にしたがっている。

信幸は、家康の養女を妻にむかえていた。

大阪城へはいった真田幸村は、ほかの武将たちとの作戦会議の席上で、こういった。

「この城へたてこもったままで、徳川の大軍をむかえて戦うのはいけません。ほかにも味方の城があるのなら別ですが、われわれには、この城ひとつしかありません。一つだけの城で籠城のいくさをして勝ったためしは、一度もなかったように思います。こうなったからには、ご一同が力をあわせ、勇気をふるいおこして城の外へでて、大阪へやってくる家康へ攻めかかるべきです」

しかし、この幸村の思いきった作戦も、

「それはあぶない。大阪城は日本一の名城なのであるから、いくら徳川が大軍をもって攻めかかっても、かんたんには落とせまい」

秀頼をめぐる豊臣家の人たちは、みな反対をしたので、幸村もだまってしまった。

こんども、関ケ原の戦いのときと、おなじことになった。

ひとりひとりは、強くてりっぱな武将がいても、考えかたが、みんなちがう。

そこへ、淀君だの大野兄弟だのという、豊臣家の重臣たちが、いちいち口をさしはさむ。

それらをぴたりとおさえてしまうだけの、偉い総大将がいないのも、おなじであった。

それでも関ケ原のときは、石田三成がいて、味方の考えをまとめただけ、まだよかったのかもしれない。

大阪城の西軍は、十万ほどであった。

真田幸村は、後藤又兵衛とともに、

「なんとしても家康の本軍が、京都より、奈良からまわって大阪へはいるまえに、たたきふせてしまいたい。二万の兵をあたえてもらいたい」

強くいいはったが、きかれなかった。

それで幸村は、城の三ノ丸のほりの外へ「真田丸」と名づけたとりでをきずき、

(ここで、わたしは、自分の兵だけをもって、戦えるだけは戦いぬこう)

と、こころをきめた。

徳川家康、秀忠は、やがて、大阪城の南方四キロ（一里）ほどのところにある茶臼山へ本陣をかまえた。

大阪城のまわりのあちこちで、戦いがはじまった。

勝ったり負けたり、城の外では東軍がおしこんでいくが、西軍が城へはいってしまうと、どうにも手がでない。

さすがは、天下の大阪城であった。

ことに「真田丸」では、大将の真田幸村が出ては引き、引いては出る。

いるかと思うと、もういない。いないかと思うと、とつぜんに鉄砲をうちかけたり火薬を爆発させたりして、さんざんに東軍をなやまし、東軍の前田、松平の部隊などは、たくさんの戦死者を出してしまった。

家康は、

(このまま戦っていても、とうてい大阪城を攻めおとすのはむずかしい。むりやりに攻めかかっても戦死するものがふえるばかりだ。よし、なんとかしよう)

大阪城をきずいたとき、いまはなき豊臣秀吉は、

「この城を攻めおとす方法は、二つだけじゃ。一つは、二年も三年も大軍をもって城をかこみ、城の中の食べものがなくなるまで待つこと。もう一つは、うまくもちかけて、いったん戦いをやめ、そのすきに城のほりをうめ、こわしてしまう。そうしておいて、またいくさをはじめて攻めよせれば、もうだめじゃ」

そういったという。
家康は、この二つのうちの一つをえらんだ。
そしてまず、さかんに大砲で大阪城をねらいうちにしておいてから、
「どうじゃ。いくさをやめようではないか」
と、西軍へもちかけた。
真田幸村は、
「とんでもない。いまここでいくさをやめるのなら、はじめからしないほうがよろしいのだ」
と、いったが、毎日のように大砲のたまが、城の中へ落ちてきて、ものすごく破裂するので、淀君がおそろしがってしまい、
「ここのところは、いったんいくさをやめたほうがよくはないか」
しきりに、秀頼へたのむ。
豊臣秀頼も、この母のことばには反対であったが、けっきょく、東軍と講和することになってしまった。
講和のやくそくは、およそ、つぎのようなものであった。

一、大阪城の本丸をのこし、二ノ丸と三ノ丸にある戦争のための陣地などをこわしてしまうこと。
一、大野治長などが、人質をだすこと。

一、そして徳川家康は、城の中の西軍にたいして、なんの害もあたえぬこと。

こうして、十二月十九日になると、両軍はいくさをやめることになった。
いくさがおわると、
「それ、すばやくかかれ」
東軍は、大阪城のほりというほりをどしどしうめてしまい、二ノ丸や三ノ丸の門ややぐらなども、たちまちにうちこわしてしまった。「真田丸」も、もちろんこわされた。
「これでは、やくそくがちがう。二ノ丸、三ノ丸だけではなく、城のほりをみんなうめてしまってはこまるではないか」
あわてて、大阪城から使いの者が東軍へかけあいに出かけたが、東軍では、のらりくらりといいのがれる。
また使いの者をだす。
こんども東軍は、なんだかんだといって、ごまかしてしまう。
そんなことをしているうちに、うちこわしの工事がおわってしまい、ついに大阪城は、本丸だけのまるはだかになってしまった。
本丸というのは城の中心のところで、天守閣もここにある。
だが、いくら天守閣が空にそびえていても、まわりのほりがうめたてられ、いくさのための施設がなくなってしまっては、城が城の役目をはたすことができないのは、あたりまえのことであった。

大阪夏の陣

年があけて、一六一五年（元和元年）となった。

徳川家康は、二月になって、駿府の城へかえってきたが、

「城の中にいる浪人たちを、みんな追いはらってしまいなさい」

と、大阪へいってきた。

おこったのは豊臣家の人よりも、よせあつめの武将や浪人たちである。

「やくそくをやぶって、城をまるはだかにしておきながら、よくもよくも、そのようなことがいえたものだ」

「家康は、あきらかに、またもいくさをしかけ、この城を攻めつぶそうとしているぞ」

「しまったことをした。講和なぞするのではなかった」

「いまさら、そんなことをいってもおそい。こうなったら、こっちも早く、いくさのしたくをととのえておかぬと、なおさらにこまったことになるぞ」

まったく、することなすことに、大阪方は間がぬけている。

いつも秀頼のそばにつかえている重臣の大野治長などは、

「ここのところはがまんをして、家康も、もう年よりなのだから、家康が死ぬのを待つほうがよい」

と、思っていたらしい。

総大将の豊臣秀頼は、二十三歳になっていたけれども、小さいときから母の淀君にあまやかされているうえに、

（自分はこうしたい）

と、思っても、それを実行する力にかけている。つまり気がよわいのであった。

またも、新らしく浪人たちがあつめられた。関ケ原いらい、主人をうしなった武士が、どこにでもあふれている。

「大阪のいくさにくわわっててがらをたてれば、うまくゆくと、一国のあるじになれるかもしれぬぞ」

と、浪人たちは野心にもえてあつまってきている。

また、したくの金をもらって城へはいっても、

「金さえもらえば、用はない。どうせ大阪方は負けるのだ」

さっさと、逃げだしてしまうものもいた。

春もすぎようとするころ、徳川家康は、

「大阪では、またもいくさのじゅんびをしているそうな。まことにけしからぬではないか。よし、それほどにわしと戦いたいのなら、こちらもだまってはいないぞ」

などと文句をつけた。すべては、家康の思うようにはこんだのである。

「それ、大阪城を攻め落とせ！」

家康は、ふたたび大軍をひきいて、大阪へ出発をした。こんどの東軍は、十五万五千ほどの兵力で

あった。

またも東軍をむかえうつ大阪城の西軍は、五万とも七万ともいわれている。おそらく戦場に出たのは、五万ほどであったろう。

この最中に、

（なんとかいくさをしないで、すませないものか）

と、思っている大野治長が、くせ者におそわれ、重傷をうけるというさわぎがあった。

けれども治長の弟の治房は、

「戦うべし！」

と、さけんでいる。

大阪城の中は、このように足なみがそろわず、しかも徳川家康にこころをよせて、城中のようすをひそかに東軍へ知らせているものもある。

東軍では、七十四歳にもなる家康が、

「戦いは気力である。わしは、いざとなったら二十三歳の豊臣秀頼と一騎打ちの勝負をして、くみうちをやっても負けぬつもりじゃ」

らんらんと目を光らせ、みずから、戦場へでて全軍を指揮しようというのだから、大阪方とは、まるでちがっていた。

戦いがはじまると……。

こんどは西軍も、大阪城へはいっているわけにはいかない。まるはだかの城へはいっていても、負

けるだけだ。

それで、こちらからも攻めかけようというので、大和と河内の二つに別れてすすんでくる東軍へ、いくさをしかけた。

大阪方の塙直之が、和泉、樫井の戦いで戦死をした。

つづいて、五月六日になると、道明寺、八尾、若江堤などの戦いで、後藤又兵衛、薄田兼相、木村重成など、大阪方でも『これは』と思うほどのりっぱな武将たちが、あっけなく戦死をしてしまったのである。

どうも、大阪方の作戦は、いちいち家康の耳へ、もれていたらしい。

なにしろ、浪人者などをたくさんあつめている西軍であるから、東軍のスパイが、浪人者になって城中へはいりこむことなどはたやすいことなのだ。

このときも真田幸村は、戦場にでていたが、作戦のうちあわせが、どうもうまくゆかない。

「こうなれば、あしたの決戦におもうさま戦いぬいて、死ぬまでじゃ」

幸村は、兵をまとめて引きあげた。

五月七日の朝になった。

現代の暦では、六月三日にあたる。

真田幸村は、このまえの冬の戦いのときに、家康の本陣があった茶臼山まで出て、ここへ陣をかまえた。これが西軍の最前戦となった。

家康の本陣は、平野にある。

茶臼山と平野との距離は、一里あまり（五キロほど）であろう。
幸村は、この日の朝、わが子の大助に、
「おまえは城へもどり、秀頼公のおそばについていなさい」
といい、
「父上といっしょに戦死をしたいのです」
なかなかに、しょうちをしない大助を、やっといいきかせて、大阪城へかえした。
幸村がひきいる真田部隊は三千五百で、いずれも赤の旗をたて、赤のよろいに身をかため、
「あれが真田だ」
東軍にも、ひと目でわかった。
やがて、もうれつな鉄砲の音がおこりはじめた。
真田隊がいる天王寺口を中心に、両軍がいっせいにうごきだし、戦いはじめた。
真田幸村は、
「きょうは、最後の決戦ですから、秀頼公も西軍の総大将として戦場へでていただきたい。大将があらわれぬいくさでは、味方の勇気もおとろえてしまいます」
くれぐれも、大野治長へたのんであったが、ついに豊臣秀頼は、城の中から出てこなかった。
それに、うちあわせた作戦も、幸村のおもうようにはこばない。なにもかも、よせあつめの軍隊であるから、じゅうぶんにれんらくもとれない。
「もう、これまでじゃ」

幸村は、やりをつかみ、
「つづけ！」
まっさきに馬をあおって、戦いのうず巻きの中へ突きこんでいった。
幸村につづく真田隊だけは、
「幸村公とともに死のう」
みんな気がそろっているから、これも、すさまじいときの声をあげて東軍の中へ突撃する。
毛利勝永の部隊もこれをたすけ、三倍もの敵の中へ、キリをもみこむようにすすんで戦う。
「大御所（家康）の本陣へ、まっしぐらにすすめ」
と、幸村は、
（こうなれば、家康の首をねらって、さいごの戦いをするばかりだ）
思いきわめているから、まるで魔神のようなおそろしい戦いぶりで、五十歳の幸村がふるうやり先に、東軍の兵たちは、血しぶきをあげてたおれる。
「わあっ……！」
赤ぞろえの真田隊は、自由自在に敵中を突破し、
「あっ、御本陣があぶない！」
東軍のさけびをよそに、猛然として家康の本陣へおそいかかった。
「真田の兵は、日本一である」
と、このとき東軍にいた、薩摩の島津家では書きのこしているほどだ。

あまりにも幸村の突進がおそろしいので、家康をまもっていなくてはならぬ旗本の武士たちが、あわてて逃げだした。

ひどいのになると、大将の家康をすてて、十二キロ（三里）も逃げてしまったという。

いかに、真田隊のはたらきがおそろしいものであったかが知れよう。

徳川家康も、一時は、

「もういかぬ。わしは、ここで腹を切るから、だれか、わしの首をうって敵にわたさぬようにしろ」

と、かくごをきめたといわれるほどだ。

しかし、あぶないところで、家康は数人の家来にまもられ、逃げることができたのである。

どんなに真田幸村が強くても、人間のちからにはかぎりがある。家来たちも、ほとんど戦死をしてしまい、朝から戦いつづけている幸村も、いくつもの傷をうけてつかれきってしまった。

そして、幸村は、ついに敵に首をうたれてしまった。

幸村は別としても、西軍はこの日の戦場ではよくはたらいた。

両軍で、二万数千の戦死者がでたほどの激戦であって、この日のいくさにかぎり、関ケ原とはくらべものにならぬ西軍のはたらきだったといえよう。

家康ばかりではなく、将軍秀忠も逃げだしたほどであった。

東軍では、なんといっても松平忠直（越前、福井の城主）の部隊が勇敢に戦い、真田、毛利の西軍の力をそいだ。

松平隊の奮戦がなかったら、家康はもっとあぶないことになっていたろう。

真田幸村の戦死をさいごに、西軍は、どっとみだれはじめた。

こんどは東軍がおしかえし、ついに大阪城のまわりをひしひしと取りかこんでしまった。

大阪方では、家康の孫で、秀頼の妻になっている千姫を東軍へ送りかえし、

「なんとか秀頼公親子のいのちだけは、たすけていただきたい」

と、申しこんだが、

「ならぬ」

家康よりも、秀忠がしょうちをしなかった。

翌日の五月八日。

大阪城は火につつまれ、秀頼も淀君も、城中の蔵の中で、自殺をしてしまった。

大野治長などの家来、三十人あまりも、主人親子とともに死んだ。真田大助がこの中にいたことはいうまでもない。

こうして、豊臣家はほろびた。そしてこの戦争は、長い長い戦国時代がおわったことを、はっきりとしめすものであった。

家康の死

豊臣家ほろびてのち、大阪城へは、徳川家康の孫にあたる松平忠明が城主としてはいった。

家康は、

「諸国の大名は、本城一つだけをもっていればよい。あとの城は取りこわすように」
と、命令をくだし、さらに、全国の武士（大名をふくめて）にたいするおきてをつくった。これを
「武家諸法度」とよぶ。
さらに……。
皇室と公家にも、おなじようなおきてをつくり、天下に発表した。
すべては、徳川将軍の力を強くかためるためのものである。
こうして、江戸幕府が日本の政治をとりおこなうことについて、家康は死ぬまぎわまで、はたらいた。
（わしは、もう、つかれはててしまった……）
大阪の戦争がすむと、さすがに家康も、体力のおとろえを感じないわけにはゆかなかった。
それでもなお、家康は、秀忠のつぎの、徳川三代目の将軍についてまで、こころをくだいた。
そして、秀忠の子、竹千代をもって、
「三代将軍とする」
ことにきめた。竹千代は、のちに三代将軍家光となる。
このため、家康は駿府の城をでて、わざわざ江戸城へ出かけている。しかも、大阪戦争がおわった年にである。
年がくれ、年があけた。
一六一六年（元和二年）の正月を駿府の城でむかえた徳川家康は、七十五歳になった。

家康は、信長や秀吉のように、ぜいたくではなやかな趣味やあそびには、あまりこころをひかれなかったけれども、若いころから狩りは大好きであった。
「狩りにでれば、からだのためにもよいし、ついでに村や土地のようすを見ることができて、政治をおこなうのに、いろいろとためになる」
と、よくいっていた。
ところで、正月の二十一日。
狩りにでかけた家康は、その夜もふけてから、急に食べたものをはき、苦しみはじめた。
むかしの本によると、京都から、家康と親しい茶屋四郎次郎という商人が駿府の城へやってきて、家康に、
「このごろは、京のみやこで、めずらしい料理が流行しております」
と、いう。
「ほう。それは、どんな料理じゃ」
「タイの切身を、ごまの油であげて食べまする。まことに、おいしいものでして……」
つまり、タイの天ぷらというわけだ。
家康は、さっそくタイをとりよせ、天ぷらにして食べてみると、
「これはうまい。このようにうまいものがあるとは、知らなんだわい」
あまりにおいしいので、食べすぎて、腹をこわしてしまった。つかれがまだなおりきらぬ七十五歳の老いたからだだけに、

「どうも、いかぬ」
なかなか、病気はよくならなかった。
二月、三月とたつうちに……。
（わしのいのちも、もうこれまでらしい）
と、家康はかくごをしたらしい。
大名たちに、こういいのこした。
「わしは、まもなく死ぬであろう。なれど、将軍（秀忠）が天下をおさめているから、わしは心配をしていない。しかし、もしも、将軍のすることにまちがいがあるようなときは、みんなが将軍にかわって天下のことをおさめるがよろしい」
きっぱりと、いった。
わが子の秀忠が、将軍としての力がなかったら、かまうことはないから、これをしりぞけて、大名たちが天下をおさめよ、といったのである。
そして、
「天下は（日本の国）ひとりの天下ではない。天下の天下であるから、わしはけっしてうらみには思わぬ」
ともいっている。
そして、こんどは秀忠をよび、
「天下の政治については、すこしも道にはずれたことをしてはいけない。わしは、大名たちにもいっ

ておいたぞ。秀忠の政治が悪ければ、みんなで、かわって政治をとれとな」
「はい、よく、わかりました」
「わかっておればよい。しかし、大名たちが、こののち、将軍の命令にそむいて、とりきめた月日に江戸へでてこぬようなことがあれば、たとえ、徳川の親類であってもゆるしてはいけない。ただちに軍隊をさしむけて、討ちほろぼしてしまえ」
きびしく、いいのこした。
伏見城で、豊臣秀吉が死ぬとき、
「秀頼をたのむ、たのむ」
と、家康はじめ五大老に手を合わせてたのんだことと、死をまえにした徳川家康のようすとをくらべて見て、読者は、どのように思われるであろうか……。
もちろん、家康の死にぎわのほうが「りっぱ」だと思われることだろう。
けれども、秀吉の子の秀頼は、あのとき、まだ六歳の幼い子どもにすぎなかった。
家康の子で、すでに将軍になっている秀忠は、このとき三十八歳にもなっていたのだ。しかも、秀忠のあとをつぐべき将軍もきまっている。
家康にとっては、死をまえにしてのこころも、おのずから秀吉とはちがっていたことを、よく考えて見なくてはなるまい。
秀吉は、天下をとってからも、つぎつぎにこころいそがしく、城をたてたり戦争をしたり、一時も、じっとしていられないところがあった。そして、やっともうけた子が、まだ六つにしかならない

のに死んでいったのである。この世にこころがのこることも多かったことであろう。

ふたりには、そうしたちがいがある。

徳川家康は、若いころから刀ややりをつかんで戦場で戦いぬき、血みどろの苦労をかさねながら、信長や秀吉のすることをじっと見まもってきた。

ふたりのよいところも、わるいところも、じゅうぶんに見きわめ、自分の力を大きくすることに役だてていけたのである。

からだもじょうぶで長生きをし、信長と秀吉がまとめた天下をひきつぐという幸運もあった。

その幸運も、家康の力がつかみとったものではあるが……。

四月十七日の午前十時ごろに、徳川家康は、駿府の城で息をひきとった。

その遺体は、久能山へうつされ、さらに翌年の春になると、下野（栃木県）日光山へうつされた。

日光の東照宮は、家康を神さまにしてまつった神社である。

こののち、徳川将軍は十五代もの長きにわたってつづき、日本をおさめた。

日本は外国との交際をやめ、国をとざした。そのため二百五十年の間も、ほとんど国内に戦争さわぎがおこらなかった。

この意味では、この時代の世界の国々の中でも、日本は、ただ一つの平和な国であったのである。

そうして、よいにつけ、わるいにつけ、この長い長い平和は、日本だけがもつ、独特の文化と国民性をつくりあげることになった。

信長と秀吉と家康　定価 八五〇円
昭和五十六年 六月三十日　発行

著作者　池波正太郎
発行者　角谷奈良雄
発行所　株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一番地
振替・東京六一二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

無検印承認
ISBN4—8088—0010—1

時代・現代・推理…小説の宝庫

ハンディー・瀟洒の全書判
優美・廉価の四六判軽装本
豪華・堅牢の四六判上製本

池波正太郎
錯乱・賊将
直木賞受賞作を始め、池波文学の粋
軽装本 ¥950

池波正太郎
夜の戦士
名将信玄と青年忍者笹之助の暗闘！
上製本 ¥1300

池波正太郎
戦国幻想曲
槍一筋で奔放に生く勘兵衛戦国無頼
上製本 ¥980

池波正太郎
夢中男
仇討にも女にも商にも夢中に徹す男
軽装本 ¥880

池波正太郎
幕末新選組
神道無念流の達人永倉新八の生涯！
全書判 ¥590

池波正太郎
信長と秀吉と家康
天下統一の野望を果した三人の素顔
軽装本 ¥850

池波正太郎
幕末遊撃隊
突如書を捨て剣の腕を磨く伊庭八郎
上製本 ¥880

池波正太郎
江戸の暗黒街
悪者の群とそれを誅そうとする女共
軽装本 ¥900

池波正太郎
この父その子
江戸時代の諸相の表裏を描く珠玉集
上製本 ¥900

池波正太郎
黒幕
覇者の代る戦国に時勢を操る蔭の男
軽装本 ¥850

池波正太郎
西郷隆盛
西南の役逆賊とし倒れるまでの波乱
軽装本 ¥750

池波正太郎
剣客群像
天稟と試練で達した剣鬼とその苦悩
軽装本 ¥880

池波正太郎
戦国と幕末
戦国から元禄を経て幕末へ…歴史譚
軽装本 ¥900

池波正太郎
青空の街
心に青空を求めて喜び悲む男女の群
軽装本 ¥980

高木彬光
江戸悪魔祭
悪魔祭の謎を追う新八郎！時代推理
軽装本 ¥800

高木彬光
鬼来也
中将将棋駒に秘められた妖気と殺気
軽装本 ¥680

高木彬光
蛇神様
蛇神様を祀る幽玄の森に漂よう妖気
全書判 ¥650

高木彬光
まぼろし姫
謎の掛軸をめぐり悪旗本と将棋党が
軽装本 ¥750